

シリーズ 視覚障害者の大学進学 別冊

視覚障害学生実態調査報告書

平成29年（2017年）6月 改訂

全国高等学校長協会特別支援学校部会
全国高等学校長協会入試点訳事業部
全国盲学校長会大学進学支援特別委員会

はじめに

視覚障害のある学生が大学のさまざまな学部・学科に進学するようになり、大学における学習支援のための相談が視覚特別支援学校（盲学校）に多く寄せられています。また、盲学校の生徒が大学受験をする際に、事前に行われる話し合いの場でも、入学試験の実施方法だけでなく、入学後の授業への参加、教科書の点訳や拡大などの墨字の最適化の体制、定期試験の実施方法、大学で備えるべき支援機器、通学および学内の移動方法などが話題になります。

本委員会ではこれまで、全国高等学校長協会特別支援学校部会から頂いた補助により、パンフレット「視覚障害者の大学進学」として、入学試験・学生生活・支援機器・就職の4つのタイトルにまとめ作成し、各大学や盲学校等に配付してきました。2008年度には、各大学に在籍中の視覚障害学生を対象に、学生生活をおこなう上で受けている支援の現状と本人が本来希望している支援についてアンケート調査を実施し、当事者の声をシリーズの別冊「視覚障害学生実態調査」としてまとめ、2009年に配付しました。

2008年度のアンケート調査から時間が経ち、その間に、障害者差別解消法の成立や国連の障害者の権利に関する条約の批准など、社会の環境も障害者にとってよい方向に進んできました。そこで、改めて2015年度に同様のアンケート調査を行いました。今回も、前回同様40名を超える視覚障害学生から回答が得られ、貴重な意見も多く寄せられました。このたび、2015年度の調査結果をまとめ、さらに2008年度の結果と比較し、分析して、本報告書にまとめました。

本報告書が、視覚障害学生をとりまく多くの方々に読まれ、よりよい支援の参考となることを祈念する次第です。

最後になりますが、2015年度の調査を実施するにあたり、科学研究費補助金（奨励研究）を受けました。また、今回の調査および報告書の編集をしてくださいました筑波大学附属視覚特別支援学校の清和嘉子氏、2008年度の調査時から調査項目の検討や結果の分析、報告書の作成において貴重な助言を頂きました筑波大学附属視覚特別支援学校の青松利明氏に御礼申し上げます。そして、直接一人一人の学生達にインタビューをし、データをまとめてくださった宮内亜依さん、宮内洋輔さん、筑波大学人間学群障害科学類（当時）の渡辺結衣さん、筑波大学大学院人間総合科学研究科障害科学専攻（当時）の加藤彩さん、福田奏子さんに感謝いたします。

平成29年6月

全国盲学校長会大学進学支援委員会委員長

柿澤 敏文

目 次

はじめに	1
調査目的	3
調査方法	3
調査結果の概要	4
調査結果の詳細	
1. 対象者のプロフィール	8
2. 入学前の支援	10
3. 資料の入手	12
4. 資料の提出	32
5. 講義等	45
6. 定期試験	52
7. 図書館・参考資料室	57
8. 学習室・専用ロッカー	60
9. 支援機器・視覚補助具	61
10. 施設・設備	66
11. 視覚に障害のある友人との関わり	67
12. 大学生活	70
13. 高校時代に身につけておくべき力	72
おわりに	73

調査目的

2008 年度に実施した「視覚障害学生実態調査」において、大学に在籍中の視覚障害学生が、学生生活をおこなう上で受けている支援の現状と本人が本来希望している支援について分析しました。その中で、支援の現状と本人の希望の間に差があることがわかりました。その後、時間が経ち、障害者関連の法規の改正や制定も進み、「合理的配慮」という言葉が社会に浸透し、障害学生の受け入れにおいても重要視されるようになってきました。

このような状況のもとで、支援の現状と視覚障害学生が希望する支援内容との間の差が変化してきているのか、また、支援の現状および視覚障害学生の希望のそれぞれについて変化がみられるのかを分析して、今後の視覚障害学生の学習や生活環境の整備につながることを目的として、2008 年度と比較して 2015 年度に再度、視覚障害学生の実態調査を行いました。

調査方法

2015 年 7 月から 12 月にかけて、全国の大学および大学院に在学する視覚に障害のある学生を対象に、大学生活における支援について、現状の支援内容と本人の希望を、質問紙を用いて調査しました。調査の際には、質問者が質問紙の内容をもとに口頭でインタビューし、回答を書き取りました。一人あたりの調査時間は、約 90 分でした。

質問紙の内容は、①プロフィール、②入学前の支援、③資料の入手、④資料の提出、⑤講義等、⑥定期試験、⑦図書館・参考資料室、⑧学習室・専用ロッカー、⑨支援機器・視覚補助具、⑩施設・設備、⑪視覚に障害のある友人との関わり、⑫学生生活、⑬高校時代に身につけておくべき力の 13 項目でした。各質問は、原則として、選択肢から適当なものを選び回答する形式としましたが、一部自由記述を求める質問もありました。

本報告書では、回答を点字使用学生と墨字使用学生の別に集計し、2008 年度の回答と 2015 年度の回答を比較し、分析したものをまとめました。

調査結果の概要

質問紙の13項目について、項目ごとに回答を分析した調査結果の詳細を8ページ以降に掲載しますが、結果の概要を以下に記します。

1. プロフィール

2015年度の調査対象者は視覚障害のある大学生および大学院生45名(男17名・女28名)、平均年齢21.2歳でした。使用文字は、点字27名、墨字(拡大文字を含む)18名でした。

2. 入学前の支援

入学前に行われる教職員との打ち合わせの実施率は、2008年度に比べ、点字使用学生でも墨字使用学生でも下がっていましたが、希望の度合いは上がっていました。入学前の打ち合わせは、その学生が使用する文字で作成された教科書の準備や、教職員の理解促進等のために必要と考えられ、今後、実施率が上がることを期待します。

3. 資料の入手

点字使用学生では、2008年度に比べ、学生便覧や履修要覧も電子データなどの独力で読める形態で資料を入手できるようになってきていることがわかりました。しかし、これらは、非常に多い情報量の中から自分に必要かつ重要な情報を読み取らなければならないにもかかわらず、点字や画面読み上げソフトを用いて読みやすい形式になっているわけではないことがうかがえました。教科書についても、対面朗読の利用の割合がかなり低くなる一方、OCRの利用の割合が高くなっており、独力で読める形態で入手できるようになってきていることがわかりました。しかし、語学や理数系の教科書では、オリジナルの電子データやOCRを用いてデータ化したものを画面読み上げソフトで読み上げたり、点字に変換して点字印刷をしたりしても、文字や式を正確には読むことができないため、点字使用学生のほとんどが点字での入手を希望していることがわかりました。教員や他の学生からの配布資料については、現状・希望ともにオリジナルの電子データの割合が最も高いという結果となりました。ただし、授業のプリントや学生の発表資料など、授業中に読むプリントについては、点字を希望している学生もいることがわかりました。

墨字使用学生では、一般の学生向けにwebに掲載された学生便覧や履修要覧を、パソコンなどで自分の読みやすい大きさの文字にしたり、コントラストを変更したりして見やすい状態で読めるようになってきていることがわかりました。教科書や図書については、普通文字や拡大コピーという紙媒体を希望する学生が多いことがわかりました。ただし、それほど多くはありませんが、電子データを希望する学生もおり、多様なニーズがあることがわかりました。

掲示板等による諸連絡、成績の通知、履修登録などの事務連絡に関しては、点字使用学生、墨字使用学生ともに、現状・希望ともにwebの割合が1位でした。一般の学生向けに

整備された web 上のシステムを、視覚障害学生も活用できているようです。大学側が特別な配慮をしなくても、視覚障害学生が対応しやすい環境になってきていると考えられます。ただし、間違いなく手続きを行うためには、人的支援も必要であることがわかりました。

4. 資料の提出

証明書等の発行手続きについてみると、墨字使用学生では現状・希望ともに専用端末が1位で、点字使用学生では現状・希望ともに代筆が1位でした。このことから、多くの大学では、証明書等の発行手続きのために、墨字使用学生であれば操作できるような専用端末が導入されているものの、点字使用学生には操作できない状態であると考えられます。点字使用学生が自分で操作できる端末の導入が期待されます。

5. 講義等

「板書の読み上げ」では、2008 年度に比べ、点字使用学生の現状の値が高くなり、墨字使用学生の現状の値が低くなっていることがわかりました。点字使用学生に対しては、板書の内容を言葉で説明が浸透してきているようで、ぜひ継続してもらいたいものです。墨字使用学生は見えているようでも板書の文字は見えなかったり、大きな黒板の中から必要な情報が書かれた箇所を見つけることが困難であったりします。大学側にその点を理解してもらい、墨字使用学生に対しても、板書の内容を言葉で説明してもらえるような配慮を求めていく必要があります。

「スライド・ビデオの字幕・映像等の説明」では、2008 年度に比べ、点字使用学生でも墨字使用学生でも、現状の割合が高くなってきていますが、希望の値をみると、十分に満たされていないことがわかりました。近年、講義中のビジュアルな情報提示方法がますます増えているため、視覚情報を補う支援の検討が不可欠であると考えられます。

「録音の許可」では、2008 年度に比べ、点字使用学生でも墨字使用学生でも、現状・希望ともに高い値になっていることがわかりました。これは、講義中の情報量が増えたり、講義のスピードが速かったりしてノートをとりにくいことがあるためだと考えられます。

「担当教員への周知」では、点字使用学生でも墨字使用学生でも、現状・希望ともにかなり高い値となりました。視覚障害学生が大学での学習を進める際には、教員の視覚障害に対する理解が不可欠であることがわかりました。

6. 定期試験

点字使用学生では、2008 年度に比べ、定期試験の出題や解答がデータで行われる割合が増加していますが、データでの出題や解答を希望している学生の割合は減少傾向にあります。データでの出題や解答は、出題側にとっては点訳や墨訳のための時間や費用が軽減でき、負担が小さくなりますが、点字使用学生にとっては問題の全体を把握するのに時間がかかることや、下線や空欄などの記号類を見つけにくいこと、作成した解答を何度も読み

返すことが困難であることなどから、負担が大きいと考えられます。

墨字使用学生では、ほとんどの大学で、問題用紙と解答用紙の拡大は行われているものの、フォントの変更やデータでの出題や解答が行われる割合が減少していることがわかりました。多くの学生は拡大された問題用紙や解答用紙で対応できているようですが、フォントの変更やデータでの出題、解答用紙の変更などを希望している学生もいました。墨字使用学生の視機能は、個人によってさまざまであるため、一律に適用できる方法はなく、各学生の見え方に合わせた配慮が求められていることがわかりました。

7. 図書館・参考資料室

点字使用学生では、2008 年度と同様に利用頻度がきわめて低く、墨字使用学生の利用頻度も低くなっていることがわかりました。大学の学習において図書館の利用は不可欠であるにもかかわらず利用頻度が少ない理由としては、利用できる資料が整っていないこと、十分な人的支援が受けられていないことが考えられます。墨字使用学生の中には、検索などの支援をお願いできることを知らない学生も少なからずいました。

8. 学習室・専用ロッカー

点字使用学生では、2008 年度と比べ、学習室や学習スペースなどが確保されてきていることがわかりました。しかし通常、高校時代までは専用学習室を利用する経験はほとんどないため、学習室の確保を希望してよいことすら想像できていない学生がおり、入学当初から効果的に活用できるよう指導する必要があると考えられます。

9. 支援機器・視覚補助具

点字使用学生では、携帯用点字端末を活用している程度がきわめて高く、大学で準備されている程度や大学の予算で準備してほしいという希望も、2008 年度より高くなっていました。大学での学習や生活において常に活用する機器であるため、大学側から個人で購入するように言われるケースが多いようですが、高額で購入が難しい状況もあります。今後は大学で準備してもらえることが望まれます。また、視覚障害者専用のインターネットブラウザ・ワープロソフト・メールソフトの活用が高くなり、大学の予算による準備の希望もありましたが、現状では十分に準備されてはいないことがわかりました。

墨字使用学生では、卓上型拡大読書器や画面読み上げソフト活用の程度が高くなっており、大学で準備されている程度や大学の予算で準備してほしいという希望も、2008 年度より高くなっていました。卓上型拡大読書器は持ち運びが難しいため、大学での学習用として大学の予算で準備されることが望まれます。墨字使用学生の見え方はさまざま、一般のソフトウェアで対応できる学生もいれば、視覚障害者用のソフトウェアを必要としている学生もいることがわかりました。それぞれの学生のニーズに合わせて支援機器や視覚補助具が準備されることを期待します。

10. 施設・設備

「エレベータの点字表示や音声案内の整備」は、2008 年度に比べて進んできているようですが、点字使用学生でも墨字使用学生でも、現状よりも希望の割合が高く、特に点字使用学生の希望の割合がかなり高いことがわかりました。これは、点字表示がないと降りたい階のボタンが押せなかったり、音声案内がないと止まった階が自分の降りたい階なのかわからなかったりするためであり、一人ではエレベータを利用しないようにしているという学生もいました。

11. 視覚に障害のある友人との関わり

点字使用学生も墨字使用学生も、視覚に障害のある友人とのつきあいの程度が高く、さらに必要度もかなり高いことがわかりました。特に、支援機器等を用いて学習することが増えてきており、学習に必要な資料や支援機器に関する情報交換が最も重要であると感じていることがわかりました。

12. 大学生生活

点字使用学生でも墨字使用学生でも、2割以上の学生が、「合理的配慮という言葉をよく知らない」と回答しました。また、半数程度の学生は、言葉を知っているだけで大学と合理的配慮に関する話し合いを行っていないことがわかりました。2016 年度より障害者差別解消法が施行されましたが、2015 年度の調査時には、視覚障害学生本人の意識があまり高くないことがわかりました。障害者差別解消法の趣旨を十分理解し、視覚障害学生本人が自分に必要な配慮をきちんと伝えられるようになること、大学側は障害学生が必要としている配慮内容にどのように対応できるかを相談する場を設けることが必要です。

また、点字使用学生でも墨字使用学生でも、6割以上の学生が、災害時の避難経路や手段に関する説明を受けていないことがわかりました。年に一度以上説明を受けている学生は2割未満でした。近年、各地で震災が起こっていることもあり、いつどこで災害に遭遇するかわかりません。視覚障害学生の場合、災害によって変化した状況を把握することが難しく、周囲の人とともに避難できることが望ましいです。そのことを、視覚障害学生本人も、大学関係者も日頃から意識する必要があります。

13. 高校時代に身につけておくべき力

大学生を送る上で高校時代に身につけておくべき力について、自由回答を求めたところ、「点字を正確に速く読み書きできる力」、「一人で移動できる力」、「パソコンを操作する力」、「コミュニケーション力」などがありました。

調査結果の詳細

1. 対象者のプロフィール

2015年度の調査における対象者のプロフィールを表 1-1 に示します。なお、使用文字ごとにまとめましたが、点字使用学生が 27 名、墨字（拡大文字を含む）使用学生が 18 名でした。点字も墨字も使用していると回答した学生が 2 名いましたが、普段の学習で常用している文字で分類しました。

表 1-1 対象者のプロフィール (人) 「使用している補助具」は、使用している学生のみ的人数

点字				墨字					
	点字	墨字	計		点字	墨字	計		
性別	男性	10	7	17	専攻分野	語学・国際	5	2	7
	女性	17	11	28		社会科学(教育・心理・福祉以外)	7	2	9
年齢	18歳	1	1	2		人文科学	5	3	8
	19歳	5	3	8		教育・心理学	2	2	4
	20歳	7	3	10		福祉	4	5	9
	21歳	3	3	6		理系	4	4	8
	22歳	8	6	14	在学大学への入試形態	AO・自己推薦	13	6	19
	23歳	2	1	3		公募制推薦・指定校推薦	9	7	16
	24歳以上	1	1	2		各大学の個別学力入試	4	2	6
学年	1年	3	5	8		大学入試センター試験と 各大学の個別学力入試の両方	1	1	2
	2年	6	3	9		その他	0	2	2
	3年	6	6	12	小学校の教育経験	盲学校・視覚特別支援学校	13	4	17
	4年	11	3	14		通常学校	15	15	30
	修士課程	0	1	1		弱視特別支援学級・ 弱視通級指導教室	4	4	8
	博士課程	1	0	1		その他の特別支援学級	1	2	3
視力	0.03未満	26	1	27	中学校の教育経験	盲学校・視覚特別支援学校	22	7	29
	0.03～0.1未満	1	10	11		通常学校	4	11	15
	0.1以上	0	7	7		弱視特別支援学級・ 弱視通級指導教室	1	2	3
使用している補助具^{a)}	近用レンズ	0	14	14		その他の特別支援学級	1	1	2
	遠用レンズ	1	13	14	高等学校の教育経験	盲学校・視覚特別支援学校	25	10	35
	拡大読書器	2	10	12		通常学校	2	9	11
	その他	1	2	3		弱視特別支援学級・ 弱視通級指導教室	0	0	0
視覚障害の発症時期	小学校入学前	24	15	39		弱視通級指導教室	0	0	0
	小学校	0	1	1		その他の特別支援学級	0	0	0
	中学校	3	1	4	居住形態	大学の寮	2	0	2
	高等学校	0	1	1		アパート等での一人暮らし	16	9	25
視覚障害の原因	網膜芽細胞腫	9	1	10		家族と同居	9	9	18
	第一次硝子体過形成遺残	2	3	5					
	白内障	1	4	5					
	緑内障	1	3	4					
	レーベル症	2	2	4					
	網膜剥離	2	1	3					
	網脈絡膜欠損	0	3	3					
	小眼球	0	2	2					
	角膜混濁	1	1	2					
	その他	11	10	21					

対象者は視覚障害のある大学生および大学院生 45 名（男 17 名・女 28 名）、平均年齢 21.2 歳でした。2008 年度の調査対象者は大学生 41 名（男 19 名・女 22 名）、平均年齢 20.3 歳でした。学年は、1 年次 8 名、2 年次 9 名、3 年次 12 名、4 年次 14 名、大学院生 2 名でした。

視力は、0.03 未満が 27 名（うち点字 26 名）、0.03～0.1 未満が 11 名（うち点字 1 名）、0.1 以上が 7 名（うち点字 0 名）でした。視覚障害の発症時期は、小学校入学前 39 名、小学校在学中 1 名、中学校在学中 4 名、高等学校在学中 1 名で、ほとんどが先天性の視覚障害でした。主な視覚障害の原因は、網膜芽細胞腫 10 名、第一次硝子体過形成遺残 5 名、白内障 5 名、緑内障 4 名、網膜剥離 3 名、網脈絡膜欠損 3 名、小眼球 2 名、角膜混濁 2 名、その他 21 名でした。複数の眼疾患を併せ有する場合がありますため、視覚障害の原因は延べ人数となっています。

専攻分野は、文系 37 名、理系 8 名でした。在学大学に合格した入試形態は、AO・自己推薦 19 名、公募制推薦・指定校推薦 16 名、スポーツ推薦 1 名、内部推薦 1 名で、推薦制度を利用した入試で合格した学生が 37 名と圧倒的多数を占めました。大学入試センター試験を利用した入試を受けて合格した学生は 2 名でした。この傾向は 2008 年度と大きく変化しておらず、視覚に障害のある学生は短時間に大量の問題を処理することが求められる大学入試センター試験では実力を発揮しにくいという課題が継続されていると考えられます。

教育経験を見ると、盲学校在籍は小学部 17 名、中学部 29 名、高等部 35 名と学部が高くなるにつれて増加していました。これは、2008 年度の調査対象者のうち盲学校在籍者が小学部 19 名、中学部 31 名、高等部 36 名であったことと比較して大きな違いはありません。逆に、通常学校在籍は小学校 30 名、中学校 15 名、高等学校 11 名と徐々に減少していました。これは、2008 年度の調査対象者のうち通常学校在籍者が小学校 16 名、中学校 8 名、高等学校 5 名であったことと比較すると、変化の様子は変わりありませんが、どの学校段階でも通常学校在籍者が増えています。

次に、点字使用学生と墨字使用学生をそれぞれみると、点字使用学生の盲学校在籍は小学部 13 名、中学部 22 名、高等部 25 名で、墨字使用学生の盲学校在籍は小学部 4 名、中学部 7 名、高等部 10 名といずれも増加していました。

なお、小学校・中学校においては校種を越えての転校があるため、それぞれの合計人数は延べ人数となっています。学習内容が複雑化し、扱う情報量が増える中学校や高校になると、点字使用者・墨字使用者ともに盲学校の在籍者数が増えていることがわかりました。

現在の居住形態は、大学の寮 2 名、アパート等での一人暮らし 25 名、家族と同居 18 名で、約半数が一人暮らしをしていました。

対象者の在籍大学数は 35 校で、うち大学院が 2 校でした。なお、障害者のみを対象とする大学は含まれていません。在学大学を表 1-2 に示します。

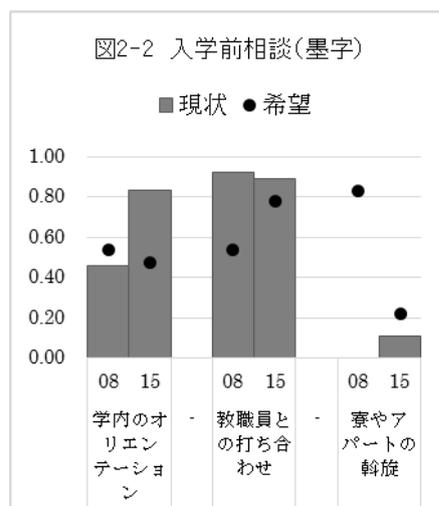
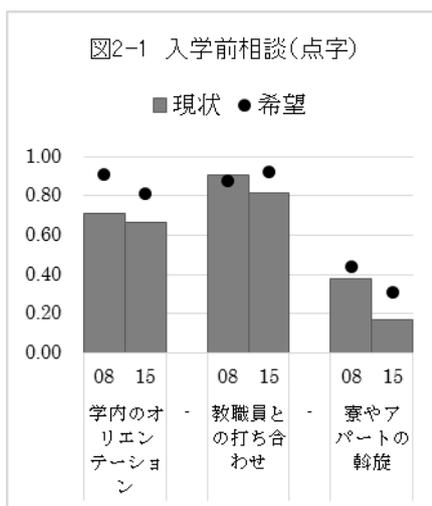
視覚に障害のある大学生の数が極めて少ないことと、支援を受けていない弱視者を特定することは困難であることを考慮すると、45 名の当事者、特に点字使用学生 27 名を対象に調査できたことは特筆すべきであり、価値の高い調査となりました。

表 1-2 対象者の在籍大学・学部（私立・国公立別、あいうえお順）

点字使用者		墨字使用者	
桜美林大学	健康福祉学群	岡山理科大学	総合情報学部
大谷大学	文学部	上智大学	外国語学部
大妻女子大学	人間関係学部	上智大学	国際教養学部
岡山理科大学	理学部	専修大学	ネットワーク情報学部
関西大学	文学部	大正大学	文学部
学習院大学	理学部	東京工科大学	コンピューターサイエンス学部
京都外国語大学	外国語学部	西九州大学	健康福祉学部
京都産業大学	理学部	日本福祉大学	社会福祉学部
共立女子大学	文芸学部	日本福祉大学	子ども発達学部
恵泉女学園大学	人文学部	佛教大学	社会福祉学部
国際基督教大学	教養学部	文京学院大学	人間学部
駒澤大学	文学部	美作大学	生活科学部
津田塾大学	学芸学部	明治学院大学	文学部
東京女子大学	現代教養学部	立命館大学	産業社会学部
東洋大学	社会学部	和光大学	表現学部
日本社会事業大学	社会福祉学部		
広島女学院大学	国際教養学部	福岡教育大学	教育学部
立教大学	社会学部	東北大学大学院	医学系研究科
立教大学	コミュニティ福祉学部		
立命館大学	産業社会学部		
ルーテル学院大学	総合人間学部		
和光大学	現代人間学部		
法政大学大学院			
首都大学東京	都市教養学部		

2. 入学前の支援

入学前の支援として、「学内の建物の配置などに関するオリエンテーション」、「教職員との打ち合わせ」、「寮やアパートの斡旋」について、各支援が実際に入学前にあったかどうか（現状）、及び支援を希望する程度について質問しました。2008年度の調査と同様に、現状については、「なかった」を0点、「あった」を1点、希望については、「必要ない」を0点、「できればほしい」を1点、「必ずほしい」を2点と得点化し、項目ごとの合計点を点字使用学生・墨字使用学生それぞれの対象人数×満点で割っ



た値を求めました。その結果を図 2-1（点字）、図 2-2（墨字）に示します。なお、「寮やアパートの斡旋」については一人暮らしをしている学生 27 名（点字 18 名、墨字 9 名）のみの値を示してあります。

（1）学内の建物の配置などに関するオリエンテーション

点字使用学生では、2008 年度は現状 0.71、希望 0.91（「必要ない」は 0%）で、2015 年度は現状 0.67、希望 0.81 でした（「必要ない」は 0%）。墨字使用学生では、2008 年度は現状 0.46、希望 0.54（「必要ない」は 23.1%）で、2015 年度は現状 0.83、希望 0.47 でした（「必要ない」は 27.8%）。

点字使用学生は学内の建物の配置などに関するオリエンテーションの希望が高く、やはりオリエンテーションの必要度が高いことが確認できました。これは、視覚障害学生は初めての場所での単独移動が困難であるためと考えられます。しかしながら、実施率は 2008 年よりもわずかに下がっています。これは、大学ではなく保護者や出身校の先生にオリエンテーションをしてもらった学生がいたため、オリエンテーションの実施は不可欠ですが、このような数値になったものと考えられます。点字使用学生は初めての場所での単独移動が困難であり、ある程度慣れるまでは学内移動の支援が必要であることを、大学に理解してもらえるよう、説明が必要であると思われる。

一方、墨字使用学生に対しては、オリエンテーションの実施率が上がっているものの、学生の希望の度合いは少し下がっています。大学は配慮してくれているが、それほど必要性を感じなかった学生がいるようです。墨字使用学生の希望が少ない理由として、通常学校で学んできた学生の中に、大学入学前にも自分で何とかしながら学習してきた経緯から、どこまでニーズを表明してよいかかわからず、ニーズの表明をできていない可能性を感じました。

（2）教職員との打ち合わせ

点字使用学生では、2008 年度は現状 0.91、希望 0.88（「必要ない」は 0%）で、2015 年度は現状 0.82、希望 0.93（「必要ない」は 0%）でした。墨字使用学生では、2008 年度は現状 0.92、希望 0.54（「必要ない」は 23.1%）で、2015 年度は現状 0.89、希望 0.78（「必要ない」は 11.1%）でした。

点字使用学生でも墨字使用学生でも、2008 年度に比べ、今回の調査では実施率が下がっています。一方、希望の割合は高くなっています。特に墨字使用学生の希望は 0.24 も上がっています。入学前の打ち合わせは、その学生が使用する文字で作成された教科書の準備や、教職員の理解促進等のために必要と考えられ、今後、実施率が上がることを期待しています。

(3) 寮やアパートの斡旋

点字使用学生では、2015年度は現状 0.38、希望 0.44（「必要ない」は 32.1%）で、2015年度は現状 0.17、希望 0.31（「必要ない」は 40.7%）でした。墨字使用学生では、2008年度は、現状として支援を受けた学生はいませんでした。希望は 0.83（「必要ない」は 38.5%）でした。2015年度は現状 0.11、希望 0.22（「必要ない」は 55.6%）でした。

点字使用学生・墨字使用学生のいずれにおいても、寮やアパートを探す際に大学から支援を受けている学生は少なく、希望も 2008年度より減少しています。以前は、視覚障害学生がアパートを借りる場合、貸し主の障害者に対する偏見から契約を断られる場合も少なくありませんでしたが、そのようなことも少なくなり、特に支援がなくてもスムーズに契約できているのかもしれない。しかし、点字教科書や支援機器等、学習に欠かせない持ち物が一般の学生よりも多いので十分なスペースが必要であること、大学まで安全に通学できる経路が求められることなどを考えると、大学に通学しやすい立地で、十分な広さのある寮やアパートに優先的に入居できるよう依頼してもよいのではないかと考えられます。

3. 資料の入手

「学生生活上必要な規則やシラバス等の冊子」、「教科書等」、「教員・他の学生からの資料」、「事務からの連絡等」の資料の入手形態について、現状と希望を質問しました。入手形態は以下の 9 形態とし、現在利用している形態、及び希望する形態をすべて選んでもらいました。その結果を、点字使用学生・墨字使用学生別に表と図に示します。

- ・点字
- ・資料の作成者から提供されたオリジナルの電子データ（電子メールによる入手を含む）
- ・web から入手
- ・スキャナと OCR(光学式文字認識)ソフトを活用して作成した電子データ
- ・対面朗読
- ・音訳（録音）
- ・拡大コピー
- ・普通文字（通常の印刷された配布形式）
- ・未入手

(1) 学生生活上必要な規則やシラバス等の冊子

「学生便覧」、「シラバス」、「履修要覧」について質問しました。表 3-1-1 に点字使用学生、表 3-1-2 に墨字使用学生の結果を示します。

表 3-1-1 学生生活上必要な規則やシラバス等の冊子(点字)

		点字	オリジナルデータ	Web	OCR	対面朗読	音訳	拡大コピー	普通文字	未入手
学生便覧	現状	08 3.6%	10.7%	21.4%	3.6%	17.9%	0.0%	0.0%	10.7%	39.3%
	15 11.1%	37.0%	22.2%	18.5%	7.4%	0.0%	0.0%	18.5%	18.5%	
希望	08 21.4%	57.1%	28.6%	3.6%	3.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
	15 22.2%	33.3%	25.9%	29.5%	3.7%	0.0%	0.0%	3.7%		
シラバス	現状	08 10.7%	25.0%	53.6%	3.6%	25.0%	0.0%	0.0%	3.6%	3.6%
	15 0.0%	22.2%	59.3%	18.5%	11.1%	0.0%	0.0%	3.7%	7.4%	
希望	08 17.9%	28.6%	53.6%	3.6%	17.9%	0.0%	0.0%	3.6%		
	15 14.8%	14.8%	48.1%	29.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%		
履修要覧	現状	08 0.0%	17.9%	25.0%	0.0%	57.1%	0.0%	0.0%	3.6%	7.1%
	15 11.1%	33.3%	22.2%	7.4%	29.6%	0.0%	0.0%	22.2%	0.0%	
希望	08 25.0%	39.3%	28.6%	0.0%	28.6%	0.0%	0.0%	3.6%		
	15 40.7%	22.2%	25.9%	25.9%	14.8%	0.0%	0.0%	0.0%		

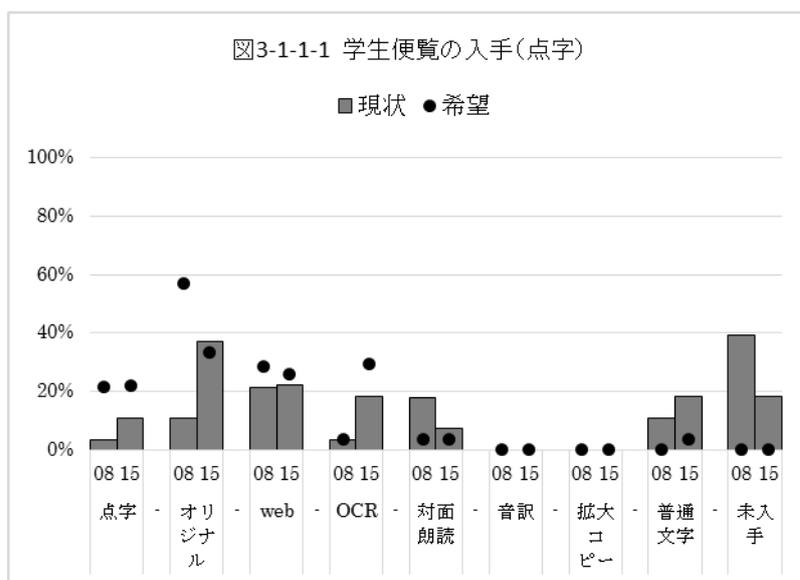
表 3-1-2 学生生活上必要な規則やシラバス等の冊子(墨字)

		点字	オリジナルデータ	Web	OCR	対面朗読	音訳	拡大コピー	普通文字	未入手
学生便覧	現状	08 0.0%	7.7%	30.8%	0.0%	0.0%	0.0%	23.1%	84.6%	0.0%
	15 0.0%	0.0%	16.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	16.7%	66.7%	5.6%
希望	08 0.0%	15.4%	30.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	15.4%	84.6%	
	15 0.0%	22.2%	27.8%	5.6%	0.0%	0.0%	0.0%	22.2%	38.9%	
シラバス	現状	08 0.0%	15.4%	53.8%	0.0%	0.0%	0.0%	15.4%	92.3%	0.0%
	15 0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	11.1%	38.9%	0.0%
希望	08 0.0%	23.1%	38.5%	0.0%	0.0%	0.0%	7.7%	23.1%	69.2%	
	15 0.0%	11.1%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	22.2%	22.2%	
履修要覧	現状	08 0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	46.2%	92.3%	0.0%
	15 0.0%	0.0%	16.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.6%	77.8%	0.0%
希望	08 0.0%	23.1%	30.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	23.1%	76.9%	
	15 0.0%	11.1%	33.3%	5.6%	0.0%	0.0%	0.0%	27.8%	27.8%	

① 学生便覧

図 3-1-1-1 に点字使用学生の学生便覧の入手、図 3-1-1-2 に墨字使用学生の学生便覧の入手の結果を示します。

点字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「未入手」(39.3%)、「web」(21.4%)、「対面朗読」(17.9%)で、2015年度は、「オリジナルの電子データ」(37.9%)、「web」(22.2%)、「OCR」「普通文字」「未入手」(18.5%)でした。2008年度に比べ、未入手が大きく減少し、独力で読める形態で入手できるようになってきている



ことがわかりました。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「オリジナルの電子データ」(57.1%)、「web」(28.6%)、「点字」(21.4%)で、2015年度は、「オリジナルの電子データ」(33.3%)、「OCR」(29.5%)、「web」(25.9%)でした。

墨字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「普通文字」(84.6%)、

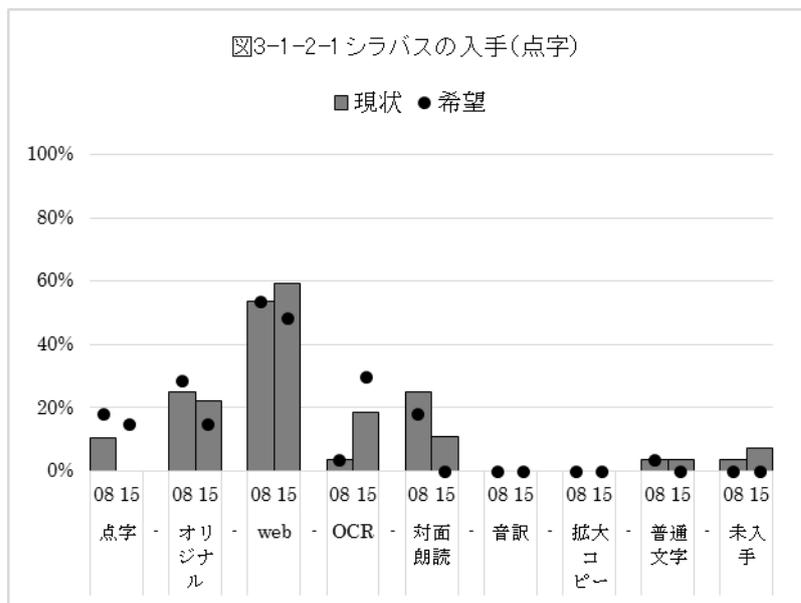
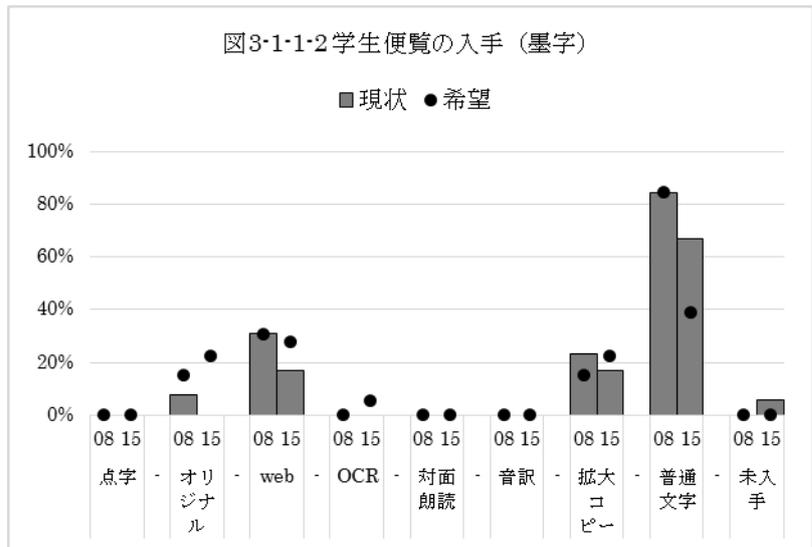
「web」(30.8%)、「拡大コピー」(23.1%)で、2015年度は、「普通文字」(66.7%)、「web」(30.8%)、「拡大コピー」(各16.7%)でした。2008年度は一人の学生が複数の手段で入手していたものの、2015年度は一つの手段で入手している学生が多く、それぞれの割合が減少したものと考えられます。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「普通文字」(84.6%)、「web」(30.8%)、「オリジナルの電子データ」「拡大コピー」(各15.4%)で、2015年度は、「普通文字」(38.9%)、「web」(27.8%)、「オリジナルの電子データ」「拡大コピー」(各22.2%)でした。希望する手段に大きな変化はありませんでしたが、普通文字を希望する学生の割合が減少しました。学生便覧の文字は小さく、墨字使用の学生にとっても読みにくい文字であり、他の手段を求める学生が増えていることがわかりました。

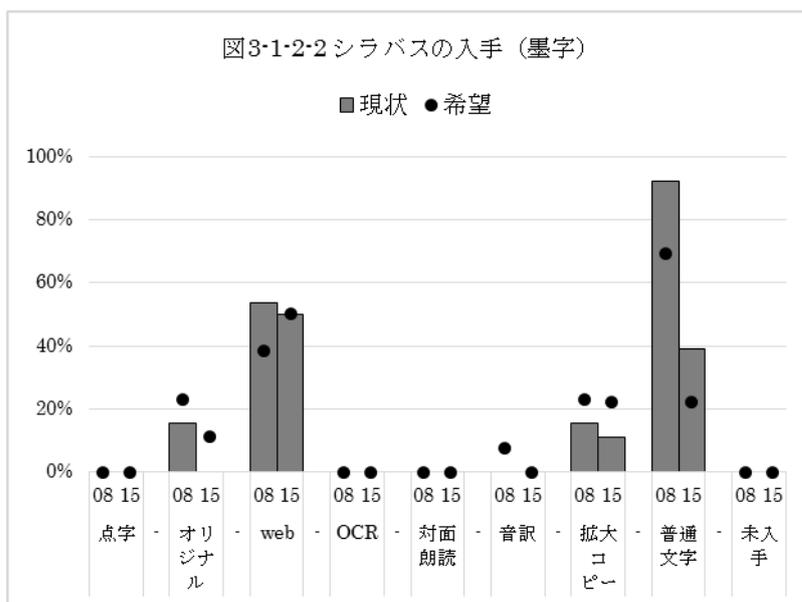
② シラバス

図3-1-2-1に点字使用学生のシラバスの入手、図3-1-2-2に墨字使用学生のシラバスの入手の結果を示します。

点字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「web」(53.6%)、「オリジナルの電子データ」「対面朗読」(各25.0%)で、2015年度は、「web」(59.3%)、「オリジナルの電子データ」(22.2%)、「OCR」(18.5%)でした。



一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「web」(53.6%)、「オリジナルの電子データ」(28.6%)、「点字」「対面朗読」(各17.9%)で、2015年度は、「web」(48.1%)、「OCR」(29.6%)、「点字」「オリジナルの電子データ」(各14.8%)でした。点字での入手を希望している学生も一定の割合でいることから、webやオリジナルの電子データなど、独力で読める形態であっても、必要な情報



を読み取る時に適切な形態ではないことと感じている学生がいるようです。

墨字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「普通文字」(92.3%)、「web」(53.8%)、「オリジナルの電子データ」「拡大コピー」(各15.4%)で、2015年度は、「web」(50.0%)、「普通文字」(38.9%)、「拡大コピー」(11.1%)でした。シラバスをwebのみで配付する大学が増えていることから、普通文字よりもwebでの入手の割合が高くなったことが考えられます。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「普通文字」(69.2%)、「web」(38.5%)、「オリジナルの電子データ」「拡大コピー」(各23.1%)で、2015年度は、「web」(50.0%)、「拡大コピー」「普通文字」(各22.2%)でした。2015年度は現状と希望に大きな差がないことがわかりました。また、2008年度と比べると、普通文字を希望する学生の割合が減少していることがわかりました。

③ 履修要覧

図3-1-3-1に点字使用学生の履修要覧の入手、図3-1-3-2に墨字使用学生の履修要覧の入手の結果を示します。

点字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「対面朗読」(57.1%)、「web」(25.0%)、「オリジナルの電子データ」(17.9%)で、2015年度は、「オリジナルの電子データ」(33.3%)、「対面朗読」(29.6%)、「web」「普通文字」(各22.2%)でした。2008年度と比べ、対面朗読の割合が大きく減少し、独力で読める形態で入手できるようになってきていることがわかりました。

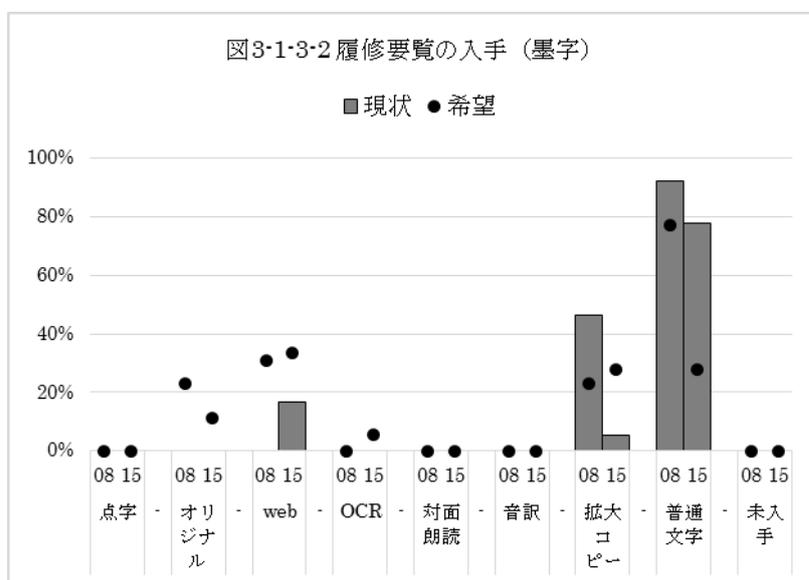
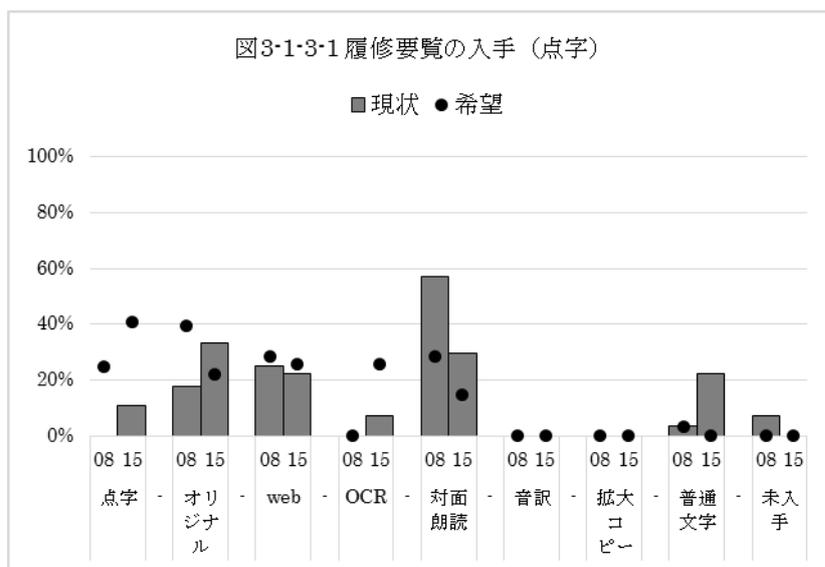
一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「オリジナルの電子データ」(39.3%)、「web」「対面朗読」(各28.6%)で、2015年度は、「点字」(40.7%)、「web」「OCR」(各25.9%)でした。オリジナルの電子データなどを入手できるようになってきていますが、点字での入手を希望する学生の割合が増加していることを考えると、オリジナルの電子データなどでは必要な情報を読み取ることが困難なのではないかと考えられます。

墨字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「普通文字」(92.3%)、「拡大コピー」(46.2%)で、2015年度は、「普通文字」(77.8%)、「web」(16.7%)、「拡大コピー」(5.6%)でした。履修要覧についても、普通文字で読む学生が減少し、web を利用している学生が増えてきていることがわかりました。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「普通文字」(76.9%)、「web」(30.8%)、「オリジナルの電子データ」「拡大コピー」(各23.1%)で、2015年度は、「web」(33.3%)、「拡大コピー」「普通文字」(各27.8%)でした。web への掲載は、視覚障害学生に特別に配慮しているわけではないと考えられますが、墨字使用学生にとっては、便利になってきているようです。

④ 学生生活上必要な規則やシラバス等の冊子のまとめ

2008年度に比べ、点字使用学生も独力で読める形態で資料を入手できるようになってきていることがわかりました。しかし、学生便覧や履修要覧は情報量が非常に多く、その中から自分に必要かつ重要な情報を読み取らなければなりません。そして、それを行う際に



は、電子データが点字や画面読み上げソフトを用いて読みやすい形式になっているわけではないことがうかがえました。今後は、読みやすさや検索性を重視した電子データの提供が充実する必要があります。

また、一般の学生向けにも普通文字の冊子ではなく、webに掲載する大学も増えてきています。墨字使用学生は、webに掲載された情報を、パソコンなどで自分の読みやすい大きさの文字にしたり、コントラストを変更したりして見やすい状態で読めるようになっていることもわかりました。大学にとっても大きな負担ではなく、視覚障害学生にとっても便利になっているようです。今後は、webのデザインが、より視覚障害者に配慮されたものになることを期待します。

(2) 教科書等

「語学の教科書」、「理数系の教科書」、「語学や理数系以外の指定教科書」、「参考図書」について質問しました。表 3-2-1 に点字使用学生、表 3-2-2 に墨字使用学生の結果を示します。

表 3-2-1 教科書等(点字)

		点字	オリジナルデータ	Web	OCR	対面朗読	音訳	拡大コピー	普通文字	未入手	
語学の教科書	現状	08	89.3%	10.7%	0.0%	21.4%	7.1%	0.0%	3.6%	3.6%	0.0%
		15	77.8%	11.1%	0.0%	29.6%	0.0%	0.0%	0.0%	11.1%	3.7%
	希望	08	96.4%	17.9%	0.0%	3.6%	3.6%	3.6%	0.0%	0.0%	
		15	100.0%	7.4%	0.0%	7.4%	0.0%	3.7%	0.0%	0.0%	
理数系の教科書	現状	08	35.7%	3.6%	0.0%	0.0%	10.7%	0.0%	3.6%	3.6%	0.0%
		15	22.2%	22.2%	0.0%	7.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	3.7%
	希望	08	78.6%	17.9%	0.0%	0.0%	7.1%	0.0%	3.6%	0.0%	
		15	92.6%	14.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
語学や理数系以外の教科書	現状	08	60.7%	39.3%	3.6%	42.9%	25.0%	10.7%	0.0%	3.6%	14.3%
		15	37.0%	40.7%	0.0%	55.6%	3.7%	3.7%	0.0%	11.1%	7.4%
	希望	08	75.0%	42.9%	3.6%	3.6%	7.1%	3.6%	0.0%	0.0%	
		15	51.9%	55.6%	3.7%	55.6%	3.7%	3.7%	0.0%	0.0%	
参考図書	現状	08	39.3%	3.6%	17.9%	17.9%	28.6%	10.7%	0.0%	0.0%	21.4%
		15	40.7%	18.5%	3.7%	44.4%	18.5%	18.5%	0.0%	7.4%	25.9%
	希望	08	39.3%	46.4%	10.7%	10.7%	17.9%	3.6%	0.0%	0.0%	
		15	59.3%	44.4%	7.4%	48.1%	3.7%	11.1%	0.0%	0.0%	

表 3-2-2 教科書等(墨字)

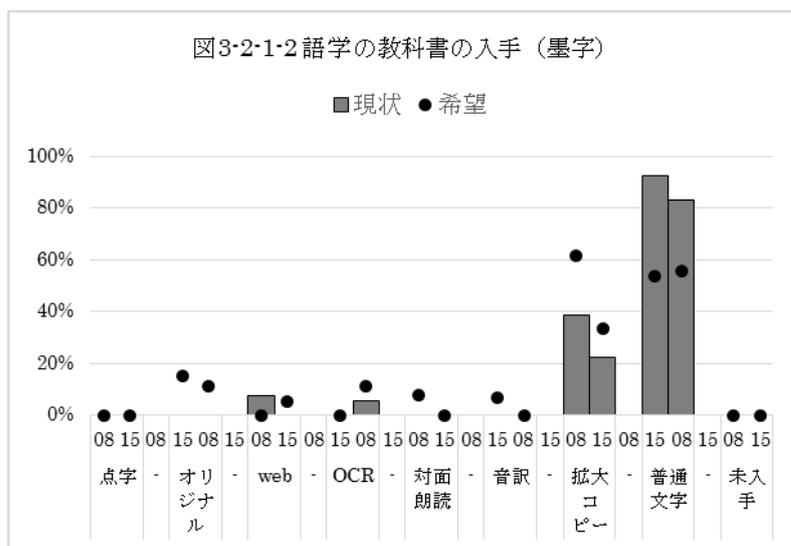
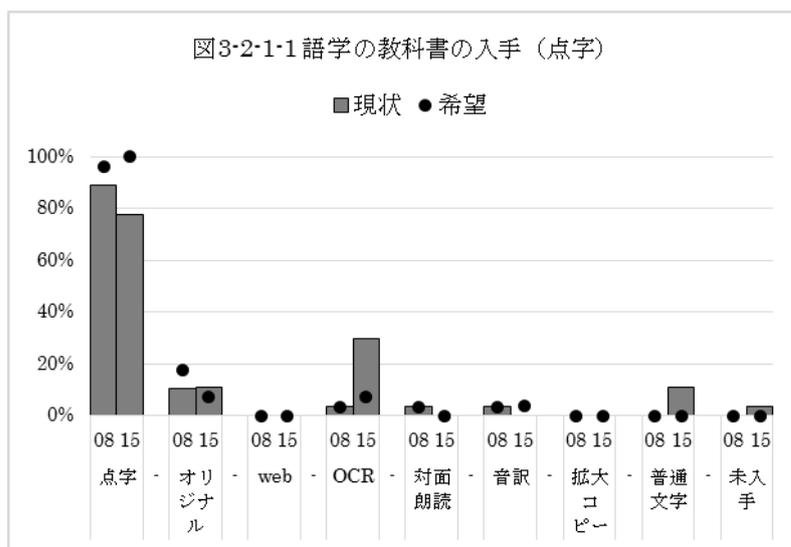
		点字	オリジナルデータ	Web	OCR	対面朗読	音訳	拡大コピー	普通文字	未入手	
語学の教科書	現状	08	0.0%	0.0%	7.7%	0.0%	0.0%	38.5%	92.3%	0.0%	
		15	0.0%	0.0%	0.0%	5.6%	0.0%	22.2%	83.3%	0.0%	
	希望	08	0.0%	15.4%	0.0%	0.0%	7.7%	7.7%	61.5%	53.8%	
		15	0.0%	11.1%	5.6%	11.1%	0.0%	0.0%	33.3%	55.6%	
理数系の教科書	現状	08	0.0%	0.0%	7.7%	0.0%	0.0%	0.0%	7.7%	61.5%	15.4%
		15	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.6%	38.9%	3.7%
	希望	08	0.0%	15.4%	7.7%	0.0%	7.7%	7.7%	53.8%	46.2%	
		15	0.0%	11.1%	5.6%	5.6%	0.0%	0.0%	44.4%	50.0%	
語学や理数系以外の教科書	現状	08	0.0%	0.0%	7.7%	0.0%	0.0%	0.0%	38.5%	92.3%	0.0%
		15	0.0%	0.0%	0.0%	11.1%	0.0%	5.6%	11.1%	77.8%	0.0%
	希望	08	0.0%	23.1%	0.0%	0.0%	7.7%	7.7%	46.2%	61.5%	
		15	0.0%	16.7%	5.6%	22.2%	0.0%	0.0%	44.4%	33.3%	
参考図書	現状	08	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	23.1%	100.0%	7.7%
		15	0.0%	0.0%	11.1%	0.0%	5.6%	5.6%	11.1%	77.8%	5.6%
	希望	08	0.0%	30.8%	7.7%	0.0%	7.7%	15.4%	46.2%	53.8%	
		15	0.0%	11.1%	16.7%	16.7%	5.6%	0.0%	22.2%	61.1%	

① 語学の教科書

図 3-2-1-1 に点字使用学生の語学の教科書の入手、図 3-2-1-2 に墨字使用学生の語学の教科書の入手の結果を示します。

点字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「点字」(89.3%)、「OCR」(21.4%)、「オリジナルの電子データ」(10.7%)で、2015年度は、「点字」(77.8%)、「OCR」(29.6%)、「オリジナルの電子データ」(11.1%)でした。2008年度に比べ、点字の割合が少し減少していることがわかりました。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「点字」(96.4%)、「オリジナルの電子データ」(17.9%)、「OCR」「対面朗読」「音訳」(各 3.6%)、で、2015年度は、「点字」(100.0%)、「オリジナルの電子データ」「OCR」(7.4%)でした。現状



では点字の割合が減少しているのに対し、全員が点字での入手を希望していることがわかりました。語学の教科書のように、特に文字を正確に読む必要がある場合は点字が必須であることがわかりました。大学側に、語学の教科書を必ず点字にしてもらえるよう、今後も理解を求めていく必要があります。

墨字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「普通文字」(92.3%)、「拡大コピー」(38.5%)、「web」(7.7%)で、2015年度は、「普通文字」(83.3%)、「拡大コピー」(22.2%)、「OCR」(5.6%)でした。2008年度と比べ、大きな変化はありませんでした。

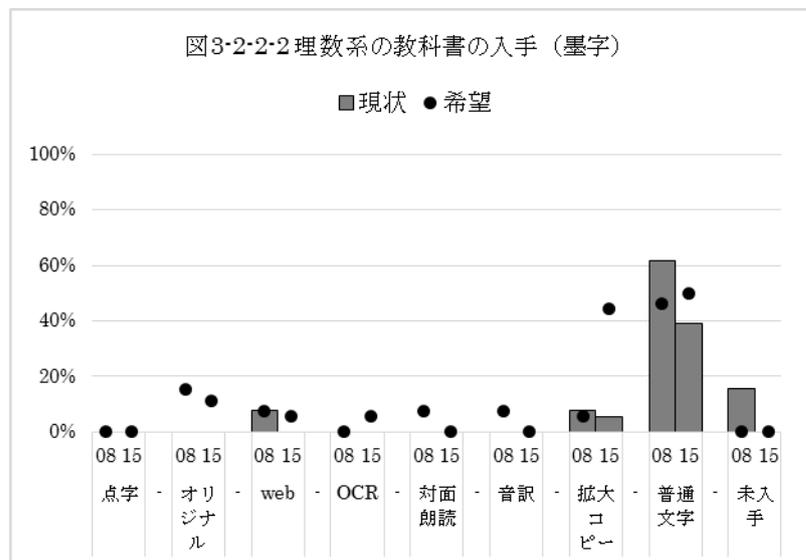
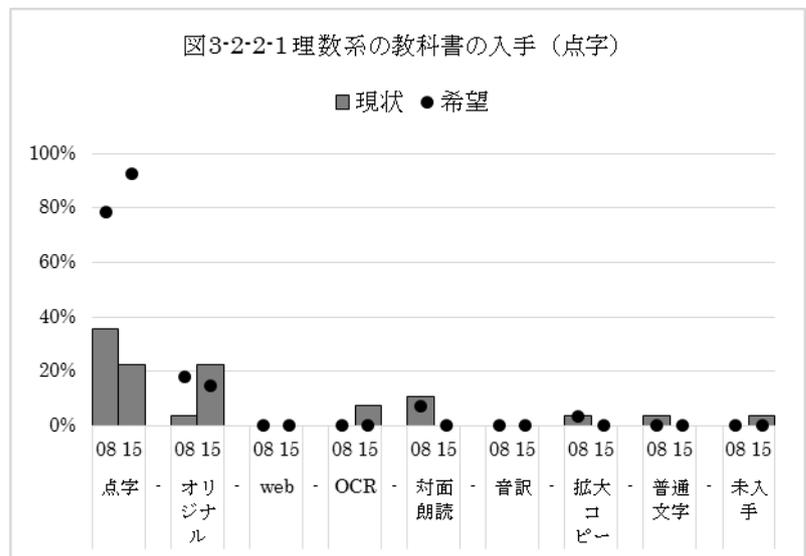
一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「拡大コピー」(61.5%)、「普通文字」(53.8%)、「オリジナルの電子データ」(15.4%)で、2015年度は、「普通文字」(55.6%)、「拡大コピー」(33.3%)、「オリジナルの電子データ」「OCR」(11.1%)でした。2008年度と比べ、拡大コピーを希望する割合が減少していることがわかりました。

② 理数系の教科書

図 3-2-2-1 に点字使用学生の理数系の教科書の入手、図 3-2-2-2 に墨字使用学生の理数系の教科書の入手の結果を示します。

点字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「点字」(36.7%)、「対面朗読」(10.7%)、「オリジナルの電子データ」「拡大コピー」「普通文字」(各 3.6%)で、2015年度は、「点字」「オリジナルの電子データ」(各 22.2%)、「OCR」(7.4%)、「未入手」(3.7%)でした。2015年度は対面朗読で入手している学生はいませんでした。入手できていない学生がいることがわかりました。なお、2015年度の割合を合計しても 100%に満たないのは、理数系の教科書を必要としていない学生が多かったためです。

一方、希望を割合の高い順に



示すと、2008年度は、「点字」(78.6%)、「オリジナルの電子データ」(17.9%)、「対面朗読」(7.1%)、で、2015年度は、「点字」(92.6%)、「オリジナルの電子データ」(14.8%)でした。理数系の教科書についても、点字を希望している学生の割合がかなり高いことがわかりました。理数系の教科書には数式が多く含まれており、データを入手しても読み上げソフトを用いて正確に読むことができないため、点字で正確に読めることを希望していると考えられます。理数系の教科書についても、点字にしてもらえるよう理解を求めていく必要があります。

墨字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「普通文字」(61.5%)、「未入手」(15.4%)、「拡大コピー」(7.7%)で、2015年度は、「普通文字」(38.9%)、「拡大コピー」(5.6%)、「未入手」(3.7%)でした。点字使用学生と同様に、理数系の教科書を必要としていない学生が多かったため、割合の合計が100%に達しません。

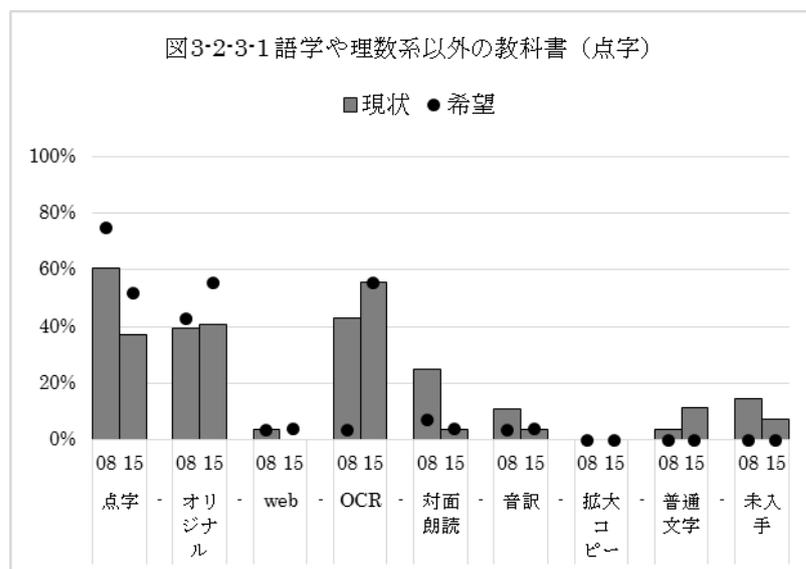
一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「拡大コピー」(53.8%)、「普通文字」(46.2%)、「オリジナルの電子データ」(15.4%)で、2015年度は、「普通文字」(50.0%)、「拡大コピー」(44.4%)、「オリジナルの電子データ」(11.1%)でした。2008年度に比べ、普通文字と拡大コピーの希望の順位が逆転しましたが、語学の教科書と比べると拡大コピーを希望する割合が高いことがわかりました。これは、理数系の教科書の場合、指数や添え字など、小さい文字が多く、それらを読む際には拡大コピーが適していることが考えられます。

③ 語学や理数系以外の教科書

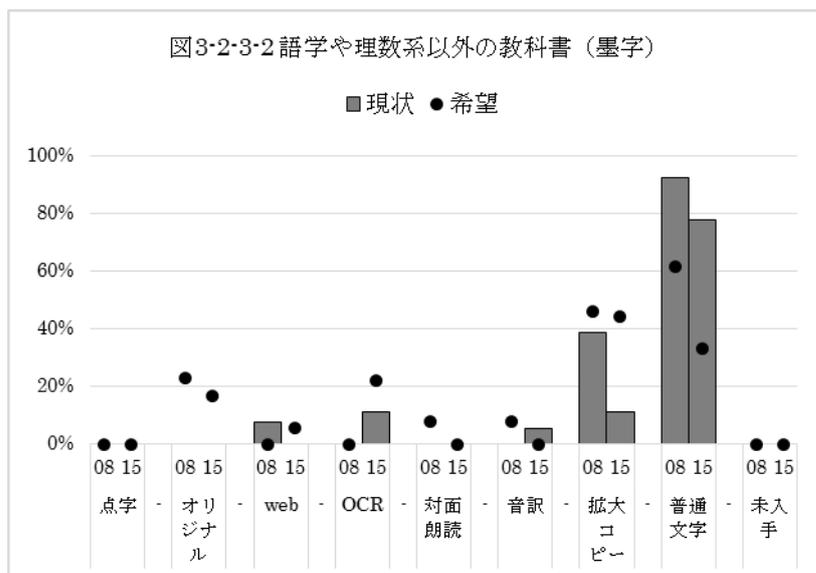
図 3-2-3-1 に点字使用学生の語学や理数系以外の教科書の入手、図 3-2-3-2 に墨字使用学生の語学や理数系以外の教科書の入手の結果を示します。

点字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「点字」(60.7%)、「OCR」(42.9%)、「オリジナルの電子データ」(39.3%)で、2015年度は、「OCR」(55.6%)、「オリジナルの電子データ」(40.7%)、「点字」(37.0%)でした。2008年度に比べ、OCRの割合が増加し、点字の割合が大きく減少していることがわかりました。各大学でのテキスト化の支援が増えているものと考えられます。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「点字」(75.0%)、「オリジナルの電子データ」(42.9%)、「OCR」(3.6%)、



で、2015 年度は、「オリジナルの電子データ」「OCR」（各 55.6%）、「点字」（51.9%）でした。現状と同様に、OCR を希望する学生の割合が大きく増加し、点字を希望する学生の割合が減少していることがわかりました。語学や理数系以外の教科書については、データを入手できれば教科書を読むことができていると考えられます。ただし、点字を希望している学生は減少して



いますが、半数以上います。語学や理数系以外の教科書であるからといって一概に点字にする必要がないとはいええないこともわかりました。

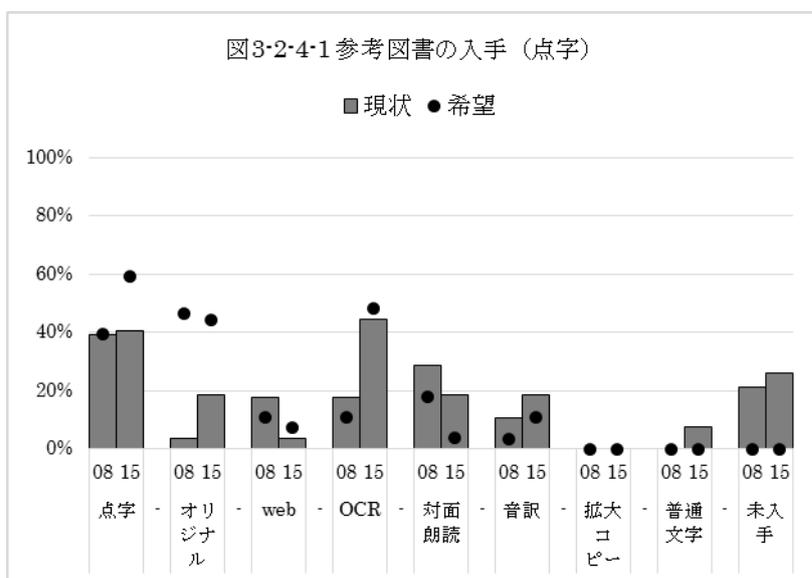
墨字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008 年度は、「普通文字」（92.3%）、「拡大コピー」（38.5%）、「web」（7.7%）で、2015 年度は、「普通文字」（77.8%）、「拡大コピー」「OCR」（各 11.1%）でした。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008 年度は、「普通文字」（61.5%）、「拡大コピー」（46.2%）、「オリジナルの電子データ」（23.1%）で、2015 年度は、「拡大コピー」（44.4%）、「普通文字」（33.3%）、「OCR」（22.2%）でした。2008 年度と比べ、普通文字を希望する学生の割合が減少していますが、現状では普通文字の割合が高いことから、読みやすい形態で入手できていない学生もいることがわかりました。

④ 参考図書

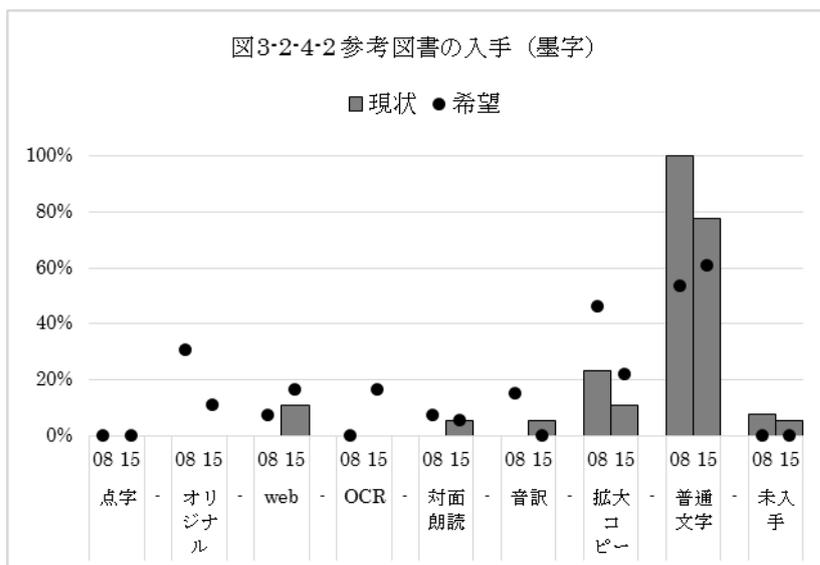
図 3-2-4-1 に点字使用学生の参考図書の入手、図 3-2-4-2 に墨字使用学生の参考図書の入手の結果を示します。

点字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008 年度は、「点字」（39.3%）、「対面朗読」（28.6%）、「未入手」（21.4%）で、2015 年度は、「OCR」（44.4%）、「点字」（40.7%）、「未入手」（25.9%）でした。2008 年度に比べ、



OCR の割合が大きく増加していることがわかりました。しかし、未入手の割合も減少しておらず、参考図書を十分に読めていないことがわかりました。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「オリジナルの電子データ」(46.4%)、「点字」(39.3%)、「対面朗読」(17.9%)、で、2015年度は、「点字」(59.3%)、「OCR」



(48.1%)、「オリジナルの電子データ」(44.4%)でした。2008年度と比べ、現状と同様に、OCR を希望する学生の割合も大きく増加していることがわかりました。参考図書を読む際にも、OCR が有効な手段となってきたことと推測できます。ただし、2008年度よりも点字を希望する学生の割合が増加していることもわかりました。

墨字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「普通文字」(100.0%)、「拡大コピー」(23.1%)、「未入手」(7.7%) で、2015年度は、「普通文字」(77.8%)、「拡大コピー」「web」(各 11.1%) でした。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「普通文字」(53.8%)、「拡大コピー」(46.2%)、「オリジナルの電子データ」(30.8%) で、2015年度は、「普通文字」(61.1%)、「拡大コピー」(22.2%)、「web」「OCR」(各 16.7%) でした。墨字使用学生でも、普通文字で十分に対応できる学生は約6割しかおらず、多くの学生が、拡大コピーや電子データを必要としていることがわかりました。

⑤ 教科書等のまとめ

点字使用学生では、2008年度は対面朗読の利用もありましたが、2015年度は対面朗読を利用している割合はかなり低くなり、OCR の利用の割合が高くなっていました。シラバス等と同様に、独力で読める形態で入手できるようになってきていることがわかりました。

しかし、語学や理数系の教科書では、文字や式を正確に読む必要がありますが、オリジナルの電子データやOCRを用いてデータ化したものを画面読み上げソフトで読み上げたり、点字に変換して点字印刷をしたりしても、正確には読めないことから、点字使用学生のほとんどが点字で入手できることを希望していることがわかりました。

一方、語学や理数系以外の教科書や参考図書は、点字の希望もありますが、オリジナルの電子データやOCRの希望の割合も高く、画面読み上げソフトなどを用いて活用できていることがわかりました。

教科書を点字にする場合の経費などを考えると、点字使用学生が希望する教科書をすべて点字にすることは難しい状況も考えられます。そのような場合でも、語学や理数系の教科書は必ず大学の経費で点字にしてもらえよう、理解を求めていく必要があります。

また、参考図書については入手できていない学生もいることから、参考図書を自由に選び読めるようにする環境を整えることが課題であると考えられます。

墨字使用学生では、いずれの教科書や図書でも、普通文字や拡大コピーの割合が高く、教科書は紙媒体を希望する学生が多いことがわかりました。一方で、割合は高くはないですが、電子データを希望する学生もいることがわかり、多様なニーズがあるといえます。

(3) 教員・他の学生からの配布資料

「授業のプリント」、「学生の発表資料」、「提出したレポートに対するコメント」について質問しました。表 3-3-1 に点字使用学生、表 3-3-2 に墨字使用学生の結果を示します。

表 3-3-1 教員・他の学生からの配付資料(点字)

		点字	オリジナルデータ	Web	OCR	対面朗読	音訳	拡大コピー	普通文字	未入手
授業の プリント	現状	08	53.6%	75.0%	7.1%	39.3%	28.6%	3.6%	0.0%	14.3%
		15	39.3%	75.0%	0.0%	21.4%	7.1%	0.0%	0.0%	3.6%
	希望	08	53.6%	78.6%	0.0%	3.6%	10.7%	3.6%	0.0%	3.6%
		15	42.9%	71.4%	0.0%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
学生の 発表資料	現状	08	7.1%	42.9%	3.6%	7.1%	21.4%	0.0%	0.0%	28.6%
		15	7.1%	71.4%	0.0%	7.1%	0.0%	0.0%	0.0%	25.0%
	希望	08	14.3%	78.6%	0.0%	0.0%	17.9%	0.0%	0.0%	0.0%
		15	28.6%	89.3%	0.0%	14.3%	0.0%	0.0%	0.0%	3.6%
提出した レポート に対する コメント	現状	08	7.1%	53.6%	0.0%	0.0%	32.1%	0.0%	0.0%	10.7%
		15	3.6%	71.4%	3.6%	0.0%	21.4%	0.0%	0.0%	3.6%
	希望	08	10.7%	71.4%	0.0%	0.0%	28.6%	0.0%	0.0%	0.0%
		15	7.1%	82.1%	7.1%	0.0%	7.1%	0.0%	0.0%	3.6%

表 3-3-2 教員・他の学生からの配付資料(墨字)

		点字	オリジナルデータ	Web	OCR	対面朗読	音訳	拡大コピー	普通文字	未入手
授業の プリント	現状	08	0.0%	15.4%	0.0%	0.0%	0.0%	92.3%	76.9%	0.0%
		15	0.0%	22.2%	0.0%	11.1%	0.0%	0.0%	22.2%	88.9%
	希望	08	0.0%	38.5%	7.7%	0.0%	0.0%	0.0%	76.9%	46.2%
		15	0.0%	22.2%	11.1%	11.1%	0.0%	0.0%	72.2%	27.8%
学生の 発表資料	現状	08	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	38.5%	84.6%	0.0%
		15	0.0%	11.1%	5.6%	0.0%	0.0%	0.0%	33.3%	77.8%
	希望	08	0.0%	23.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	61.5%	61.5%
		15	0.0%	22.2%	5.6%	11.1%	0.0%	0.0%	44.4%	38.9%
提出した レポート に対する コメント	現状	08	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	15.4%	0.0%	84.6%	0.0%
		15	0.0%	0.0%	11.1%	0.0%	0.0%	0.0%	11.1%	50.0%
	希望	08	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	38.5%	53.8%
		15	0.0%	11.1%	27.8%	0.0%	0.0%	0.0%	11.1%	50.0%

① 授業のプリント

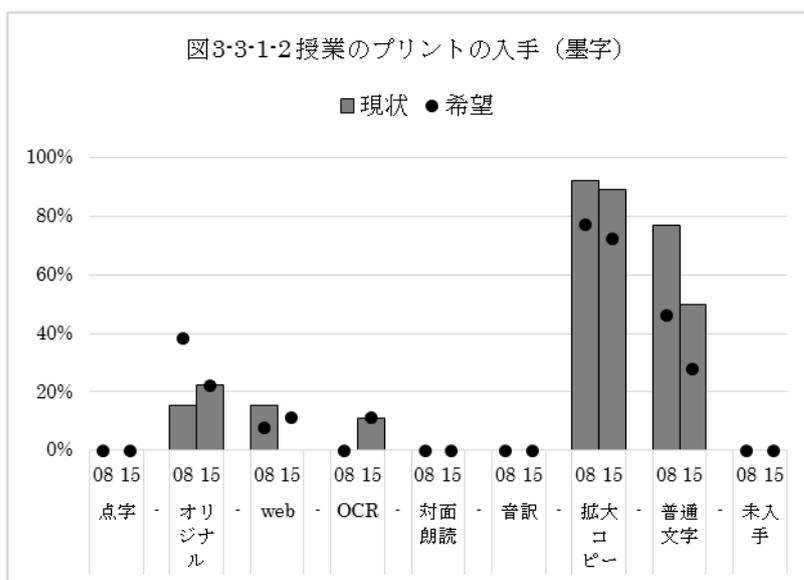
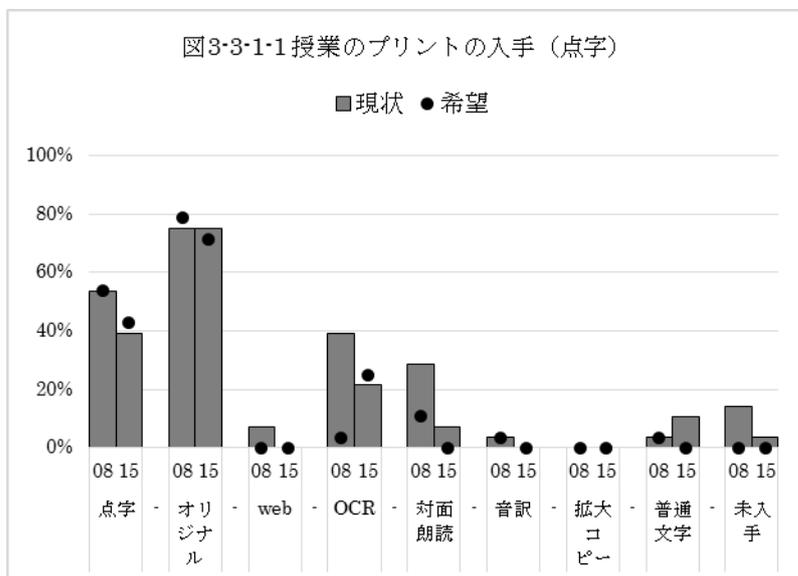
図 3-3-1-1 に点字使用学生の授業のプリントの入手、図 3-3-1-2 に墨字使用学生の授業のプリントの入手の結果を示します。

点字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008 年度は、「オリジナルの電子データ」(75.0%)、「点字」(53.6%)、「OCR」(39.3%)で、2015 年度は、「オリジナルの電子データ」(75.0%)、「点字」(39.3%)、「OCR」(21.4%)でした。2008 年度に比べ、点字の割合が減少していることがわかりました。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008 年度は、「オリジナルの電子データ」(78.6%)、「点字」(53.6%)、「対面朗読」(10.7%)で、2015 年度は、「オリジナルの電子データ」(71.4%)、「点字」(42.9%)、「OCR」(25.0%)でした。2008 年度と比べ、対面朗読を希望する学生はいなくなり、OCR を希望する学生の割合が大きく増加していることがわかりました。

墨字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008 年度は、「拡大コピー」(92.3%)、「普通文字」(76.9%)、「オリジナルの電子データ」「web」(各 15.4%)で、2015 年度は、「普通文字」(88.9%)、「拡大コピー」「オリジナルの電子データ」(各 22.2%)でした。2008 年度に比べ、拡大コピーの割合が大きく減少していることがわかりました。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008 年度は、「拡大コピー」(76.9%)、「普通文字」(46.2%)、「オリジナルの電子データ」(38.5%)で、2015 年度は、「拡大コピー」(72.2%)、「普通文字」(27.8%)、「オリジナルの電子データ」(22.2%)でした。現状では、普通文字の割合が増加し、拡大コピーの割合が減少していましたが、普通文字を希望している学生は少なく、7割以上の学生は拡大コピーを希望していることがわかりました。墨字使用学



生では、多くの場合は普通文字でも読めていますが、学習効率を上げるためにも適切に拡大された文字サイズで授業のプリントが提供されるよう求めていく必要があります。

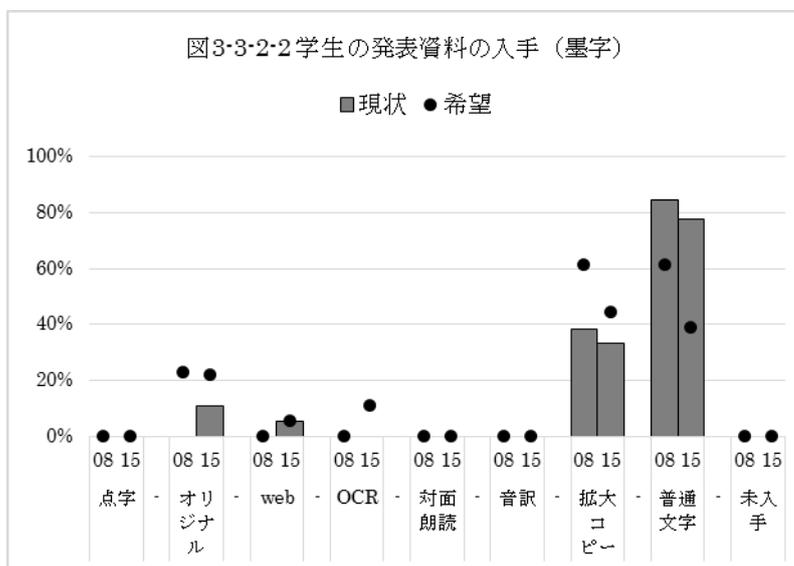
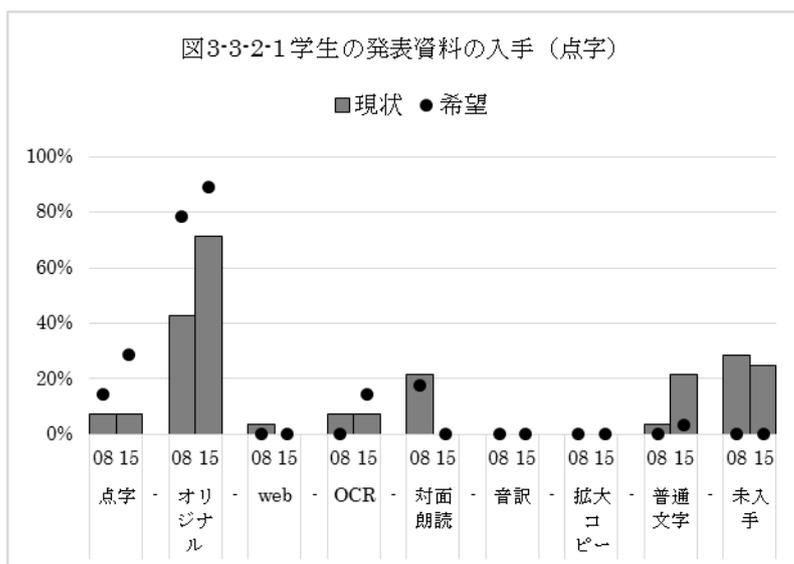
② 学生の発表資料

図 3-3-2-1 に点字使用学生の学生の発表資料の入手、図 3-3-2-2 に墨字使用学生の学生の発表資料の入手の結果を示します。

点字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008 年度は、「オリジナルの電子データ」(42.9%)、「未入手」(28.6%)、「対面朗読」(21.4%) で、2015 年度は、「オリジナルの電子データ」(71.4%)、「未入手」(25.0%)、「普通文字」(21.4%) でした。2008 年度に比べ、オリジナルの電子データの割合が大きく増加していることがわかりました。しかし、入手できていない学生や、普通文字の資料しか入手できていない学生もいることがわかりました。また、普通文字の資料を入手した際に、対面朗読を頼めていないこともわかりました。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008 年度は、「オリジナルの電子データ」(78.6%)、「対面朗読」(17.9%)、「点字」(14.3%)、で、2015 年度は、「オリジナルの電子データ」(89.3%)、「点字」(28.6%)、「OCR」(14.3%) でした。2008 年度と比べ、オリジナル

の電子データを希望する学生の割合が増加していることがわかりました。オリジナルの電子データが入手できると独力で読めることを他の学生に理解してもらい、発表資料の電子データを必ず提供してもらえよう、理解を促してもらいたいものです。また、点字を希望する割合も増加していますが、発表を聞きながら資料を読む場合には、点字の方が適していると考えられます。



墨字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「普通文字」(84.6%)、「拡大コピー」(38.5%)で、2015年度は、「普通文字」(77.8%)、「拡大コピー」(33.3%)、「オリジナルの電子データ」(11.1%)でした。2008年度には、オリジナルの電子データで入手している学生はいませんでしたが、2015年度にはこのような入手方法も出てきていることがわかりました。

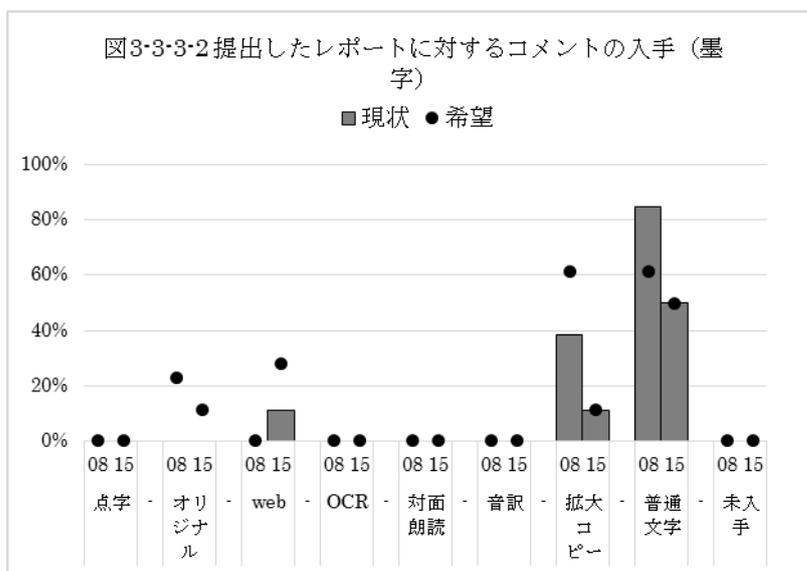
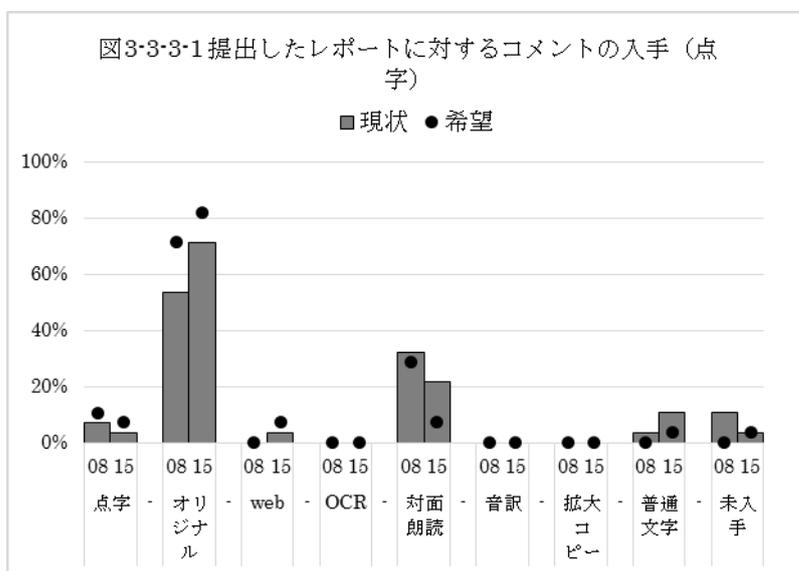
一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「普通文字」「拡大コピー」(各61.5%)、「オリジナルの電子データ」(23.1%)で、2015年度は、「拡大コピー」(44.4%)、「普通文字」(38.9%)、「オリジナルの電子データ」(22.2%)でした。2008年度に比べ、普通文字や拡大コピーを希望する割合が減少していることがわかりました。

③ 提出したレポートに対するコメント

図3-3-3-1に点字使用学生の提出したレポートに対するコメントの入手、図3-3-3-2に墨字使用学生の提出したレポートに対するコメントの入手の結果を示します。

点字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「オリジナルの電子データ」(53.6%)、「対面朗読」(32.1%)、「未入手」(10.7%)で、2015年度は、「オリジナルの電子データ」(71.4%)、「対面朗読」(21.4%)、「普通文字」(10.7%)でした。2008年度に比べ、オリジナルの電子データの割合が大きく増加し、未入手の割合が減少し、コメントを入手できるようになっていることがわかりました。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「オリジナルの電子データ」(71.4%)、「対面朗読」(28.6%)、「点字」(10.7%)で、2015年度は、「オ



オリジナルの電子データ」(82.1%)、「点字」「web」「対面朗読」(各 7.1%) でした。2008 年度と比べ、オリジナルの電子データを希望する学生の割合が増加していることがわかりました。

墨字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008 年度は、「拡大コピー」(84.6%)、「対面朗読」(15.4%) で、2015 年度は、「普通文字」(50.0%)、「拡大コピー」「web」(各 11.1%) でした。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008 年度は、「普通文字」(53.8%)、「拡大コピー」(38.5%) で、2015 年度は、「普通文字」(50.0%)、「web」(27.8%)、「拡大コピー」「オリジナルの電子データ」(各 11.1%) でした。2008 年度に比べ、拡大コピーを希望する割合が減少し、オリジナルの電子データや web などデータでの入手を希望する割合が増加していることがわかりました。

④ 教員・他の学生からの配布資料のまとめ

点字使用学生では、いずれについても現状・希望ともにオリジナルの電子データの割合が最も高いという結果となりました。特に、学生の発表資料や提出したレポートに対するコメントでは、2008 年度よりも現状の割合が高くなっており、よい状況になってきていることが把握できました。また、授業のプリントや学生の発表資料については、点字を希望している学生もおり、授業中に読むプリントは点字のほうが扱いやすいとも考えられます。

墨字使用学生では、授業のプリントおよび学生の発表資料については、現状は普通文字の割合が最も高く、希望は拡大コピーの割合が最も高いという結果となりました。普通文字でも読めてはいるのですが、拡大されたものの方が効率よく読めるということ、墨字使用学生自身も伝えていく必要がありますし、大学側は教員や学生に理解を促してもらいたいものです。

(4) 事務連絡等

「掲示板等による諸連絡」、「成績の通知」、「履修登録や履修状況の確認」について質問しました。表 3-4-1 に点字使用学生、表 3-4-2 に墨字使用学生の結果を示します。

表 3-4-1 事務連絡等(点字)

		点字	オリジナルデータ	Web	OCR	対面朗読	音訳	拡大コピー	普通文字	未入手
掲示板等による諸連絡	現状	08 0.0%	32.1%	42.9%	0.0%	39.3%	0.0%	0.0%	3.6%	7.1%
	15	0.0%)	33.3%	74.1%	0.0%	14.8%	0.0%	0.0%	0.0%	11.1%
希望	08	3.6%	50.0%	57.1%	0.0%	17.9%	0.0%	0.0%	3.6%	
	15	3.7%	44.4%	70.4%	0.0%	3.7%	0.0%	0.0%	0.0%	
成績の通知	現状	08 10.7%	7.1%	25.0%	3.6%	35.7%	0.0%	0.0%	0.0%	10.7%
	15	7.1%	17.9%	46.4%	0.0%	17.9%	0.0%	0.0%	25.0%	0.0%
希望	08	25.0%	42.9%	35.7%	0.0%	14.3%	0.0%	0.0%	3.6%	
	15	21.4%	28.6%	53.6%	3.6%	3.6%	0.0%	0.0%	10.7%	
履修登録や履修状況の確認	現状	08 0.0%	7.1%	25.0%	0.0%	42.9%	0.0%	0.0%	0.0%	3.6%
	15	7.1%	3.6%	53.6%	3.6%	25.0%	0.0%	0.0%	10.7%	10.7%
希望	08	17.9%	28.6%	57.1%	0.0%	14.3%	3.6%	0.0%	0.0%	
	15	7.1%	7.1%	53.6%	3.6%	25.0%	0.0%	0.0%	7.1%	

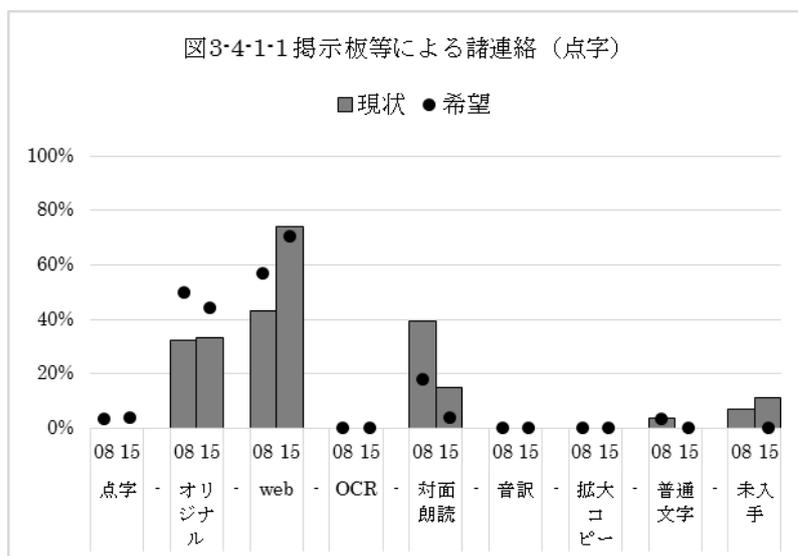
表 3-4-2 事務連絡等(墨字)

		点字	オリジナルデータ	Web	OCR	対面朗読	音訳	拡大コピー	普通文字	未入手
掲示板等による諸連絡	現状	08 0.0%	30.8%	46.2%	0.0%	15.4%	0.0%	0.0%	23.1%	7.7%
	15	0.0%	11.1%	72.2%	0.0%	5.6%	0.0%	11.1%	16.7%	0.0%
希望	08	0.0%	23.1%	69.2%	0.0%	7.7%	7.7%	30.8%	23.1%	
	15	0.0%	5.6%	72.2%	0.0%	5.6%	0.0%	11.1%	11.1%	
成績の通知	現状	08 0.0%	0.0%	30.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%
	15	0.0%	0.0%	61.1%	0.0%	0.0%	0.0%	11.1%	55.6%	0.0%
希望	08	0.0%	0.0%	30.8%	0.0%	0.0%	0.0%	23.1%	69.2%	
	15	0.0%	11.1%	44.4%	5.6%	0.0%	0.0%	16.7%	44.4%	
履修登録や履修状況の確認	現状	08 0.0%	7.7%	61.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	38.5%	0.0%
	15	0.0%	0.0%	83.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	22.2%	0.0%
希望	08	0.0%	7.7%	53.8%	0.0%	0.0%	0.0%	38.5%	53.8%	
	15	0.0%	5.6%	83.3%	0.0%	0.0%	0.0%	5.6%	11.1%	

① 掲示板等による諸連絡

図 3-4-1-1 に点字使用学生の掲示板等による諸連絡の入手、図 3-4-1-2 に墨字使用学生の掲示板等による諸連絡の入手の結果を示します。

点字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「web」(42.9%)、「対面朗読」(39.3%)、「オリジナルの電子データ」(32.1%)で、2015年度は、「web」(74.1%)、「オリジナルの電子データ」(33.3%)、「対面朗読」(14.8%)でした。2008年度に比べ、webの割合が大きく増加し、対面朗読が減少していることがわかりました。これは、一般の学生向けにも、



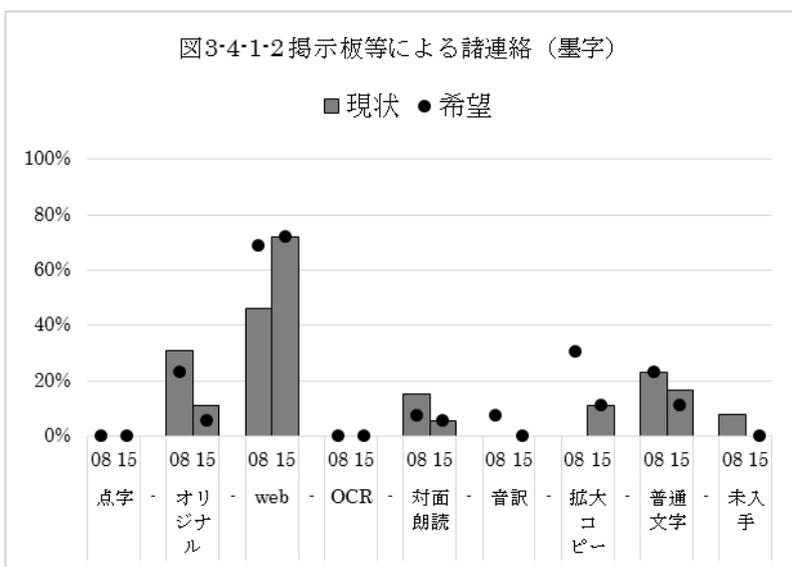
掲示板の情報を web で発信する大学が増えており、点字使用学生も web を利用して独力で読めるようになってきているためであると考えられます。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008 年度は、「web」(57.1%)、「オリジナルの電子データ」(50.0%)、「対面朗読」(17.9%) で、2015 年度は、「web」(70.4%)、「オリジナルの電子データ」(44.4%)、「点字」(対面朗読)(各 3.7%) でした。

2008 年度と比べ、web での入手を希望する学生の割合が増加していることがわかりました。

墨字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008 年度は、「web」(46.2%)、「オリジナルの電子データ」(30.8%)、「普通文字」(23.1%) で、2015 年度は、「web」(72.2%)、「普通文字」(16.7%)、「オリジナルの電子データ」「拡大コピー」(各 11.1%) でした。2008 年度に比べ、web の割合が大きく増加していることがわかりました。点字使用学生と同様に、掲示板の情報を web で発信している大学が増えていることが影響していると考えられます。

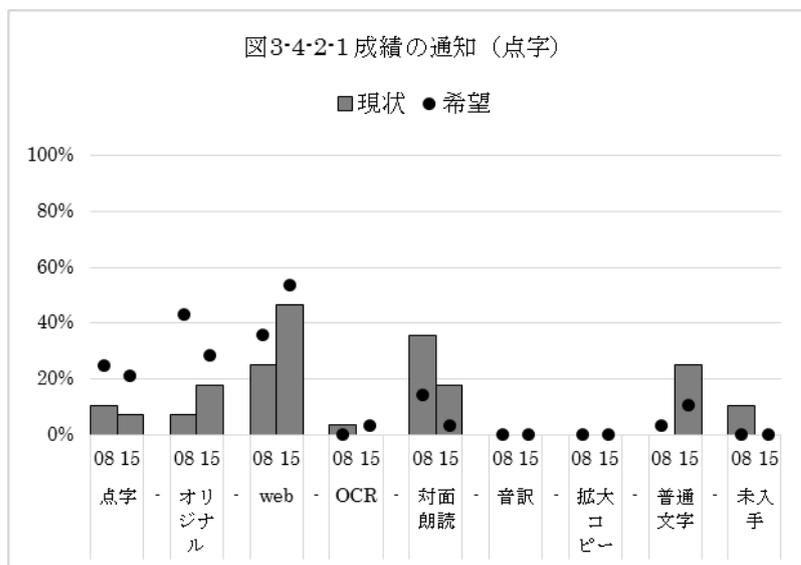
一方、希望を割合の高い順に示すと、2008 年度は、「web」(69.2%)、「拡大コピー」(30.8%)、「オリジナルの電子データ」「普通文字」(各 23.1%) で、2015 年度は、「web」(72.2%)、「拡大コピー」「普通文字」(各 11.1%) でした。2008 年度に比べ、web 以外の方法を希望する学生の割合が減少していることがわかりました。



② 成績の通知

図 3-4-2-1 に点字使用学生の成績の通知の入手、図 3-4-2-2 に墨字使用学生の成績の通知の入手の結果を示します。

点字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008 年度は、「対面朗読」(35.7%)、「web」(25.0%)、「点字」「未入手」(各 10.7%) で、2015 年度は、「web」(46.4%)、「普通文字」(25.0%)、「オリジナルの電子データ」



「対面朗読」(各 17.9%) でした。2008 年度に比べ、web の割合が増加していることがわかりました。また、入手できていない学生は、2015 年度の調査対象者の中にはいませんでした。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008 年度は、「オリジナルの電子データ」(42.9%)、「web」(35.7%)、「点字」(25.0%) で、2015 年度は、「web」(53.6%)、「オリジナルの電子データ」(28.6%)、「点字」

(21.4%) でした。2008 年度と比べ、web での通知を希望する学生の割合が増加しましたし、独力で確認できる手段を希望していることがわかりました。

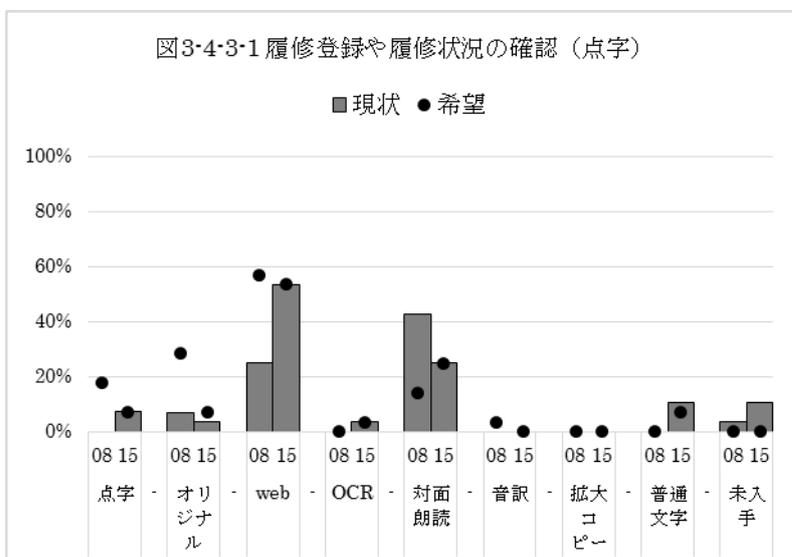
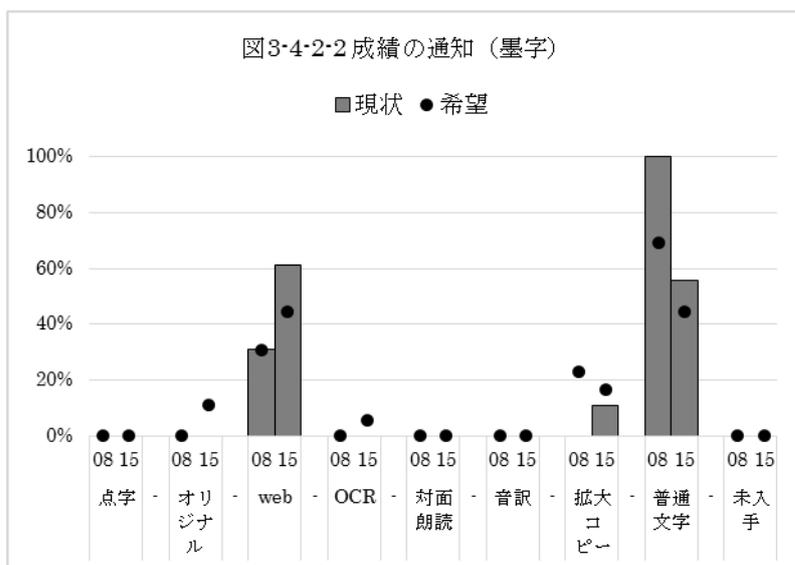
墨字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008 年度は、「普通文字」(100.0%)、「web」(30.8%) で、2015 年度は、「web」(61.1%)、「普通文字」(55.6%)、「拡大コピー」(11.1%) でした。2008 年度と比べ、普通文字の割合が大きく減少し、web の割合が増加していることがわかりました。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008 年度は、「普通文字」(69.2%)、「web」(30.8%)、「拡大コピー」(23.1%) で、2015 年度は、「web」「普通文字」(各 44.4%)、「拡大コピー」(16.7%) でした。現状では、web で通知する大学が増加していますが、web での通知を希望する学生は半数以下であることから、多様なニーズがあることがわかりました。

③ 履修登録や履修状況の確認

図 3-4-3-1 に点字使用学生の履修登録や履修状況の確認の入手、図 3-4-3-2 に墨字使用学生の履修登録や履修状況の確認の入手の結果を示します。

点字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008 年度は、「対面朗読」(42.9%)、「web」(25.0%)、「オリジナルの電子データ」(7.1%) で、2015 年度は、「web」(53.6%)、「対面朗



読」(25.0%)、「普通文字」「未入手」(各 10.7%) でした。2008 年度に比べ、対面朗読の割合が減少し、web の割合が増加していることがわかりました。これは、履修登録や履修状況の確認もまた、web で行う大学が増えてきているためであると考えられます。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008 年度は、「web」(57.1%)、「オリジナルの電子データ」(28.6%)、「点字」(17.9%) で、2015 年度は、「web」(53.6%)、「対面朗読」(25.0%)、「オリジナルの電子データ」「普通文字」「未入手」(各 7.1%) でした。2008 年度と比べ、オリジナルの電子データを希望する学生の割合が減少し、対面朗読を希望する学生の割合が増加していることがわかりました。このことから、履修登録や履修状況の確認では間違いがあってはならず、電子データを画面読み上げソフトなどを用いて独力で確認するよりも対面朗読の方が安心なのではないかと考えられます。

墨字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008 年度は、「web」(61.5%)、「普通文字」(38.5%)、「オリジナルの電子データ」(7.7%) で、2015 年度は、「web」(83.3%)、「普通文字」(22.2%) でした。2008 年度と比べ、web の割合が増加していることがわかりました。

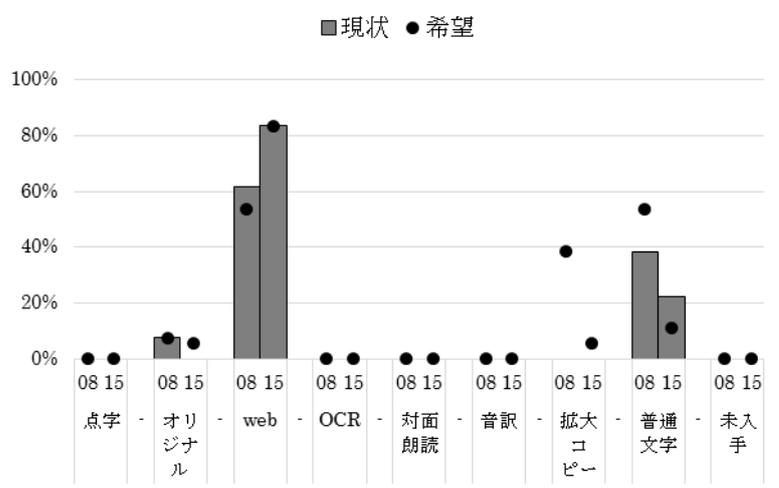
一方、希望を割合の高い順に示すと、2008 年度は、「web」「普通文字」(各 53.8%)、「拡大コピー」(38.5%) で、2015 年度は、「web」(83.3%)、「普通文字」(11.1%)、「オリジナルの電子データ」「拡大コピー」(各 5.6%) でした。2008 年度に比べ、web を希望する学生の割合が大きく増加し、普通文字や拡大コピーを希望する学生の割合は大きく減少しています。このことから、web で履修登録や履修状況を確認できるようになってきている現状を確認することができ、墨字使用学生にとっては便利になってきていると考えられます。

④ 事務連絡等のまとめ

掲示板等による諸連絡、成績の通知、履修登録や履修状況の確認のいずれの場合にも、点字使用学生、墨字使用学生ともに、現状も希望も web の割合が 1 位でした。一般の学生向けに整備されてきている web 上のシステムを、視覚障害学生も活用できているものと考えられ、大学側が特別な配慮をしなくても、視覚障害学生が対応しやすい環境になってきていると考えられます。

ただし、履修登録や履修状況の確認においては、現状・希望ともに web の割合が 1 位ではあるものの、点字使用学生では、現状・希望ともにその割合が約 5 割とそれほど高い値

図3-4-3-2 履修登録や履修状況の確認（墨字）



ではないことから、正確に手続きを行うためには、人的支援も必要であることの理解を求めていく必要があります。

また、入学当初から web を用いて効率的に情報を得られるよう、高校時代からパソコンや画面読み上げソフトなどの操作に慣れておくことが望まれます。一方、大学側には、web の製作にあたり、画面読み上げソフトを用いて読んでも効率よく正確に読み取れるようなレイアウトや形式の工夫をお願いしたいものです。

4. 資料の提出

「授業中に作成し提出する資料」、「授業以外で作成し提出する資料」、「事務手続き」の資料の提出形態について、現状と希望を質問しました。

提出形態については、以下の7形態からあてはまるものをすべて選んでもらいました。それぞれの項目について、各形態を利用している割合及び、希望している割合を、点字使用学生・墨字使用学生別に表と図に示します。

- ・点字
- ・自筆の墨字
- ・パソコンで作成し印刷
- ・電子データ（パソコンで作成し電子メール等で提出）
- ・代筆
- ・web 入力
- ・手続き専用端末の利用

(1) 授業中に作成し提出する資料

「小テスト」、「出席カード」、「授業内のコメントカード」について質問しました。表 4-1-1 に点字使用学生、表 4-1-2 に墨字使用学生の結果を示します。

表 4-1-1 授業中に作成し提出する資料(点字)

		点字	自筆	印刷	電子データ	代筆	Web 入力	専用端末	
小テスト	現状	08	14.3%	3.6%	28.6%	64.3%	21.4%	3.6%	0.0%
		15	21.4%	3.6%	10.7%	78.6%	32.1%	0.0%	0.0%
	希望	08	42.9%	0.0%	10.7%	67.9%	3.6%	3.6%	0.0%
		15	46.4%	0.0%	7.1%	57.1%	10.7%	0.0%	0.0%
出席カード	現状	08	0.0%	7.1%	3.6%	25.0%	96.4%	0.0%	0.0%
		15	0.0%	7.1%	0.0%	7.1%	82.3%	7.1%	21.4%
	希望	08	25.0%	3.6%	0.0%	17.9%	50.0%	3.6%	0.0%
		15	7.1%	3.6%	0.0%	3.6%	64.3%	3.6%	21.4%
授業内のコメントカード	現状	08	3.6%	3.6%	14.3%	64.3%	60.7%	0.0%	0.0%
		15	0.0%	3.6%	10.7%	85.7%	21.4%	0.0%	0.0%
	希望	08	21.4%	3.6%	7.1%	67.9%	25.0%	0.0%	0.0%
		15	17.9%	3.6%	0.0%	67.9%	17.9%	0.0%	0.0%

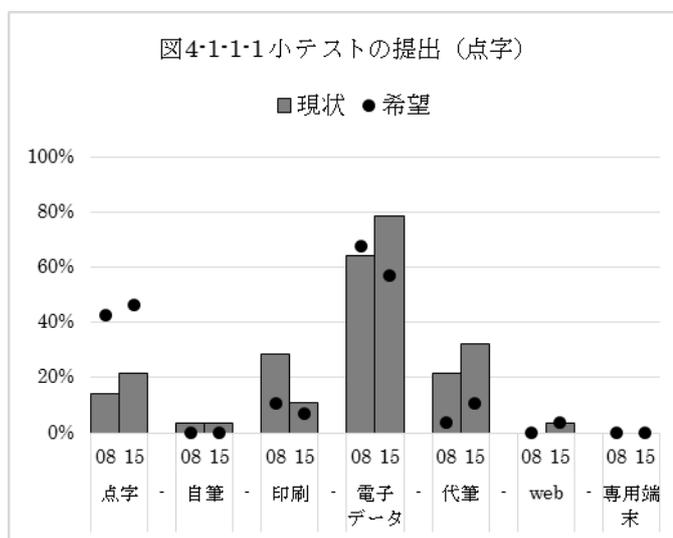
表 4-1-2 授業中に作成し提出する資料(墨字)

		点字	自筆	印刷	電子データ	代筆	Web入力	専用端末
小テスト	現状	08 0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	15 0.0%	94.4%	0.0%	0.0%	0.0%	16.7%	0.0%	
希望	08 0.0%	92.3%	7.7%	15.4%	0.0%	0.0%	0.0%	
	15 0.0%	77.8%	5.6%	22.2%	0.0%	11.1%	0.0%	
出席カード	現状	08 0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	7.7%
	15 0.0%	83.3%	0.0%	0.0%	5.6%	16.7%	16.7%	
希望	08 0.0%	92.3%	0.0%	0.0%	7.7%	7.7%	7.7%	
	15 0.0%	72.2%	0.0%	0.0%	0.0%	11.1%	22.2%	
授業内のコメントカード	現状	08 0.0%	100.0%	7.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	15 0.0%	94.4%	0.0%	5.6%	0.0%	5.6%	0.0%	
希望	08 0.0%	92.3%	15.4%	7.7%	0.0%	7.7%	0.0%	
	15 0.0%	83.3%	11.1%	5.6%	0.0%	5.6%	0.0%	

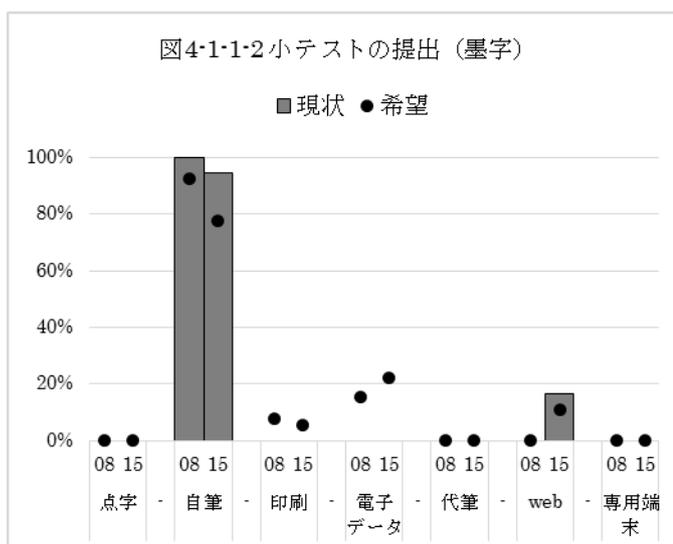
① 小テスト

図 4-1-1-1 に点字使用学生の小テストの提出、図 4-1-1-2 に墨字使用学生の小テストの提出の結果を示します。

点字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008 年度は、「電子データ」(64.3%)、「印刷」(28.6%)、「代筆」(21.4%) で、2015 年度は、「電子データ」(78.6%)、「代筆」(32.1%)、「点字」(21.4%) でした。2008 年度に比べ、電子データの割合が増加していることがわかりました。



一方、希望を割合の高い順に示すと、2008 年度は、「電子データ」(67.9%)、「点字」(42.9%)、「印刷」(10.7%) で、2015 年度は、「電子データ」(57.1%)、「点字」(46.4%)、「代筆」(10.7%) でした。2008 年度と比べ、電子データを希望する学生の割合が減少していることがわかりました。電子データで解答を作成するためには、パソコンなどの電子機器を持ち込む必要があり、解答を提出するためにインターネット環境が必要



になったり、USB などの記録媒体を携帯する必要があったりするため、負担が大きいものと考えられます。

墨字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「自筆」(100.0%)のみで、2015年度は、「自筆」(94.4%)、「web入力」(16.7%)でした。2008年度と比べ、webに入力するという手段が出てきていることがわかりました。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「自筆」(92.3%)、「電子データ」(15.4%)、「印刷」(7.7%)で、2015年度は、「自筆」(77.8%)、「電子データ」(22.2%)、「web入力」(11.1%)でした。2008年度に比べ、自筆を希望する学生の割合が減少し、電子データやweb入力などのデータでの提出を希望する学生が増加してきていることがわかりました。

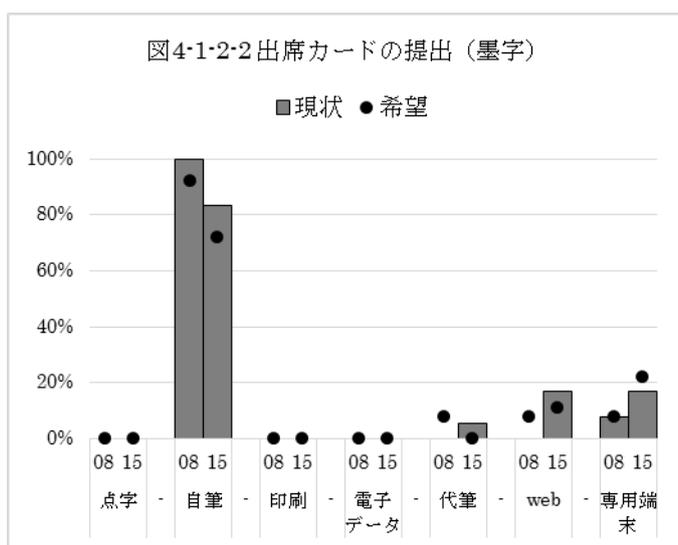
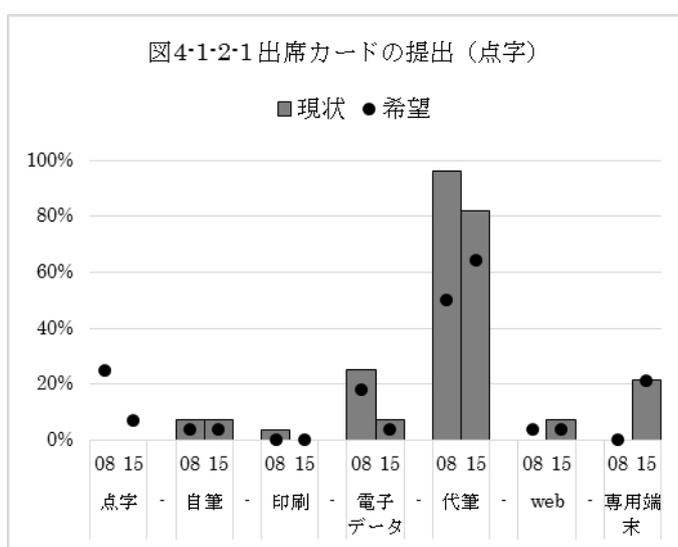
② 出席カード

図4-1-2-1に点字使用学生の出席カードの提出、図4-1-2-2に墨字使用学生の出席カードの提出の結果を示します。

点字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「代筆」(96.4%)、「電子データ」(25.0%)、「自筆」(7.1%)で、2015年度は、「代筆」(82.3%)、「専用端末」(21.4%)、「自筆」「電子データ」「web入力」(各7.1%)でした。2008年度に比べ、専用端末が導入されている大学が出てきたこともあり、代筆の割合が減少していることがわかりました。ただし、「代筆」には、友人に依頼している場合と、担当教員が確認して行っている場合を含んでいます。いずれにしても、独力で処理できていない学生が8割以上いることがわかりました。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「代筆」(50.0%)、「点字」(25.0%)、「電子データ」(17.9%)で、2015年度は、「代筆」(64.3%)、「専用端末」(21.4%)、「点字」(7.1%)でした。現状と同様に、専用端末の希望が増えてきています。専用端末が整備されることは、点字使用学生にとって便利になることがわかりました。

墨字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「自筆」(100.0%)、「専用端末」(7.7%)で、2015年度は、「自筆」(83.3%)、「web入力」「専用端末」(各16.7%)でし



た。2008年度と比べ、自筆の割合が減少し、様々な手段があることがわかりました。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「自筆」(92.3%)、「代筆」「web入力」「専用端末」(各7.7%)で、2015年度は、「自筆」(72.2%)、「専用端末」(22.2%)、「web入力」(11.1%)でした。2008年度に比べ、自筆を希望する学生の割合が減少し、専用端末やweb入力を希望する学生が増加してきていることがわかりました。

③ 授業内のコメントカード

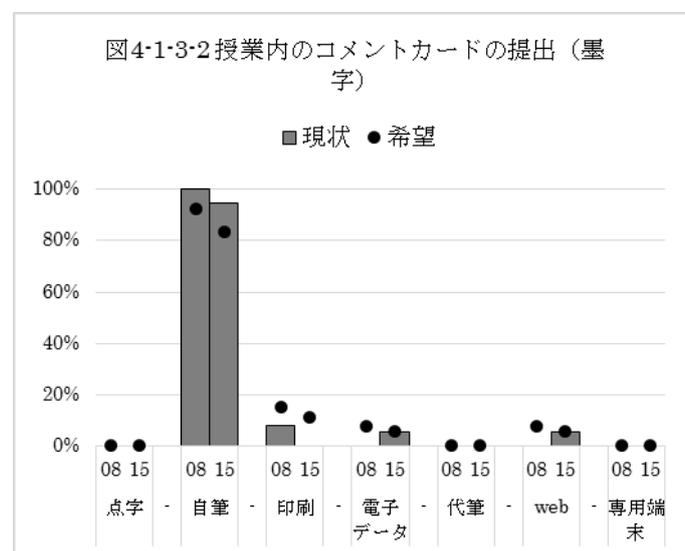
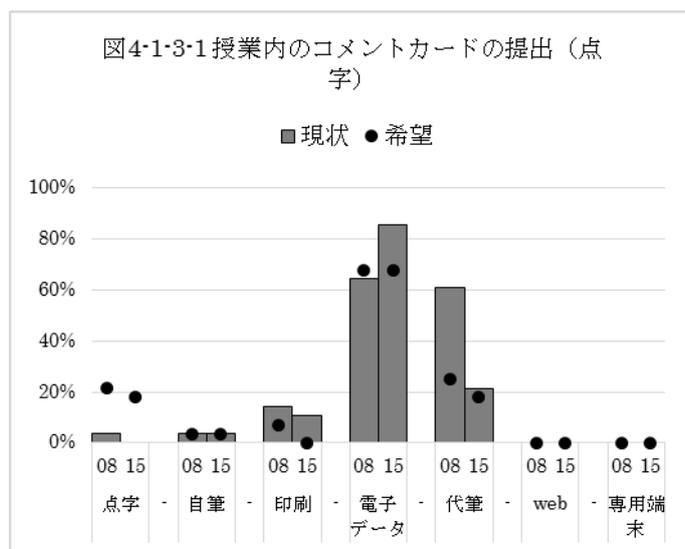
図4-1-3-1に点字使用学生の授業内のコメントカードの提出、図4-1-3-2に墨字使用学生の授業内のコメントカードの提出の結果を示します。

点字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「電子データ」(64.3%)、「代筆」(60.7%)、「印刷」(14.3%)で、2015年度は、「電子データ」(85.7%)、「代筆」(21.4%)、「印刷」(10.7%)でした。2008年度に比べ、電子データの割合が増加し、代筆の割合が大きく減少しており、独力で作成して提出できるようになってきていることがわかりました。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「電子データ」(67.9%)、「代筆」(25.0%)、「点字」(21.4%)で、2015年度は、「電子データ」(67.9%)、「点字」「代筆」(各17.9%)でした。現状は、電子データの割合が増えていましたが、電子データでの提出を希望している学生は増えておらず、電子データでの提出が必ずしも最適であるといえないことがわかりました。

墨字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「自筆」(100.0%)、「印刷」(7.7%)で、2015年度は、「自筆」(94.4%)、「電子データ」「web入力」(各5.6%)でした。2008年度と比べ、電子データやweb入力などデータを用いて提出できるようになってきていることがわかりました。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「自筆」(92.3%)、「印刷」(15.4%)、



「電子データ」「web 入力」(各 7.7%) で、2015 年度は、「自筆」(83.3%)、「印刷」(11.1%)、「電子データ」「web 入力」(各 5.6%) でした。2008 年度に比べ、自筆を希望する学生の割合は少し減少していますが、ほとんどの学生は自筆を希望していることがわかりました。

④ 授業中に作成し提出する資料のまとめ

出席カードについてみると、2008 年度の現状は、点字使用学生では代筆、墨字使用学生では自筆の割合が非常に高く、その場で墨字で書いたものの提出を求められていましたが、2015 年度には、専用端末や web 入力を導入している大学が出てきました。このようなシステムが導入されている大学の視覚障害学生のほとんどは、その手段を希望していました。専用端末などの導入は、いつ出席カードが配布されているか認識したり、必要事項を周囲の学生に記入してもらわなければならないかという負担を軽くすることにつながると考えられます。

小テストと授業内のコメントカードについてみると、点字使用学生では、現状・希望ともに電子データが 1 位でしたが、いずれの場合も、点字や代筆を希望している学生もいることがわかりました。電子データで作成するためには電子機器を持ち込む必要があることや、授業中に提出できず授業後に完成させる必要があることに、負担を感じているものと考えられます。

墨字使用学生では、現状・希望ともに自筆が 1 位で、いずれも高い割合を示していました。やはり授業中に提出できる方法を希望している学生が多いと考えられます。ただし、墨字使用学生の中にも電子データなど自筆以外の方法を希望している学生もいることは軽視できず、見え方によって効率よく解答できる手段が異なるということを理解してもらう必要があります。

(2) 授業以外で作成し提出する資料

「レポート」、「発表資料」、「定期試験」について質問しました。表 4-2-1 に点字使用学生、表 4-2-2 に墨字使用学生の結果を示します。

表 4-2-1 授業以外で作成し提出する資料(点字)

		点字	自筆	印刷	電子データ	代筆	Web入力	専用端末	
レポート	現状	08	10.7%	0.0%	82.1%	78.6%	3.6%	7.1%	0.0%
		15	0.0%	3.6%	67.9%	89.3%	3.6%	14.3%	0.0%
	希望	08	10.7%	0.0%	50.0%	85.7%	3.6%	0.0%	0.0%
		15	14.3%	0.0%	32.1%	78.6%	3.6%	3.6%	0.0%
発表資料	現状	08	0.0%	0.0%	67.9%	39.3%	0.0%	3.6%	0.0%
		15	0.0%	0.0%	64.3%	46.4%	0.0%	0.0%	0.0%
	希望	08	7.1%	0.0%	60.7%	46.4%	0.0%	0.0%	0.0%
		15	3.6%	0.0%	46.4%	57.1%	0.0%	0.0%	0.0%
定期試験	現状	08	53.6%	10.7%	35.7%	60.7%	3.6%	0.0%	0.0%
		15	53.6%	0.0%	14.3%	57.1%	7.1%	0.0%	0.0%
	希望	08	64.3%	7.1%	21.4%	35.7%	3.6%	0.0%	0.0%
		15	75.0%	0.0%	0.0%	35.7%	0.0%	0.0%	0.0%

表 4-2-2 授業以外で作成し提出する資料(墨字)

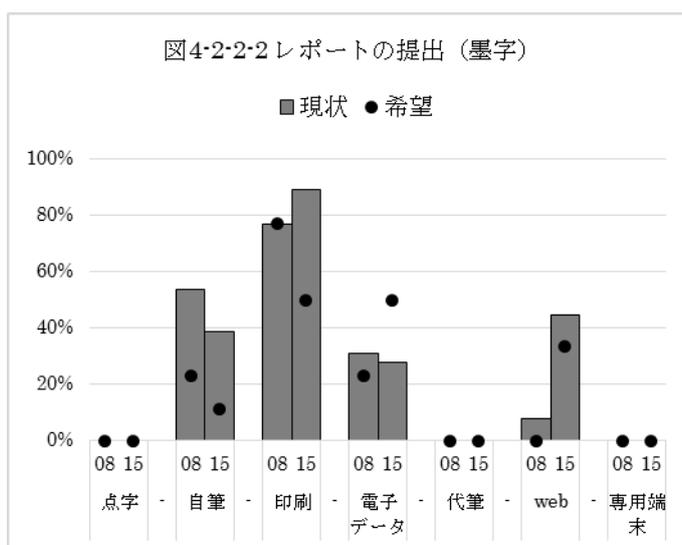
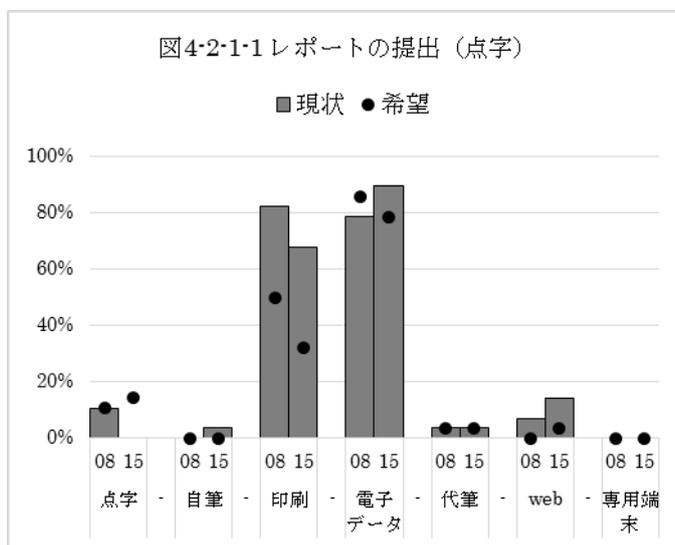
		点字	自筆	印刷	電子データ	代筆	Web入力	専用端末	
レポート	現状	08	0.0%	53.8%	76.9%	30.8%	0.0%	7.7%	0.0%
		15	0.0%	38.9%	88.9%	27.8%	0.0%	44.4%	0.0%
	希望	08	0.0%	23.1%	76.9%	23.1%	0.0%	0.0%	0.0%
		15	0.0%	11.1%	50.0%	50.0%	0.0%	33.3%	0.0%
発表資料	現状	08	0.0%	46.2%	76.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		15	0.0%	16.7%	72.2%	11.1%	0.0%	16.7%	0.0%
	希望	08	0.0%	38.5%	84.6%	7.7%	0.0%	0.0%	0.0%
		15	0.0%	0.0%	72.2%	27.8%	0.0%	16.7%	0.0%
定期試験	現状	08	0.0%	100.0%	7.7%	7.7%	0.0%	0.0%	0.0%
		15	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	希望	08	0.0%	84.6%	23.1%	15.4%	0.0%	0.0%	0.0%
		15	0.0%	83.3%	5.6%	22.2%	0.0%	0.0%	0.0%

① レポート

図 4-2-1-1 に点字使用学生のレポートの提出、図 4-2-1-2 に墨字使用学生のレポートの提出の結果を示します。

点字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「印刷」(82.1%)、「電子データ」(78.6%)、「点字」(10.7%)で、2015年度は、「電子データ」(89.3%)、「印刷」(67.9%)、「web入力」(14.3%)でした。2008年度に比べ、印刷の割合が減少し、電子データの割合が増加していることがわかりました。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「電子データ」(85.7%)、「印刷」(50.0%)、「点字」(10.7%)で、2015年度は、「電子データ」(78.6%)、「印刷」(32.1%)、「点字」(14.3%)でした。2008年度に比べ、パソコンで作成したレポートを印刷して提出することを希望する学生の割合は減少していることがわかりました。これは、点字使用学生の場合、墨字で印刷したものを自分で確認することができないためであると考えられます。現状をみても、2008年度に比べ、印刷して提出している学生の割合は減少しており、大学側の理解が進んでいるものと考えられます。



墨字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「印刷」(76.9%)、「自筆」(53.8%)、「電子データ」(30.8%)で、2015年度は、「印刷」(88.9%)、「web入力」(44.4%)、「自筆」(38.9%)でした。2008年度と比べ、自筆の割合が減少し、パソコンで作成したものを印刷して提出している学生の割合が増加していることがわかりました。また、視覚障害学生に限らず、すべての学生が、パソコンで作成したものをweb上で指定されたフォルダに提出するという方法も出てきていることがわかりました。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「印刷」(76.9%)、「自筆」「電子データ」(各23.1%)で、2015年度は、「印刷」「電子データ」(各50.0%)、「web入力」(33.3%)でした。2008年度に比べ、自筆での作成よりもパソコンでの作成を希望する学生が増加していることがわかりました。また、提出する際には、印刷してから提出することを希望する学生の割合は減少し、電子データでの提出を希望している学生の割合が増加していることがわかりました。

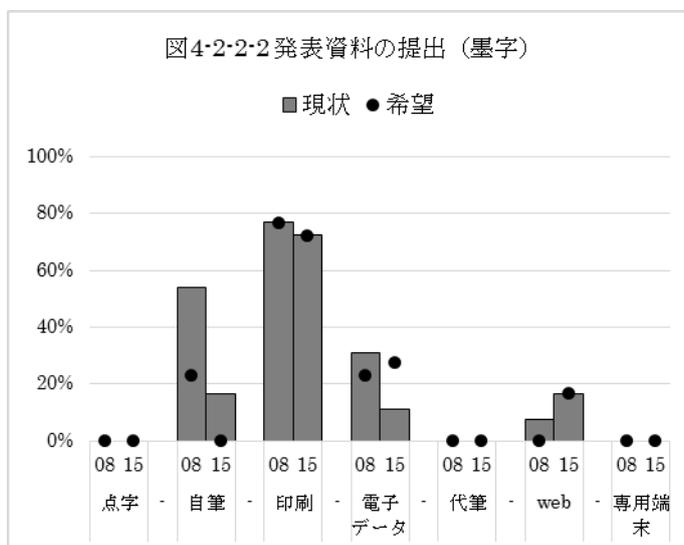
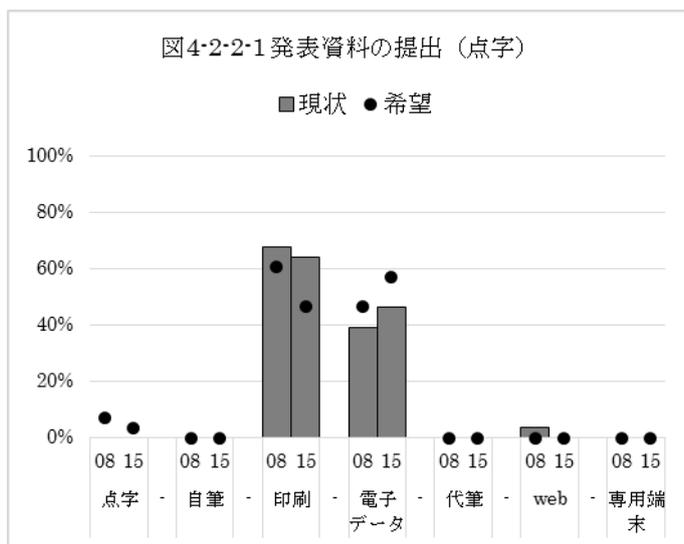
② 発表資料

図4-2-2-1に点字使用学生の発表資料の提出、図4-2-2-2に墨字使用学生の発表資料の提出の結果を示します。

点字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「印刷」(67.9%)、「電子データ」(39.3%)、「web入力」(3.6%)で、2015年度は、「印刷」(64.3%)、「電子データ」(46.4%)でした。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「印刷」(60.7%)、「電子データ」(46.4%)、「点字」(7.1%)で、2015年度は、「電子データ」(57.1%)、「印刷」(46.4%)、「点字」(3.6%)でした。2008年度に比べ、パソコンで作成した後、印刷して提出することを希望する学生よりも、電子データで提出することを希望する学生の割合の方が多くなったことがわかりました。やはり、点字使用学生にとって、印刷したものを自分で確認できないことが不安であると考えられます。

墨字使用学生の現状を割合が高い順



に示すと、2008年度は、「印刷」(76.9%)、「自筆」(46.2%)で、2015年度は、「印刷」(72.2%)、「自筆」「web入力」(各16.7%)でした。2008年度と比べ、自筆の割合が大きく減少していることがわかりました。これは、パソコンの普及が広がったことも影響していると考えられます。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「印刷」(84.6%)、「自筆」(38.5%)、「電子データ」(7.7%)で、2015年度は、「印刷」(72.2%)、「電子データ」(27.8%)、「web入力」(16.7%)でした。2008年度に比べ、電子データでの提出を希望する学生の割合が増加していることがわかりました。

③ 定期試験

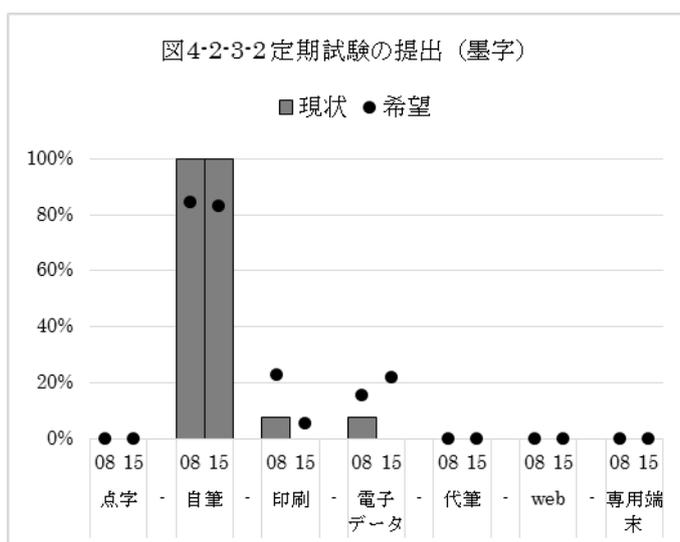
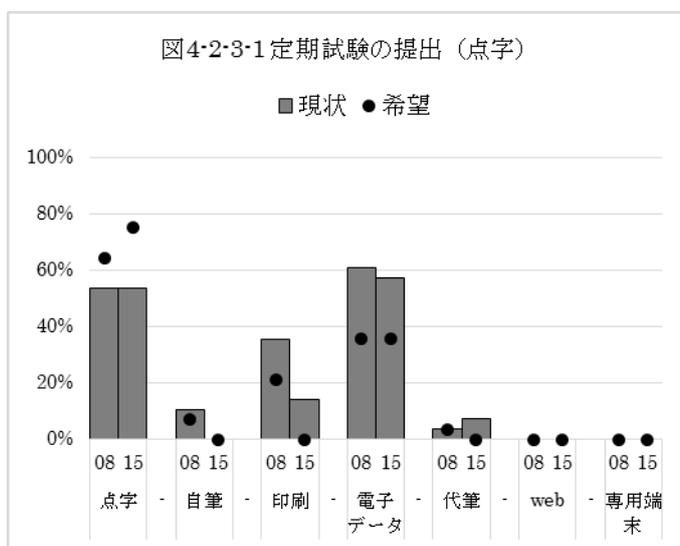
図4-2-3-1に点字使用学生の定期試験の提出、図4-2-3-2に墨字使用学生の定期試験の提出の結果を示します。

点字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「電子データ」(60.7%)、「点字」(53.6%)、「印刷」(35.7%)で、2015年度は、「電子データ」(57.1%)、「点字」(53.6%)、「印刷」(14.3%)でした。2008年度に比べ、印刷の割合が減少していることがわかりました。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「点字」(64.3%)、「電子データ」(35.7%)、「印刷」(21.4%)で、2015年度は、「点字」(75.0%)、「電子データ」(35.7%)でした。2008年度に比べ、点字での提出を希望する学生の割合が増加していることがわかりました。また、印刷して提出することを希望する学生はならず、定期試験は成績に大きく影響することから、点字や電子データなど自分で確認できる手段での提出を希望していることがわかりました。

墨字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「自筆」(100.0%)、「印刷」「電子データ」(各7.7%)で、2015年度は、「自筆」(100.0%)のみでした。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「自筆」(84.6%)、「印刷」(23.1%)、



「電子データ」(15.4%)で、2015年度は、「自筆」(83.3%)、「電子データ」(22.2%)、「印刷」(5.6%)でした。希望も自筆の割合が高いですが、現状と比べると、パソコンで作成して印刷や電子データで提出することを希望している学生もいることがわかりました。

④ 授業以外で作成し提出する資料のまとめ

レポートと発表資料においては、点字使用学生、墨字使用学生ともに、パソコンでの作成が現状・希望ともに割合が高いという結果でした。ただし、点字使用学生では電子データでの提出が現状・希望ともに高く、墨字使用学生では印刷物の提出が現状・希望ともに高いという違いがあります。これは、点字使用学生にとっては、正確に印刷できているかを自分で確認できないためです。2008年度に比べ、電子データでの提出が認められ、視覚障害学生にとって提出しやすい状況になってきており、この状況が続くとよいと思います。ただし、IT技術の発展に伴い、提出しづらい方式にならないことを願っています。

定期試験における希望は、点字使用学生は点字での提出、墨字使用学生は自筆での提出が1位でした。どの学生も、手書きで解答を作成することを希望していることがわかりました。しかし、点字使用学生の定期試験では、5割程度でしか点字で行われていません。大学側としては、点字よりも電子データの方が便利であることも考えられますが、学年や試験の種類によって、学生が実力を発揮できる文字で受験できるよう、理解を求めていく必要があります。

(3) 事務手続き

「履修登録」、「証明書等の発行手続き」、「その他の事務手続き」について質問しました。表4-3-1に点字使用学生、表4-3-2に墨字使用学生の結果を示します。

表4-3-1 事務手続き(点字)

		点字	自筆	印刷	電子データ	代筆	Web入力	専用端末	
履修登録	現状	08	0.0%	0.0%	3.6%	25.0%	57.1%	0.0%	
		15	0.0%	0.0%	0.0%	60.7%	35.7%	0.0%	
	希望	08	0.0%	0.0%	3.6%	25.0%	7.1%	60.7%	3.6%
		15	7.1%	0.0%	0.0%	10.7%	25.0%	64.3%	0.0%
証明書等の発行手続き	現状	08	0.0%	3.6%	0.0%	0.0%	25.0%	3.6%	39.3%
		15	0.0%	0.0%	0.0%	3.6%	64.3%	0.0%	7.1%
	希望	08	3.6%	0.0%	3.6%	17.9%	28.6%	25.0%	39.3%
		15	3.6%	0.0%	0.0%	7.1%	71.4%	10.7%	3.6%
その他の事務手続き	現状	08	3.6%	3.6%	3.6%	10.7%	78.6%	7.1%	3.6%
		15	0.0%	3.6%	3.6%	7.1%	92.9%	0.0%	0.0%
	希望	08	3.6%	0.0%	3.6%	35.7%	46.4%	17.9%	14.3%
		15	7.1%	0.0%	7.1%	10.7%	82.1%	17.9%	0.0%

表 4-3-2 事務手続き(墨字)

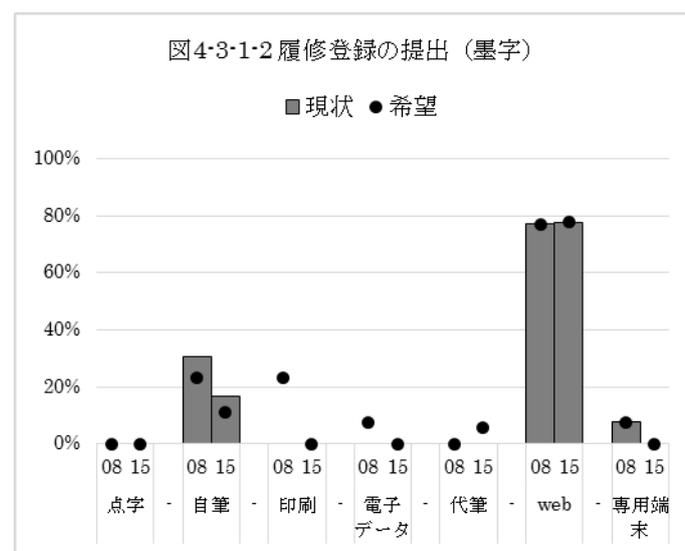
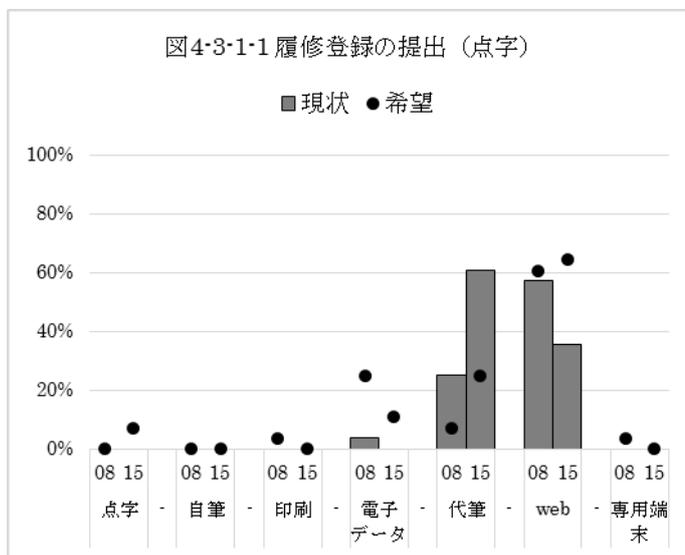
		点字	自筆	印刷	電子データ	代筆	Web入力	専用端末	
履修登録	現状	08	0.0%	30.8%	0.0%	0.0%	76.9%	7.7%	
		15	0.0%	16.7%	0.0%	0.0%	77.8%	0.0%	
	希望	08	0.0%	23.1%	23.1%	7.7%	0.0%	76.9%	7.7%
		15	0.0%	11.1%	0.0%	0.0%	5.6%	77.8%	0.0%
証明書等の発行手続き	現状	08	0.0%	46.2%	7.7%	0.0%	7.7%	30.8%	
		15	0.0%	27.8%	16.7%	0.0%	11.1%	50.0%	
	希望	08	0.0%	53.8%	15.4%	7.7%	15.4%	46.2%	
		15	0.0%	16.7%	5.6%	0.0%	22.2%	27.8%	
その他の事務手続き	現状	08	0.0%	92.3%	15.4%	0.0%	7.7%	0.0%	
		15	0.0%	61.1%	11.1%	0.0%	22.2%	0.0%	
	希望	08	0.0%	92.3%	15.4%	7.7%	7.7%	7.7%	
		15	0.0%	38.9%	16.7%	0.0%	27.8%	0.0%	

① 履修登録

図 4-3-1-1 に点字使用学生の履修登録の提出、図 4-3-1-2 に墨字使用学生の履修登録の提出の結果を示します。

点字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008 年度は、「web 入力」(57.1%)、「代筆」(25.0%)、「電子データ」(3.6%) で、2015 年度は、「代筆」(60.7%)、「web 入力」(35.7%) でした。ただし、2015 年度の「代筆」には、web への入力を代行してもらっている学生も含まれています。履修登録を web で行える大学が増えてきていますが、必ずしも点字使用学生にとって操作しやすい状況ではないと考えられます。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008 年度は、「web 入力」(60.7%)、「電子データ」(25.0%)、「代筆」(7.1%) で、2015 年度は、「web 入力」(64.3%)、「代筆」(25.0%)、「電子データ」(10.7%) でした。2008 年度に比べ、代筆を希望する学生の割合が増加していることがわかりました。履修登録はかなり複雑で、間違えてはいけないものであるため、独力で行いたいという希望をもっている学生も多くいますが、



事務職員の方などに正確に確認してもらいながら

進めたいと思っている学生もいるようです。

墨字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「web入力」(76.9%)、「自筆」(30.8%)、「専用端末」(7.7%)で、2015年度は、「web入力」(77.8%)、「自筆」(16.7%)でした。2008年度に比べ、自筆で提出している学生の割合が減少していることがわかりました。これは、履修登録をwebで行う大学が増えているためであると考えられます。

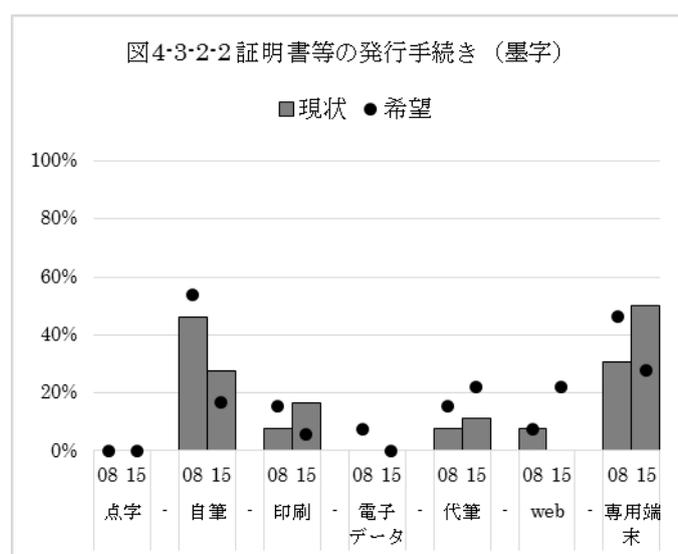
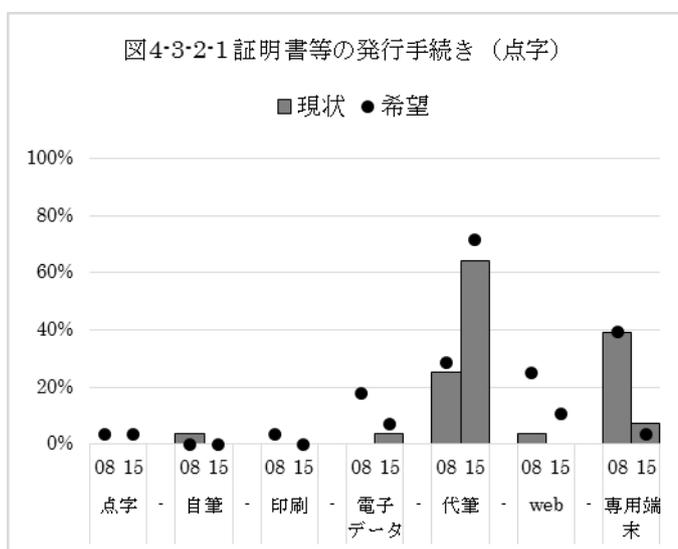
一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「web入力」(76.9%)、「自筆」「印刷」(各23.1%)で、2015年度は、「web入力」(77.8%)、「自筆」(11.1%)、「代筆」(5.6%)でした。2008年度も2015年度も、webで入力できている学生はweb入力で事足りているようですが、そうでない学生は代筆などを希望しているようです。

② 証明書等の発行手続き

図4-3-2-1に点字使用学生の証明書等の発行手続き、図4-3-2-2に墨字使用学生の証明書等の発行手続きの結果を示します。

点字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「専用端末」(39.3%)、「代筆」(25.0%)、「web入力」「自筆」(各3.6%)で、2015年度は、「代筆」(64.3%)、「専用端末」(7.1%)、「電子データ」(3.6%)でした。ただし、2015年度の「代筆」には、専用端末の操作を代行してもらっている学生も含んでいます。また、21%の学生が、証明書等の発行手続きを行ったことのないという回答でした。そのため、割合の合計が100%に達していません。2008年度に比べ、専用端末の割合が大きく減少しています。これは、専用端末がタッチパネルになるなど、点字使用学生が独力で操作できないものになっていることが考えられます。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「専用端末」(39.3%)、「代筆」(28.6%)、「web入力」(25.0%)で、2015年度は、「代筆」(71.4%)、「web入力」(10.7%)、「電子データ」(7.1%)でした。2008



年度に比べ、代筆を希望する学生の割合が大きく増加していることがわかりました。また、その他の意見として、音声が出る専用端末を導入してほしいなど、自分で操作できる専用端末の導入を希望する学生も多くいました。多くの大学で、証明書等を発行するための専用端末が導入されているものの、点字使用学生が操作できる機器ではないことがわかりました。

墨字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「自筆」(46.2%)、「専用端末」(30.8%)、「印刷」「代筆」「web入力」(各7.7%)で、2015年度は、「専用端末」(50.0%)、「自筆」(27.8%)、「印刷」(16.7%)でした。2008年度に比べ、自筆の割合が減少し、専用端末の割合が増加していることがわかりました。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「自筆」(53.8%)、「専用端末」(46.2%)、「代筆」「印刷」(各15.4%)で、2015年度は、「専用端末」(27.8%)、「web入力」「代筆」(各22.2%)でした。2008年度に比べ、専用端末を利用している学生の割合が増加しているものの、希望は減少していることがわかりました。墨字使用学生は、専用端末を使えてはいるものの、使いにくさを感じているものと考えられます。視覚障害学生が独力で使える専用端末が導入されていくことを期待します。

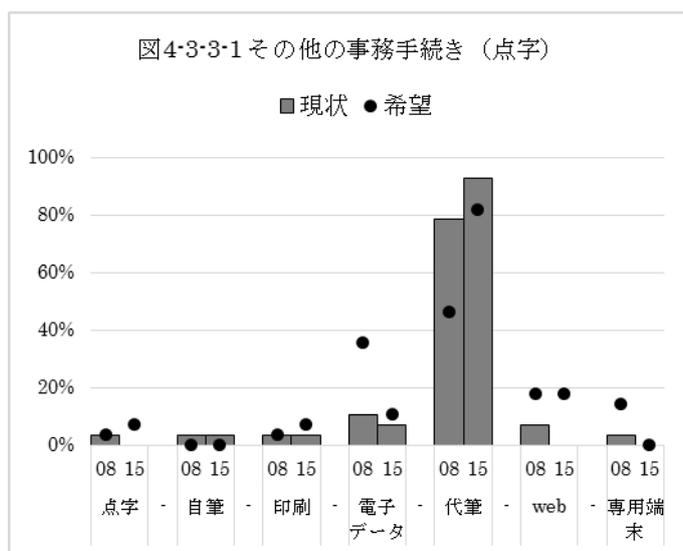
③ その他の事務手続き

図4-3-3-1に点字使用学生のその他の事務手続き、図4-3-3-2に墨字使用学生のその他の事務手続きの結果を示します。

点字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「代筆」(78.6%)、「電子データ」(10.7%)、「web入力」(7.1%)で、2015年度は、「代筆」(92.9%)、「電子データ」(7.1%)、「自筆」「印刷」(各3.6%)でした。2008年度に比べ、代筆の割合が増加していることがわかりました。また、自分でweb入力をしている学生はいませんでした。点字使用学生が操作しづらいシステムであることや、対応できない手書きの書類が多くあるのではないかと考えられます。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「代筆」(46.4%)、「電子データ」(35.7%)、「web入力」(17.9%)で、2015年度は、「代筆」(82.1%)、「web入力」(17.9%)、「電子データ」(10.7%)でした。2008年度に比べ、代筆を希望する学生の割合が大きく増加していることがわかりました。

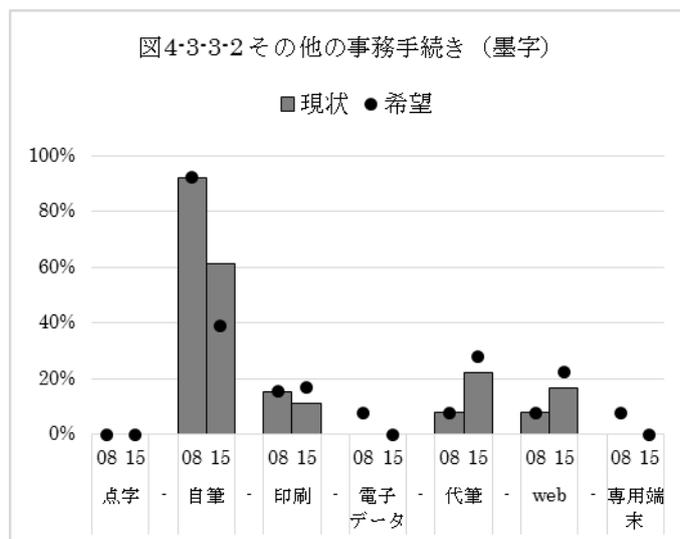
墨字使用学生の現状を割合が高い順に示すと、2008年度は、「自筆」(92.3%)、「印刷」(15.4%)、「代筆」「web入力」(各7.7%)



で、2015年度は、「自筆」(61.1%)、「代筆」(22.2%)、「web入力」(16.7%)でした。2008年度に比べ、自筆の割合が減少し、代筆の割合が増加していることがわかりました。

一方、希望を割合の高い順に示すと、2008年度は、「自筆」(92.3%)、「印刷」(15.4%)、「電子データ」「代筆」「web入力」「専用端末」(各7.7%)で、2015年度は、「自筆」(38.9%)、「代筆」(27.8%)、「web入力」(22.2%)でした。2008年度に比べ、自筆で手続きすることを希望

する学生がかなり大きく減少し、代筆が増加していることがわかりました。自筆の割合が減少しているのは現状と同様ですが、希望の方がより大きく減少しています。事務手続きの書類は、文字や記入欄が小さいことが多く、墨字を使用している学生でも、自筆での提出に負担に感じている学生が多いようです。



④ 事務手続きのまとめ

証明書等の発行手続きについてみると、墨字使用学生では現状・希望ともに専用端末が1位で、点字使用学生では現状・希望ともに代筆が1位でした。このことから、多くの大学では、証明書等の発行手続きのために、墨字使用学生であれば操作できるような専用端末が導入されているものの、点字使用学生には操作できない端末であるようです。点字使用学生が自分で操作できる端末の導入が期待されます。

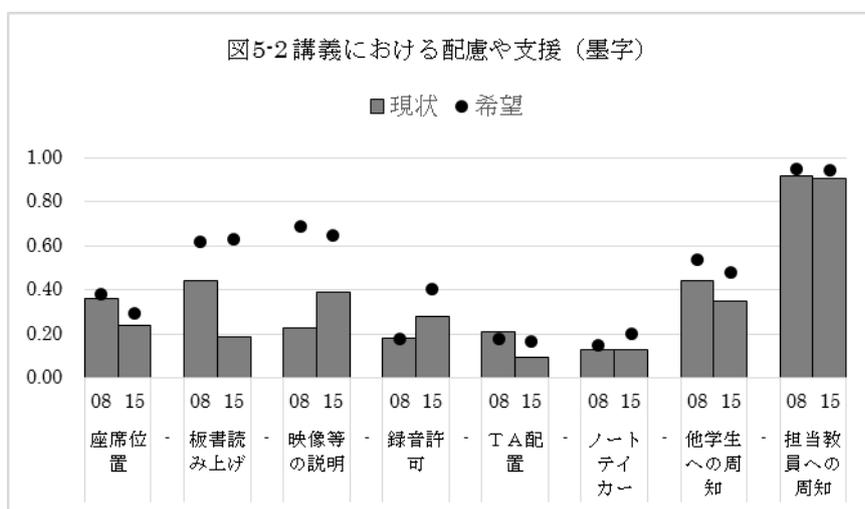
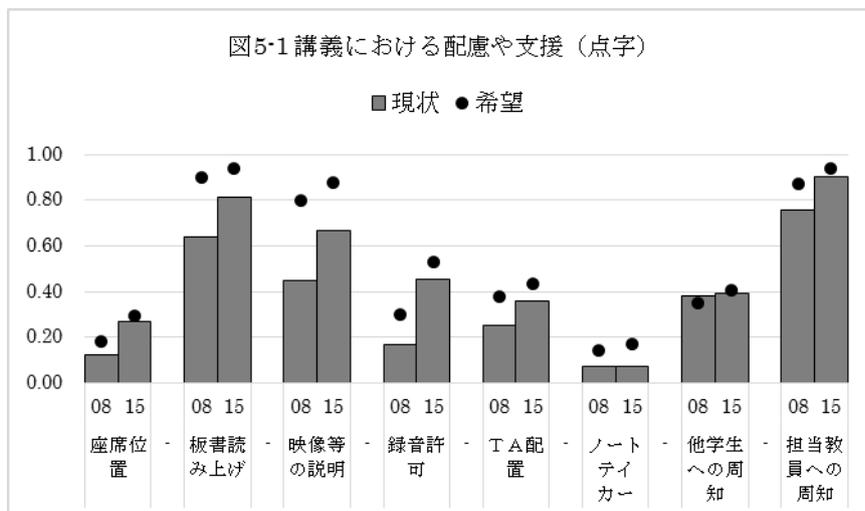
また、その他の事務手続きについてみると、墨字使用学生では現状・希望ともに自筆が1位で、点字使用学生では現状・希望ともに代筆が1位でした。このことから、証明書の発行以外の事務手続きについては、書類での提出が多く、点字使用学生は代筆をお願いせざるを得ない状況であることがわかりました。

いずれにしても、墨字使用学生においては、1位の手段を希望する学生の割合が必ずしも高くなく、他の手段を希望している学生も多くいました。それぞれの学生のニーズに合わせた支援が必要です。

履修登録についてみると、墨字使用学生では現状・希望ともにweb入力が1位で、点字使用学生の希望もweb入力が1位でした。なお、点字使用学生の現状はweb入力を代わりに行ってもらうことも含めて代筆が1位でした。多くの大学で、一般の学生も含め、履修登録がweb入力で行われるようになってきていることが影響していると考えられます。しかし、履修登録は正確に行わなければならないため、点字使用学生が独力で行おうとすると、確認する際に時間もかかりますし、不安も大きいようです。

5. 講義等

講義における配慮や支援として、「座席位置の配慮」、「講義の録音の許可」、「板書の読み上げ」、「スライド・ビデオの字幕・映像等の説明」、「TA（ティーチング・アシスタント）の配置」、「ノートテイカーの配置」、「他の学生への周知」、「授業担当教員への周知」の8項目について質問しました。各項目における現状について、「まったくしてもらっていない」を0点、「たまにしてもらっている」を1点、「時々してもらっている」を2点、「いつもしてもらっている」を3点、希望については、「まったく必要ない」を0点、「たまに配慮してほしい」を1点、「時々配慮してほしい」を2点、「いつも配慮してほしい」を3点と得点化し、項目ごとの合計点を、点字使用学生・墨字使用学生それぞれの対象人数×満点（3点）で割った値を求めました。その結果を図5-1（点字）、図5-2（墨字）に示します。



また、視覚障害があるために、授業内容が変更されたり、履修をあきらめざるをえなかったりしたケースについて自由に記述してもらいました。

(1) 座席位置の配慮

点字使用学生では、2008年度は現状0.12、希望0.18（「まったく必要ない」は71.4%）で、2015年度は現状0.27、希望0.30（「まったく必要ない」は29.6%）でした。墨字使用学生では、2008年度は現状0.36、希望0.38（「まったく必要ない」は38.5%）で、2015年度は現状0.24、希望0.30（「まったく必要ない」は55.6%）でした。

点字使用学生の場合、どこが空いているのかを自分で探せないため、決まった席を確保しておいてもらえるとスムーズに着席でき、安心できる学生がいる一方で、特定の席にす

る必要はなく友人とコミュニケーションをとりながら着席している学生もいるようです。

墨字使用学生の場合、前方の席の方が黒板の文字を見やすいということがあるようですが、実際、前方の席は確保してもらわなくても空いていることが多く、あえて配慮をお願いする必要はないと感じているようです。

(2) 板書の読み上げ

点字使用学生では、2008年度は現状 0.64、希望 0.90（「まったく必要ない」は 0.0%）で、2015年度は現状 0.81、希望 0.94（「まったく必要ない」は 3.7%）でした。墨字使用学生では、2008年度は現状 0.44、希望 0.62（「まったく必要ない」は 23.1%）で、2015年度は現状 0.19、希望 0.63（「まったく必要ない」は 16.7%）でした。

2008年度に比べ、点字使用学生の現状の値が高くなり、墨字使用学生の現状の値が低くなっていることがわかりました。点字使用学生に対しては、板書の内容を言葉で説明してくれるようになってきており、ぜひ継続してもらいたいものです。墨字使用学生は見えているようでも板書の文字は見えなかったり、大きな黒板の中から必要な情報が書かれた場所を見つけることが困難であったりします。大学側にその点を理解してもらい、墨字使用学生に対しても、板書の内容を言葉で説明してもらえるような配慮を求めていく必要があります。

(3) スライド・ビデオの字幕・映像等の説明

点字使用学生では、2008年度は現状 0.45、希望 0.80（「まったく必要ない」は 0.0%）で、2015年度は現状 0.67、希望 0.88（「まったく必要ない」は 3.7%）でした。墨字使用学生では、2008年度は現状 0.23、希望 0.69（「まったく必要ない」は 7.7%）で、2015年度は現状 0.39、希望 0.65（「まったく必要ない」は 5.6%）でした。

2008年度に比べ、点字使用学生でも墨字使用学生でも、現状の割合が高くなってきていますが、希望の値をみると、十分に満たされていないことがわかりました。近年、講義中のビジュアルな情報提示方法がますます増えているため、視覚情報を補う支援の検討が不可欠であると考えられます。

(4) 録音の許可

点字使用学生では、2008年度は現状 0.17、希望 0.30（「まったく必要ない」は 42.9%）で、2015年度は現状 0.46、希望 0.53（「まったく必要ない」は 29.6%）でした。墨字使用学生では、2008年度は現状・希望ともに 0.18（「まったく必要ない」は 71.4%）で、2015年度は現状 0.28、希望 0.41（「まったく必要ない」は 44.4%）でした。

2008年度に比べ、点字使用学生でも墨字使用学生でも、現状・希望ともに高い値になっていることがわかりました。これは、講義中の情報量が増えたり、講義のスピードが速かったりしてノートを取りきれないことがあるためだと考えられます。また、墨字使用学生

では、板書の読み上げが行われている割合が低下していたこともあり、板書を確認しながら講義を受けていると、授業中にノートをまとめきれないのではないかと考えられます。

なお、録音をした場合、聞きなおすための時間がかかり、復習のためにかなり時間を費やすこととなります。

(5) TA (ティーチング・アシスタント) の配置

点字使用学生では、2008年度は現状 0.25、希望 0.38 (「まったく必要ない」は 21.4%) で、2015年度は現状 0.36、希望 0.43 (「まったく必要ない」は 14.8%) でした。墨字使用学生では、2008年度は現状 0.21、希望 0.18 (「まったく必要ない」は 61.5%) で、2015年度は現状 0.09、希望 0.17 (「まったく必要ない」は 61.1%) でした。

TAとは、一般には、大学院生が教育的配慮のもとに、学部学生等に助言や実験・演習等の補助を行うことで、大学教育の充実と大学院生のトレーニングの機会提供を図る制度を意味しますが、本調査では、視覚障害学生が授業を受ける際に、個別に必要な支援を行うために配置される大学院生や教職員を指しています。2008年度に比べ、点字使用学生の現状と希望の割合が高くなっていることがわかりました。情報処理や体育実技、ビデオを用いた授業に配置されていることが多く、そのような授業において有効であると考えられます。すべての授業で必要というわけではありませんが、授業の特性に応じて、授業者だけでは支援しきれない部分についてTAが配置されることを期待します。

(6) ノートテイカーの配置

点字使用学生では、2008年度は現状 0.07、希望 0.14 (「まったく必要ない」は 67.9%) で、2015年度は現状 0.07、希望 0.17 (「まったく必要ない」は 70.4%) でした。墨字使用学生では、2008年度は現状 0.13、希望 0.15 (「まったく必要ない」は 76.9%) で、2015年度は現状 0.13、希望 0.20 (「まったく必要ない」は 66.7%) でした。

ノートテイカーとは、視覚障害学生に代わって板書などの視覚情報をノートに書き取る支援者のことです。点字使用学生でも墨字使用学生でも、2008年度と大きな変化はなく、ノートテイカーの配置を希望している学生の割合はそれほど高くありませんでした。これは、視覚障害学生は自分で講義を聞きながらノートを取ることができるからだと考えられます。また、支援者に書き取ってもらったノートを読んで理解するためにかえって時間を費やすことになるので、できる限り授業中に内容を理解しようと努めていると思われます。

(7) 他の学生への周知

点字使用学生では、2008年度は現状 0.38、希望 0.35 (「まったく必要ない」は 25.0%) で、2015年度は現状 0.40、希望 0.41 (「まったく必要ない」は 25.9%) でした。墨字使用学生では、2008年度は現状 0.44、希望 0.54 (「まったく必要ない」は 23.1%) で、2015年度は現状 0.35、希望 0.48 (「まったく必要ない」は 27.8%) でした。

2008 年度に比べ、点字使用学生では現状・希望ともに値が高くなり、墨字使用学生では現状・希望ともに値が低くなっていることがわかりました。点字使用学生の場合、白杖や点字を使用しているということで説明しなくても視覚障害があることは明らかですが、視覚障害があるためにお願ひしたい配慮内容などを説明したいという希望が高くなってきているものと考えられます。墨字使用学生の場合、視覚障害があることが周りから理解されにくく無視したと誤解されることもあるため、自分の見え方を説明しておきたいという希望をもっている学生と、視覚障害の説明をすることに抵抗を感じている学生がいると思われれます。

また、「同じ授業が多いので学科の学生には周知したいが、学部の学生にまでは周知したくない」という意見や、「所属しているサークルの規模が大きく、どこまで自分の障害のことを話しておけばよいのか迷う」という意見もありました。

(8) 担当教員への周知

点字使用学生では、2008 年度は現状 0.76、希望は 0.87（「まったく必要ない」は 3.6%）で、2015 年度は現状 0.90、希望 0.94（「まったく必要ない」は 3.7%）でした。墨字使用学生では、2008 年度は現状 0.92、希望 0.95（「まったく必要ない」は 0.0%）で、2015 年度は現状 0.91、希望 0.94（「まったく必要ない」は 5.6%）でした。

2008 年度に比べ、点字使用学生の現状の値が高くなり、点字使用学生でも墨字使用学生でも、現状・希望ともにかなり高い値となりました。視覚障害学生が大学での学習を進める際には、教員の視覚障害に対する理解が不可欠であることを示しています。また、視覚障害学生が個別に必要な支援を教員に依頼する場合も、大学から公式な通達が各教員になされていることでスムーズに話を進められるという側面もあると思われれます。

(9) 授業内容の変更

情報処理や体育実技等の実習や実技について、内容を変更した授業について質問しました。

(ア) 情報処理

点字使用学生では、通常の情報処理実習の授業とは異なる内容の授業を受けていた学生が 27 名中 17 名いました（残りの 10 名が情報処理の授業を履修したかどうかは確認できていません）。17 名のうち 8 名が、通常のクラスの中でティーチング・アシスタントから個別に支援を受けていました。また 6 名は、視覚障害学生用に別時間を設定してもらって受講していました。2 名は通常のクラスで授業を受け、課題の内容や期限の変更などの配慮を受けていました。1 名は授業には参加せず、課題を提出することで単位認定を受けていました。

墨字使用学生で通常の情報処理実習の授業とは異なる内容の授業を受けていた学生は 18 名中 4 名でした（残りの 14 名が情報処理の授業を履修したかどうかは確認できていません）。

そのうち 3 名が、通常のクラスの中でティーチング・アシスタントから個別に支援を受けていました。1 名は別時間を設定してもらって受講していました。

特に点字使用学生の場合、画面が見えずマウス操作もできないため、画面読み上げソフトや点字ディスプレイの利用、キーボードのみを用いた操作をしなければなりません。したがって、通常の指導方法ではスキルアップが望めないため、視覚障害者のパソコン利用に関して専門知識をもった指導者が必要となります。ティーチング・アシスタントだけの配置では画面の情報を伝える程度に終わり、実際の操作方法、画面の構造や概念を系統的に指導することは困難だと考えられます。視覚障害学生が高度な情報処理技術や支援機器の使い方を身につけることは学習効率の向上や就職の機会拡大につながるため、いっそうの充実が望まれます。

(イ) 体育実技

点字使用学生では、通常の体育実技の授業とは異なる内容の授業を受けていた学生が 5 名いました。そのうち 3 名が通常のクラスの中でティーチング・アシスタントから個別に支援を受けていました。1 名は通常クラスの中で球技の時間のみ他の内容に変更してもらっていました。1 名はウェイトトレーニングなど与えられた個別の課題を行っていました。

墨字使用学生では、通常の体育実技の授業とは異なる内容の授業を受けていた学生が 2 名いました。2 名とも障害学生用に開講されているクラスを受講していました。

体育で扱われる種目の中に、障害者スポーツやトレーニングなどが準備されている大学が増えており、それらを履修することで、他の学生と異なる内容に変更する必要がなかったという学生もいました。視覚障害があっても取り組める内容がすでに準備されているということはよいことですが、話を聞いていると、実際には十分に体を動かせる内容にはなっていないことが多く、視覚障害学生の体育実技への参加についてはさらに検討する必要があります。

(ウ) その他

学内の実験や実習では、司書実習において文献検索を座学の授業に変更したり（点字 1 名）、ティーチング・アシスタントが配置され実験の補助を行ったり（点字 1 名）、介護実習の一部免除（墨字 1 名）などが行われていました。

学外の実習やフィールドワークでは、教育実習において教科書データの提供（点字 1 名）、ティーチング・アシスタントの同行（点字 1 名）、実習の一部免除（墨字 1 名）、実習先の優先的な斡旋（墨字 1 名）などが行われていました。

語学の授業では、e-ラーニングが導入されていたが画面読み上げソフトで対応できず、ライティングの授業に変更してもらったり（点字 2 名）、韓国語の小テストの時間を授業時間とは別に設定してもらったり（点字 1 名）、イラストを見ながらコミュニケーションをとる授業ではイラストの説明を事前にデータで送信してもらう（墨字 1 名）などが行われていました。

他には、古文書学の授業を履修している点字使用学生は、補習を受けたり、パソコンを

持参して漢字の確認をしてもらったり、試験や授業内提出物で、ワードに搭載されていない漢字を使用しなければならない時は、ひらがなで書く許可をもらうという配慮を受けていました。

(10) 履修をあきらめた授業

視覚障害に関連して履修をあきらめた授業があるかについて質問しました。

(ア) 情報処理

情報処理の実習をあきらめた例として、次のようなものがありました。

- ・データ解析の授業があったが、音声対応でなかったのであきらめた。

(イ) 体育実技

体育実技の授業をあきらめた例として、次のようなものがありました。

- ・球技種目の授業をあきらめ、座学の体育の授業で補完した。

(ウ) その他

その他の授業をあきらめた例として、次のようなものがありました。

- ・図書館実習
- ・学外の授業見学を履修したが、始まってみると見学先との調整がうまくいかなかった。
- ・パソコンを使った英語の授業は、音声読み上げソフトに対応していなかったのであきらめた。
- ・ドイツ語の授業は、文字データをパソコンなどで読むのが難しかった。
- ・「観光と社会」という授業は、映像資料や地図が多かったのであきらめた。
- ・「考古学概説」という授業は、図がメインで実物がほとんどないため理解が難しいだろうと思ってあきらめた。
- ・メディアの授業で、パワーポイントが多用され、授業内容を把握できなかった。
- ・担当教員が忙しそうだと、プリントがもらえなさそうなのであきらめることがある。
- ・中国文学の授業で、先にプリントをもらえなかったり、テスト時間の配慮をしてもらえなかったのであきらめた。
- ・医療系の授業で、理学療法など、細かい図を見る必要があるものはあきらめた。
- ・色彩や絵画に関する授業は、視覚的要素が多かったのであきらめた。
- ・教室移動がランダムに起きるオムニバス形式の授業で、移動が大変だったためあきらめた。

映像や図による資料が多かったり、視覚的要素の多い授業は、理解しづらく履修をあきらめることが多いようです。古文書を読むことや顕微鏡での観察などが授業の目的である場合には、視覚障害があるために実質的な学習ができない場合もあります。しかし、学習の目標に対応して指導方法や内容の取り扱いを柔軟に配慮すれば理解が可能になることも多くあります。したがって、指導方法や授業内容の検討にあたっては、視覚障害学生や視覚障害教育の専門機関（学生の出身盲学校など）と十分連携する必要があります。

また、パワーポイントが多用されたり、資料が手に入らなかったりすることで、授業内容を理解できず、履修をあきらめている学生もいることがわかりました。視覚障害学生が効率よく学習できる資料の提供を求めていく必要があります。

(11) 履修を断られた授業

視覚障害に関連して履修を断られたことがあるかについて質問しました。

(ア) 情報処理

情報処理の実習で履修を断られた例として、次のようなものがありました。

- ・統計関係の授業

(イ) 体育実技

体育実技の授業で履修を断られた例として、次のようなものがありました。

- ・初めて担当する教員だったため、見送るように言われた。
- ・トレーニング以外の内容は、視覚的内容が含まれるためあきらめるように促された。
- ・民族舞踊の授業は、動きが細かいので難しいと言われた。
- ・実技は必修ではないので履修をあきらめるように言われた。
- ・体が弱いことを理由に断られていた（ようやく認められるようになった）。

(ウ) その他

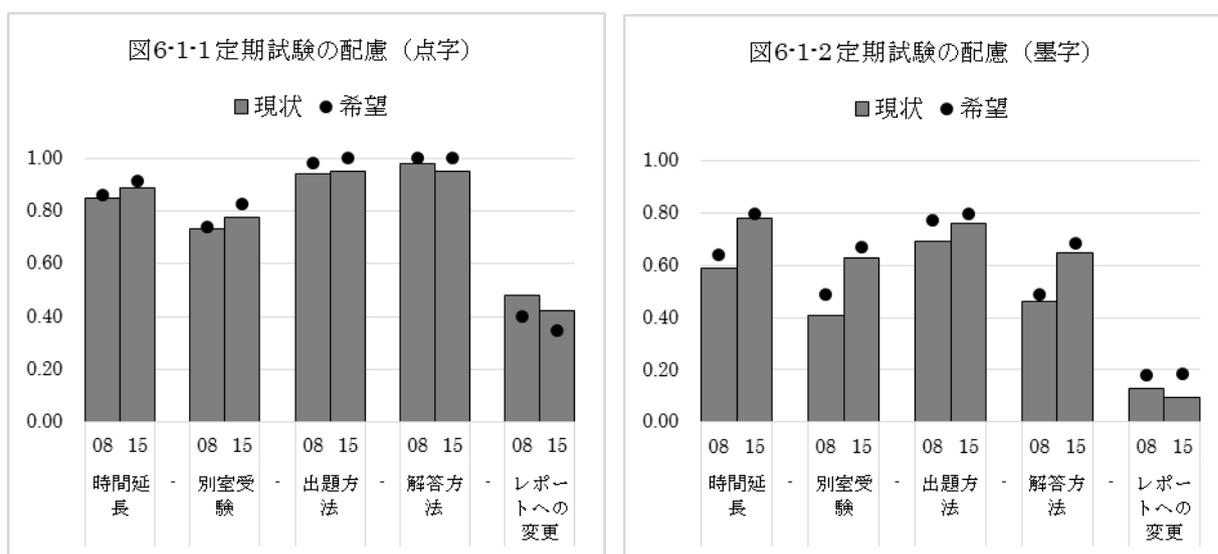
その他の授業で履修を断られた例として、次のようなものがありました。

- ・手話を扱った授業
- ・絵画の実習は、見えないとできないと言われた。
- ・中国語の授業で、点字がなかったり、前例がないという理由で断られた。
- ・共通の理数系科目で、教授が視覚障害者を教えた経験がないという理由で断られた。
- ・英語のクラス分けで、配置されたクラスの先生に断られ、他のクラスで履修した。
- ・必修ではないので第二外国語は履修をあきらめるように言われた。
- ・他キャンパスで開講される授業は、サポートの保証が出来ないのであきらめるように促された。
- ・指定された教室に音声ソフト搭載のパソコンが設置されていないので、あきらめるように促された。
- ・非常勤教員が担当の授業は、すべて履修を断られる。

絵画の実習や手話の授業では、視覚障害があることで授業の目的を達成できないということも考えられます。しかし、過去に視覚障害学生を教えた経験がない教員や、非常勤教員が担当される授業では、大学で視覚障害学生への配慮内容を周知していただき、対応してもらえるよう、理解を促してもらいたいものです。第二外国語についても、英語以外の言語でも点字の辞書が作られており、点字使用学生も様々な言語を学習してきています。大学にとって初めてのケースであっても、すぐに履修を断らず、視覚障害教育の専門機関（学生の出身盲学校など）と十分に連携をとってもらいたいものです。

6. 定期試験

「時間延長」、「別室受験」、「出題方法の配慮（点字・拡大文字等での出題）」、「解答方法の配慮（点字解答・解答用紙の変更・パソコン解答など）」、「レポートへの変更」について質問しました。それぞれの項目における現在の状況について、「まったくしてもらっていない」を0点、「たまにもらっている」を1点、「時々もらっている」を2点、「いつももらっている」を3点、希望について、「まったく必要ない」を0点、「たまに配慮してほしい」を1点、「時々配慮してほしい」を2点、「いつも配慮してほしい」を3点と得点化し、項目ごとの合計点を点字使用学生・墨字使用学生それぞれの対象人数×満点（3点）で割った値を求めました。その結果を図6-1-1（点字）、図6-1-2（墨字）に示します。



(1) 時間延長

点字使用学生では、2008年度は現状0.85、希望0.86（「まったく必要ない」は7.1%）で、2015年度は現状0.89、希望0.91（「まったく必要ない」は0.0%）でした。2008年度と大きな変化はなく、現状・希望ともかなり高い値を示しています。表6-1-1に、点字使用学生の時間延長の倍率について、現状と希望を示します。現状の平均は、2008年度が1.47倍、2015年度が1.51倍でした。また、希望の平均は、2008年度が1.51倍、2015年度が1.57倍でした。入学試験においても通常1.5倍の時間延長が認められており、定期試験においても1.5倍の時間延長が定着してきていることがわかりました。

墨字使用学生では、2008年度は現状0.59、希望0.64（「まったく必要ない」は15.4%）で、2015年度は現状0.78、希望0.80（「まったく必要ない」は0.0%）でした。2008年度と比べ、現状・希望ともに割合が高くなっています。「まったく必要ない」と回答した学生はおらず、一般の学生と同じ時間内で解答を作成することは負担が大きいことがわかりました。表6-1-2に、墨字使用学生の時間延長の倍率について、現状と希望を示します。現状の平均は、2008年度が1.3倍、2015年度が1.37倍でした。また、希望の平均は、2008年度が1.31倍、2015年度が1.40倍でした。墨字使用学生は入学試験で1.3倍の時間延長が認められている

ことが多いですが、見え方によっては 1.3 倍でも十分ではないと感じている学生もいることがわかりました。

表 6-1-1 定期試験における時間延長の倍率と人数(点字)

延長時間 (倍)	1	1.5	1.5~2	2	3	その他	無回答	合計	平均
現状 (人)	1	22	1	0	0	2	1	27	1.51 倍 (1.47 倍)
希望 (人)	0	24	2	0	1	0	0	27	1.57 倍 (1.51 倍)

表 6-1-2 定期試験における時間延長の倍率と人数(墨字)

延長時間 (倍)	1	1.3	1.3~1.5	1.5	その他	無回答	合計	平均
現状 (人)	0	9	2	5	1	1	18	1.37 倍 (1.3 倍)
希望 (人)	0	8	2	6	2	0	18	1.40 倍 (1.31 倍)

(2) 別室受験

点字使用学生では、2008 年度は現状 0.73、希望 0.74 (「まったく必要ない」14.3%) で、2015 年度は現状 0.78、希望 0.83 (「まったく必要ない」3.7%) でした。

墨字使用学生では、2008 年度は現状 0.41、希望 0.49 (「まったく必要ない」30.8%) で、2015 年度は現状 0.63、希望 0.67 (「まったく必要ない」16.7%) でした。

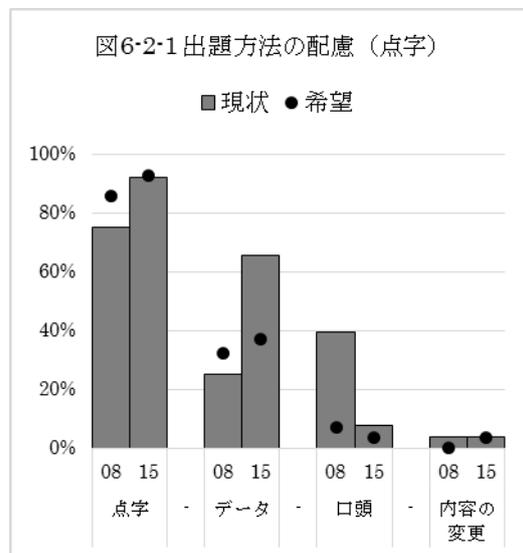
2008 年度に比べ、点字使用学生でも墨字使用学生でも、別室を希望する学生の割合が高くなりました。特に、墨字使用学生の割合が 2008 年度よりも高くなっています。現状の割合も、点字使用学生・墨字使用学生ともに高くなっていますが、大学によっては教室が足りないため、時間延長は認められるが、一般の学生と同じ教室で受験している場合もあるようです。試験中に、周囲の学生が入退室をすることとなり、試験に集中できないことも考えられます。教室や試験監督の手配等の問題もあるかと思いますが、できるだけ用意してもらえるよう理解を求めていく必要があります。また、点字使用学生の場合には、点字盤や点字タイプライタを用いて解答する際には音が出ることもあり、別室の確保が望まれます。

(3) 試験方法の配慮

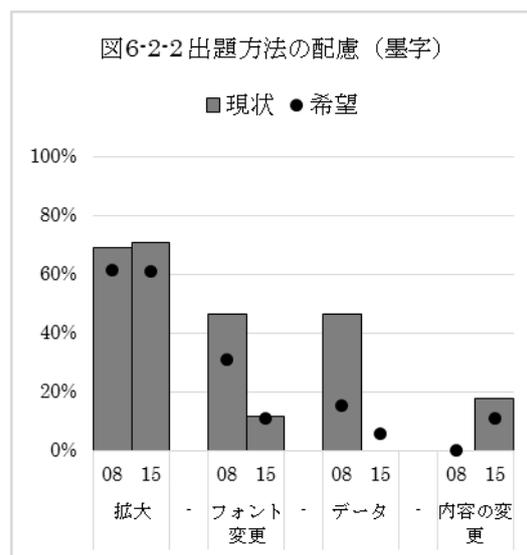
(ア) 出題方法

点字使用学生について「出題方法の配慮」に関する回答をみると、2008 年度は現状 0.94、希望 0.98 (「まったく必要ない」0.0%) で、2015 年度は現状 0.95、希望 1.00 (「まったく必要ない」0.0%) でした。点字使用学生は通常の問題用紙を読んで解答できないため、必ず配慮が必要であり、結果にもそのことが示されています。

点字使用学生への配慮について、具体的内容をすべて答えてもらった結果を図 6-2-1 に示します。出題方法の現状を高い順にみると、2008 年度は「点字」(75.0%)、「口頭」(39.3%)、「データ」(25.0%)で、2015 年度は「点字」(92.3%)、「データ」(65.4%)、「口頭」(7.7%)でした。また、希望を高い順にみると、2008 年度は「点字」(85.7%)、「データ」(32.1%)、「口頭」(7.1%)で、2015 年度は「点字」(92.6%)、「データ」(37.0%)、「口頭」(3.7%)でした。2008 年度に比べ、現状のデータの割合が増加していますが、データでの出題を希望している学生の割合はほとんど変化していません。データでの出題は、出題する側にとっては点訳のための時間や費用が軽減でき、負担が小さくなりますが、点字使用学生にとっては問題の全体を把握するのに時間がかかることや、下線や空欄などの記号類を見つけにくいこと、レイアウトが把握しにくいことなどから、負担が大きいと考えられます。



墨字使用学生について「出題方法の配慮」に関する回答をみると、2008 年度は現状 0.69、希望 0.77 (「まったく必要ない」7.7%)で、2015 年度は現状 0.76、希望 0.80 (「まったく必要ない」16.7%)でした。墨字使用学生についても文字サイズやフォントに配慮した問題用紙が必要なため、出題方法への配慮を希望していると考えられます。



墨字使用学生への配慮について、具体的内容をすべて答えてもらった結果を図 6-2-2 に示します。出題方法の現状を高い順にみると、2008 年度は「問題用紙・文字の拡大」(69.2%)、「フォントの変更」(46.2%)、「データ」(46.2%)で、2015 年度は「問題用紙・文字の拡大」(70.6%)、「内容の変更」(17.6%)、「フォントの変更」(11.8%)でした。また、希望を高い順にみると、2008 年度は「問題用紙・文字の拡大」(61.5%)、「フォントの変更」(30.8%)、「データ」(15.4%)で、2015 年度は「問題用紙・文字の拡大」(61.1%)、「フォントの変更」(11.1%)、「データ」(5.6%)でした。2008 年度に比べ、現状の「フォントの変更」や「データ」の割合が低くなり、ほとんどの大学では、拡大した問題用紙で出題されているようです。多くの学生は拡大された問題用紙で対応できているようですが、フォントの変更やデータでの出題を希望している学生もいるので、それぞれの学生のニーズ

に対応してもらえを期待します。

(イ) 解答方法の配慮

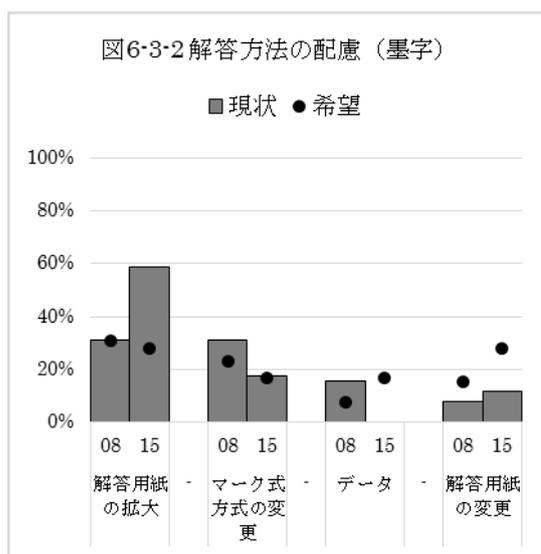
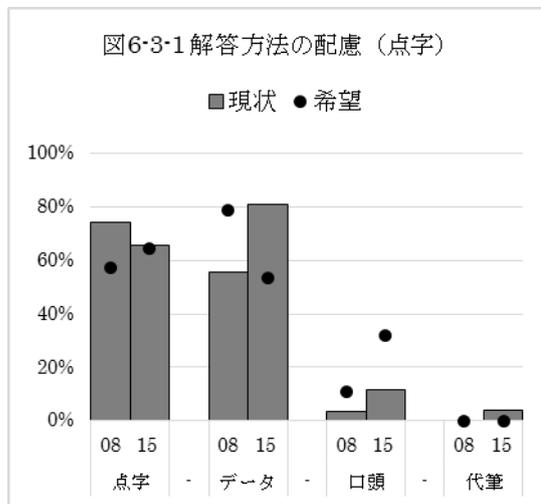
点字使用学生について「解答方法の配慮」に関する回答をみると、2008年度は現状 0.98、希望 1.00（「まったく必要ない」0.0%）で、2015年度は現状 0.95、希望 1.00（「まったく必要ない」0.0%）でした。点字使用学生は通常の解答用紙に自筆で解答することができないため、必ず配慮が必要であり、結果にもそのことが示されています。

点字使用学生への配慮について、具体的内容をすべて答えてもらった結果を図6-3-1に示します。解答方法の現状を高い順にみると、2008年度は「点字」（64.3%）、「データ」（53.6%）、「口頭」（32.1%）で、2015年度は「データ」（80.8%）、「点字」（65.4%）、「口頭」（11.5%）でした。また、希望を高い順にみると、2008年度は「データ」（78.6%）、「点字」（57.1%）、「口頭」（10.7%）で、2015年度は「点字」（74.1%）、「データ」（55.6%）、「口頭」（3.7%）でした。2008年度に比べ、現状ではデータの割合が増加していますが、データでの解答を希望している学生の割合は減少し、点字での解答を希望している学生の割合が増加していることがわかりました。成績に影響する試験の場合には慎重に読み書きする必要があるため、何度も読み返すことができ、必要な部分をいつでも確認することができる点字を希望する学生の割合が増えているのではないかと考えられます。

また、データで解答する場合には、漢字変換のミスや、漢字への不慣れによって使用する文字を間違えることもあります。その点を考慮して採点上の配慮をすることが必要となります。

墨字使用学生について「解答方法の配慮」に関する回答をみると、2008年度は現状 0.46、希望 0.49（「まったく必要ない」46.2%）で、2015年度は現状 0.65、希望 0.69（「まったく必要ない」22.2%）でした。2008年度に比べ、現状・希望ともに割合が増加していることがわかりました。

墨字使用学生への配慮について、具体的内容をすべて答えてもらった結果を図6-3-2に示します。解答方法の現状を高い順にみると、2008年度は「解答用紙の拡大」（30.8%）、「マ



ークシート方式の変更」(30.8%)、「データ」(15.4%)で、2015年度は「解答用紙の拡大」(58.8%)、「マークシート方式の変更」(17.6%)、「解答用紙の変更」(11.8%)でした。また、希望を高い順にみると、2008年度は「解答用紙の拡大」(30.8%)、「マークシート方式の変更」(23.1%)、「解答用紙の変更」(15.4%)、「データ」(7.7%)で、2015年度は「解答用紙の拡大」「解答用紙の変更」(各27.8%)、「マークシート方式の変更」「データ」(各16.7%)でした。2008年度に比べ、現状では「解答用紙の拡大」の割合が高くなっており、多くの大学で解答用紙の拡大は行われていることがわかりました。しかし、墨字使用学生が希望している配慮の内容をみると、解答用紙の拡大だけではなく、様々なニーズがあることがわかります。マークシートは狭い範囲をきれいに塗りつぶす必要があり、負担が大きいです。そのため、学生がマークしたい部分をチェックし、後で担当者が塗りつぶす方法、学生本人が別紙に問題番号と選択肢の記号を文字で記入する方法などの配慮が必要です。また、解答欄を探したり指定された欄に書き込むことが困難な場合は、自由に記述できる罫紙などの解答用紙に変更するなどの配慮になります。視力や視野等の視機能が個人によってさまざまであるため、一律に適用できる方法はなく、各学生の見え方に合わせた配慮が求められていることがわかりました。

(4) レポートへの変更

点字使用学生では、2008年度は現状0.48、希望0.40(「まったく必要ない」は21.4%)で、2015年度は現状0.42、希望0.35(「まったく必要ない」は37.0%)でした。墨字使用学生では、2008年度は現状0.13、希望0.18(「まったく必要ない」は61.5%)で、2015年度は現状0.09、希望0.19(「まったく必要ない」は61.1%)でした。

2008年度と大きな変化はなく、現状では、点字使用学生に対する試験のレポートへの変更がある程度行われています。しかし、レポートへの変更を希望している学生の割合はあまり高くありません。これは、複数科目においてレポートへの変更が行われると、試験を受けるよりも負担が大きくなるため、あまり希望していないと考えられます。墨字使用学生は現状・希望ともに値が低く、出題方法や解答方法の配慮のみで対応できていると考えられます。

7. 図書館・参考資料室

図書館・参考資料室について、利用頻度、人的支援の利用状況、利用している支援の内容(現状)と希望について質問しました。

(1) 利用頻度

図書館・参考資料室を実際に利用している頻度を、図7-1-1(点字)と図7-1-2(墨字)に

示します。

点字使用学生では、「週に1回以上」が2008年度は28.6%、2015年度は33.3%、「月数回」が2008年度は17.9%、2015年度は14.8%、「学期に数回」が2008年度は42.8%、2015年度は18.5%、「ほとんど利用しない」が2008年度は10.7%、2015年度は33.3%でした。「学期に数回」と「ほとんど利用しない」を合わせた割合が半分を超えており、2008年度の調査と同様に、図書館の利用頻度がきわめて低いことがわかりました。大学の学習において図書館の利用は不可欠であるにもかかわらず利用頻度が少ない理由としては、利用できる資料が整っていないこと、十分な人的支援が受けられていないことなどが考えられます。また、学内の図書館を利用せずに、点字図書館やボランティアセンタなどで点字・録音図書を借りたり、対面朗読を利用したりするなど、外部機関を利用していることも考えられます。いずれにしても図書館における支援のいっそうの充実が望まれます。

墨字使用学生では、「週に1回以上」が2008年度は76.9%、2015年度は61.1%、「月数回」が2008年度は15.4%、2015年度は16.7%、「学期に数回」が2008年度は0%、2015年度は11.1%、「ほとんど利用しない」が2008年度は7.7%、2015年度は11.1%でした。点字使用学生と比べると、週に1回以上利用している人の割合が高いですが、2008年度と比べると、全体的

図7-1 図書館の利用頻度(点字)

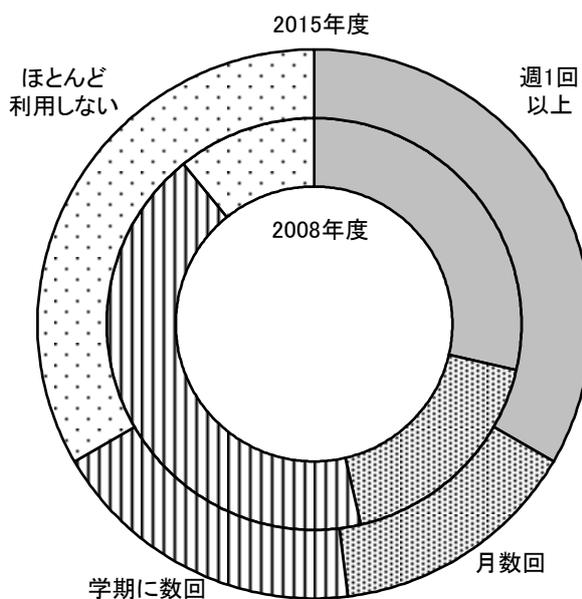
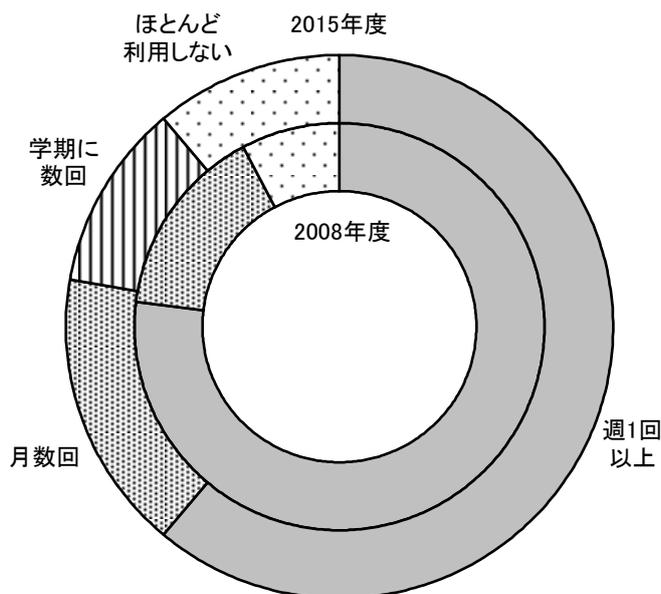


図7-2 図書館の利用頻度(墨字)



に利用する頻度が低くなっていることがわかりました。墨字使用学生であっても、本を検索することに困難を感じている学生が多く、さらに検索のための支援を依頼できることを知らない学生も多くいて、図書館を利用しづらく感じているようでした。

(2) 人的支援の利用状況

人的支援の利用状況を、図 7-2-1 (点字) と図 7-2-2 (墨字) に示します。

点字使用学生では、「支援を受けている」が 2008 年は 78.6%、2015 年度は 66.7%、「支援を受けていない」が 2008 年は 21.4%、2015 年度は 33.3% でした。図書館をほとんど利用しない学生が増えていることから、必要な部分だけを、友人などにコピーしてもらおうという利用の仕方をしている学生が増え、大学の支援を受けていない学生が増えたものと考えられます。

墨字使用学生では、「支援を受けている」2008 年は 30.8%、2015 年度は 38.9%、「支援を受けていない」2008 年は 69.2%、2015 年度は 61.1% でした。2008 年度よりも支援を受けている学生の割合が少し増えており、墨字使用学生にも人的支援が必要であることがわかりました。

図7-2-1 図書館における人的支援の利用状況 (点字)

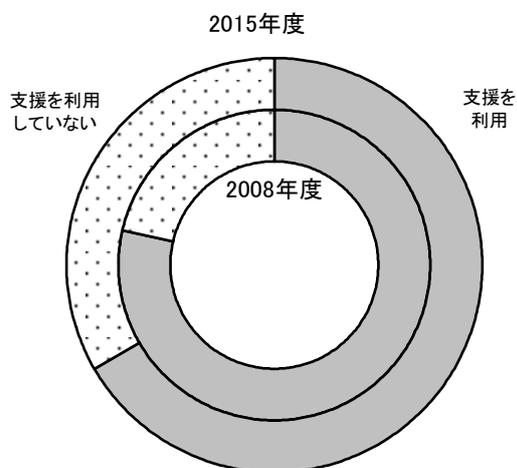
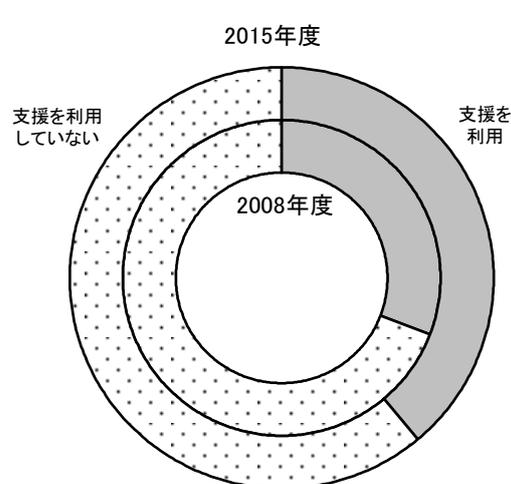
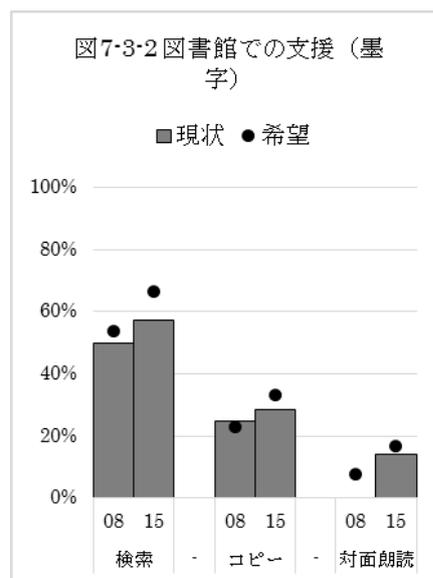
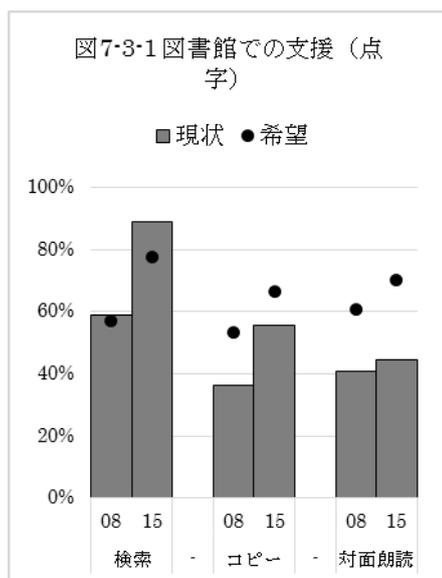


図7-2-2 図書館における人的支援の利用状況 (墨字)



(3) 利用している支援の内容 (現状) と希望

利用している支援の内容 (現状) と希望を、図 7-3-1 (点字) と図 7-3-2 (墨字) に示します。



利用している人的支援の内容は、実際に支援を受けている点字使用学生（2008年度は22名、2015年度は18名）に対して、「検索の補助」は2008年度が59.1%、2015年度が88.9%、「コピーの補助」は2008年度が36.4%、2015年度が55.6%、「対面朗読」は2008年度が40.9%、2015年度が44.4%でした。また、希望する支援内容について、全員（2008年度は28名、2015年度は27名）に質問したところ、「検索の補助」は2008年度が57.1%、2015年度が77.8%、「対面朗読」は2008年度が60.7%、2015年度が70.4%、「コピーの補助」は2008年度が60.7%、2015年度が70.4%でした。したがって、点字使用学生が図書館を利用する場合、これらの3項目の支援の充実が望まれます。さらに、図書館をあまり利用していない点字使用学生も、これらの支援があれば利用頻度が上がるのではないかと考えられます。

実際に支援を受けている墨字使用学生（2008年度は4名、2015年度は7名）に対して、「検索の補助」は2008年度が50.0%、2015年度が57.1%、「コピーの補助」は2008年度が25.0%、2015年度が28.6%、「対面朗読」は2008年度が0.0%、2015年度が14.3%でした。また、希望する支援内容について、全員（2008年度は13名、2015年度は18名）に質問したところ、「検索の補助」は2008年度が53.8%、2015年度が66.7%、「コピーの補助」は2008年度が23.1%、2015年度が33.3%、「対面朗読」は2008年度が7.7%、2015年度が16.7%でした。「検索の補助」を約7割の学生が希望していたことから、普段墨字を使用していたとしても、たくさんある本の中から目的の本を探し出したり、検索端末を利用したりすることについては、負担感があることがわかりました。さらに、このような支援を希望してよいということを知らない学生も多く、困りながらも自分で何とかしようとしている現状であることがわかりました。墨字使用学生自身が、図書館での困難さを大学にきちんと説明し、必要な支援を申し出ていけることも必要だと考えられます。

8. 学習室・専用ロッカー

大学における視覚障害学生用学習室・専用ロッカーについて、現在の有無、必要な程度を質問しました。

現在の有無については「ない」を0点、「ある」を1点、必要な程度は「必要ない」を0点、「できればほしい」を1点、「必ずほしい」を2点と得点化し、項目ごとの合計点を点字使用学生・墨字使用学生それぞれの対象人数×満点で割った値を求めました。その結果を図8-1（点字）と図8-2（墨字）に示します。

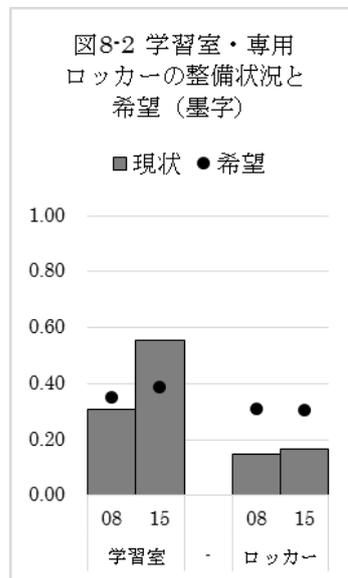
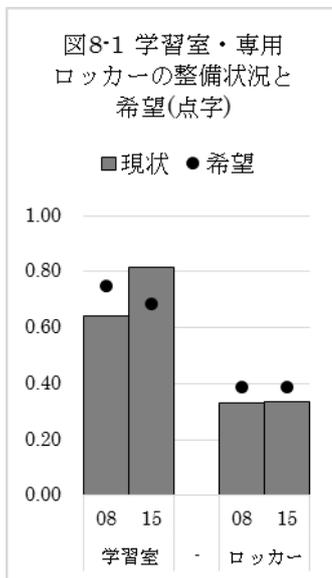
点字使用学生では、「学習室（専用学習室・学習スペース・対面朗読室などを含む）」については、2008年度は現状0.64、希望0.75で、2015

年度は現状0.81、希望0.69でした。「専用ロッカー」については、2008年度は現状0.46、希望0.41で、2015年度は現状0.33、希望0.39でした。

墨字使用学生では、「学習室」については、2008年度は現状0.31、希望0.35で、2015年度は現状0.56、希望0.39でした。「専用ロッカー」については、2008年度は現状0.15、希望0.31で、2015年度は現状0.17、希望0.31でした。

点字使用学生では2008年度と比べ、学習室や学習スペースなどが確保されてきていることがわかりました。かさばる点字の教科書や資料を保管したり、対面朗読を受けたり、点字プリンタなど音の出る支援機器を使用したりするためには、このような学習室が不可欠で、さらに広がっていくことを期待します。しかし通常、高校時代までは専用学習室を利用する経験はほとんどないため、学習室の確保を希望してよいことすら想像できていない学生がおり、入学当初から効果的に活用できるよう指導する必要があると考えられます。

墨字使用学生では、点字使用学生と比べ希望の値はそれほど高くありませんでした。これは、図書館や空き教室でも携帯型拡大読書器や視覚補助具を活用して学習できるためと考えられます。しかし、墨字使用学生でもスペースを必要とする卓上型拡大読書器を使用する場合や、画面読み上げソフトを用いてパソコンを利用する場合等には専用学習室が必要であると考えられます。



9. 支援機器・視覚補助具

15 項目の支援機器や視覚補助具について、現在活用している程度、大学の予算による準備の有無、大学の予算による準備を希望する程度について質問しました。

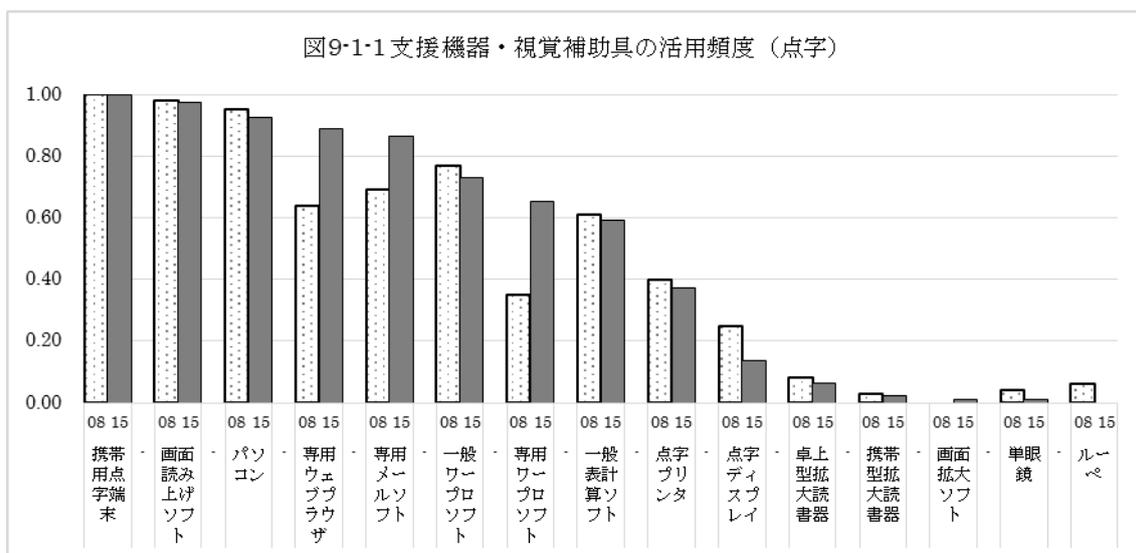
それぞれの項目で、現在活用している程度については、「まったく使っていない」を0点、「たまに使っている」を1点、「時々使っている」を2点、「いつも使っている」を3点、大学の予算による準備の有無については、大学の予算による準備が「ない」を0点、「ある」を1点、大学の予算による準備を希望する程度については、「いらない」を0点、「できればほしい」を1点、「必ずほしい」を2点と得点化し、項目ごとの合計点を点字使用学生・墨字使用学生それぞれの対象人数×満点で割った値を求めました。

なお、図中では、視覚障害者用のメールソフト、ワープロソフト、インターネットブラウザについては、それぞれ「専用メールソフト」、「専用ワープロソフト」、「専用ウェブブラウザ」と記載しています。

(1) 支援機器・視覚補助具活用の程度

支援機器・視覚補助具の活用の程度を、図9-1-1（点字）と図9-1-2（墨字）に示します。

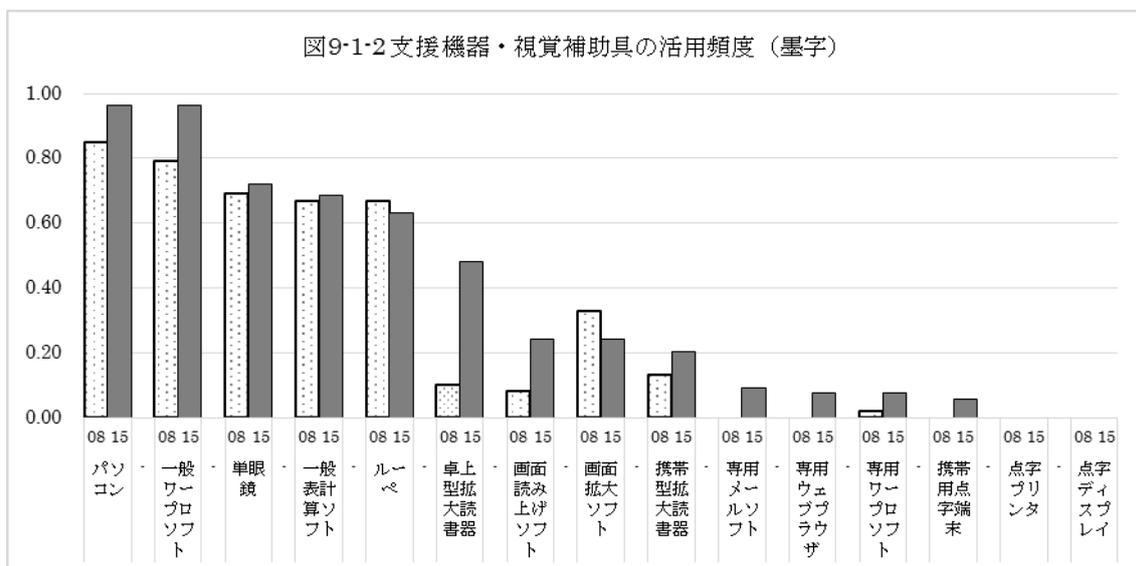
点字使用学生について、支援機器・視覚補助具の活用の程度が高い順にみると、2008年度は、携帯用点字端末(1.00)、画面読み上げソフト(0.98)、パソコン(0.95)、一般ワープロソフト(0.77)、専用メールソフト(0.69)、専用ウェブブラウザ(0.64)、一般表計算ソフト(0.61)、点字プリンタ(0.40)、専用ワープロソフト(0.35)、点字ディスプレイ(0.25)という結果でした。2015年度は、携帯用点字端末(1.00)、画面読み上げソフト(0.98)、パソコン(0.93)、専用ウェブブラウザ(0.89)、専用メールソフト(0.86)、一般ワープロソフト(0.73)、専用ワープロソフト(0.65)、一般表計算ソフト(0.59)、点字プリンタ(0.37)、点字ディスプレイ(0.14)という結果でした。



点字使用学生では、携帯用点字端末・画面読み上げソフト・パソコンは常に活用されており、点字使用学生が大学で学習する際になくってはならない機器であることがわかりました。また、2008年度に比べ、視覚障害者用のインターネットブラウザ・メールソフト・ワープロソフトの活用の高くなっていることがわかりました。視覚障害者用の専用ソフトの機能が上がり、使いやすくなっていることから、これらを活用する学生の割合が増加しているのではないかと考えられます。

墨字使用学生について、支援機器・視覚補助具の活用の高順にみると、2008年度は、パソコン(0.85)、一般ワープロソフト(0.79)、単眼鏡(0.69)、ルーペ・一般表計算ソフト(各0.67)、画面拡大ソフト(0.33)、携帯型拡大読書器(0.13)、卓上型拡大読書器(0.10)、画面読み上げソフト(0.08)という結果でした。2015年度は、パソコン・一般ワープロソフト(各0.96)、単眼鏡(0.72)、一般表計算ソフト(0.69)、ルーペ(0.63)、卓上型拡大読書器(0.48)、画面読み上げソフト・画面拡大ソフト(各0.24)、携帯型拡大読書器(0.20)、専用のメールソフト(0.09)、専用ウェブブラウザ・専用ワープロソフト(各0.07)という結果でした。

墨字使用学生では、パソコンと一般のワープロソフトの活用の高くなってきたことがわかりました。また、2008年度に比べ、卓上型拡大読書器の活用の高くなり、画面読み上げソフトや視覚障害者用ソフトの活用の高くなっていることがわかりました。墨字を使用していても、支援機器や視覚補助具がないと十分に学習できない状況であることがわかりました。なお、最近ではタブレット端末の活用も増えているようです。



(2) 支援機器・視覚補助具に関する大学での準備の程度（現状）と必要度

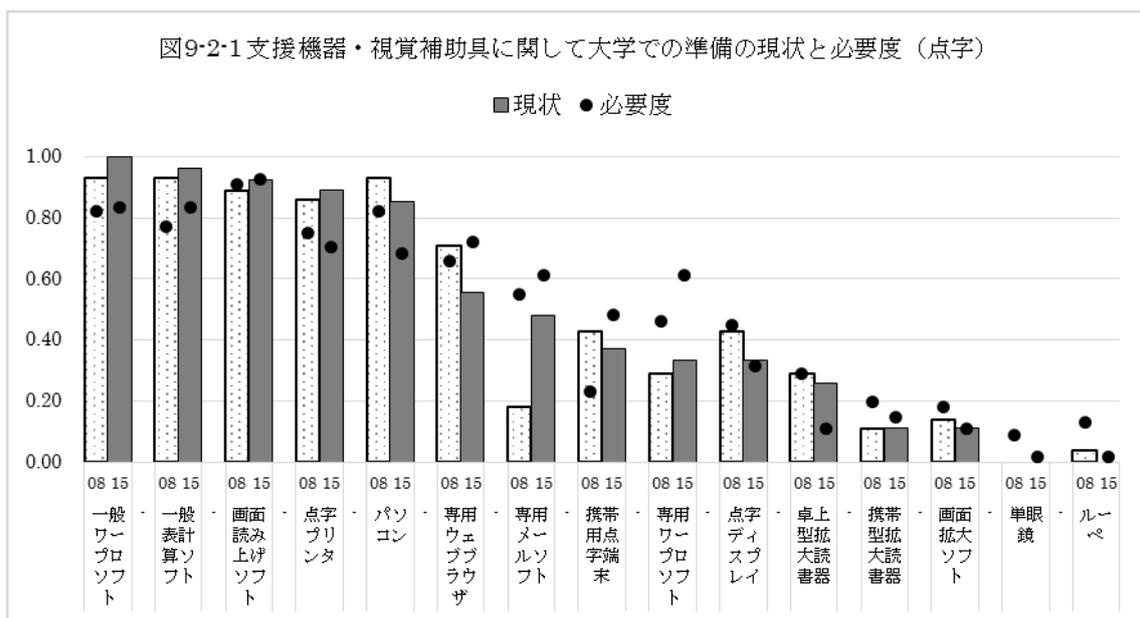
支援機器・視覚補助具に関する大学での準備の現状と必要度を、図9-2-1（点字）と図9-2-2（墨字）に示します。

点字使用学生に対して、大学で準備されている程度が高い順にみると、2008年度は、パソコン(0.93)、一般ワープロソフト・一般表計算ソフト(各0.93)、画面読み上げソフト(0.89)、点字プリンタ(0.86)、専用ウェブブラウザ(0.71)、携帯用点字端末・点字ディスプレイ・専用メールソフト(各0.43)、専用ワープロソフト(0.29)という結果でした。2015年度は、一般のワープロソフト(1.00)、一般の表計算ソフト(0.96)、画面読み上げソフト(0.93)、点字プリンタ(0.89)、パソコン(0.85)、専用のウェブブラウザ(0.56)、専用のメールソフト(0.48)、携帯用点字端末(0.37)、点字ディスプレイ・専用のワープロソフト(各0.33)という結果でした。

2008年度と同様に、ハードウェアとしては点字プリンタやパソコンが、ソフトウェアとしては一般のワープロソフトや表計算ソフト、画面読み上げソフトがかなり準備されていました。一方で、2008年度に比べ、視覚障害者用のインターネットブラウザの準備の程度が低くなり、他の視覚障害者用のソフトの準備の程度もあまり高くないことがわかりました。点字使用学生の全員が活用している携帯用点字端末は、2008年度と大きな変化はなく、約4割の大学でしか準備されていないことがわかりました。

一方、大学の予算による準備を希望する程度が高い順にみると、2008年度は、画面読み上げソフト(0.91)、パソコン(0.82)、一般ワープロソフト(0.82)、一般表計算ソフト(0.77)、点字プリンタ(0.75)、専用ウェブブラウザ(0.66)、専用メールソフト(0.55)、専用ワープロソフト(0.46)、点字ディスプレイ(0.45)、携帯用点字端末(0.23)という結果でした。2015年度は、画面読み上げソフト(0.93)、一般ワープロソフト・一般表計算ソフト(各0.83)、専用ウェブブラウザ(0.72)、点字プリンタ(0.70)、パソコン(0.69)、専用メールソフト・専用ワープロソフト(各0.61)、携帯用点字端末(0.48)点字ディスプレイ(0.31)でした。

2008年度に比べ、パソコンの準備を希望する程度が低くなり、視覚障害者用のソフトの準備を希望する程度が高くなっていることがわかりました。

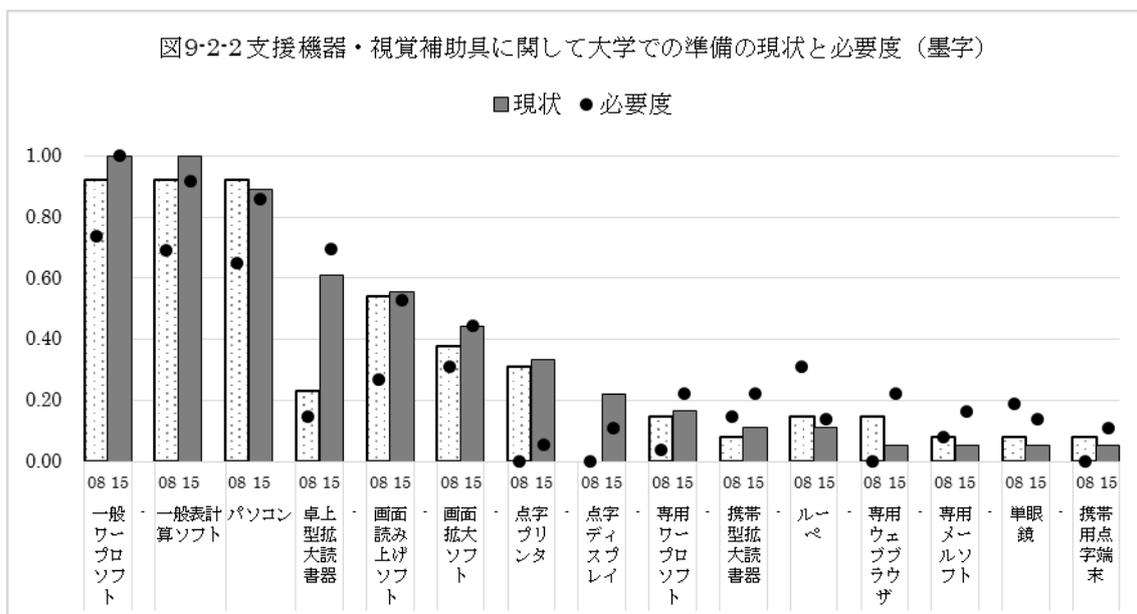


墨字使用学生に対して、大学で準備されている程度が高い順にみると、2008年度は、パソコン・一般ワープロソフト・一般表計算ソフト（各 0.92）、画面読み上げソフト（0.54）、画面拡大ソフト（0.38）、卓上型拡大読書器（0.23）、ルーペ（0.15）、携帯型拡大読書器（0.08）、単眼鏡（0.08）という結果でした。2015年度は、一般ワープロソフト・一般表計算ソフト（各 1.00）、パソコン（0.89）、卓上型拡大読書器（0.61）、画面読み上げソフト（0.56）、画面拡大ソフト（0.44）、ルーペ・携帯型拡大読書器（各 0.11）、単眼鏡（0.06）という結果でした。

パソコンと一般のワープロソフト・表計算ソフトは、ほとんどの大学で準備されていました。画面読み上げソフトや画面拡大ソフトは、2008年度と大きな変化はなく、半数程度で準備されていました。また、2008年度に比べ、卓上型拡大読書器の準備の程度が高くなっていることがわかりました。

一方、大学の予算による準備を希望する程度が高い順にみると、2008年度は、一般ワープロソフト（0.73）、一般表計算ソフト（0.69）、パソコン（0.65）、画面拡大ソフト（0.31）、ルーペ（0.31）、画面読み上げソフト（0.27）、単眼鏡（0.19）、卓上型拡大読書器（0.15）、携帯型拡大読書器（0.15）という結果でした。2015年度は、一般ワープロソフト（1.00）、一般表計算ソフト（0.92）、パソコン（0.86）、卓上型拡大読書器（0.69）、画面読み上げソフト（0.53）、画面拡大ソフト（0.44）、携帯型拡大読書器（0.22）、ルーペ・単眼鏡（各 0.14）という結果でした。

2008年度に比べ、卓上型拡大読書器と画面読み上げソフトの準備を希望する程度がかなり高くなっていることがわかりました。



(3) 支援機器・視覚補助具のまとめ

全体を通して点字使用学生では、画面読み上げソフト、一般ワープロソフト、一般表計

算ソフトは現在よく活用され、大学にも準備されており、大学の予算で準備してほしい希望も高くなっていました。パソコンもかなり活用され、大学で準備されていましたが、希望の程度は下がっていました。高校時代から活用しており、すでに個人で購入している学生が増えているのではないかと考えられます。

ソフトウェアの中で、視覚障害者専用インターネットブラウザや専用ワープロソフト、専用メールソフトの活用の程度は、2008年度よりも高くなっており、大学の予算による準備の希望もありましたが、現状では十分に準備されてはいませんでした。

点字プリンタについてみると、2008年度と大きな変化はなく、きわめて多くの大学で準備されており、大学で準備してほしい希望も高い結果でした。しかし、活用されている程度は低いままでした。あまり活用していない理由として、不便な場所に設置されていることや、学生本人が自由に使えないことなどが出されました。いずれにしても、点字プリンタは高額であり学生本人が購入するのは困難なため、大学で準備する必要があります。

点字ディスプレイについてみると、現在の活用の程度、大学での準備の程度、希望の程度ともに、2008年度よりも低い結果となっています。これは、高額で購入するのが難しいことや、携帯型点字端末の活用の程度が高くなっているためであると考えられます。しかし、携帯型点字端末では一度に確認できる文字数が少なく、点字ディスプレイの活用が望まれます。点字プリンタ同様、高額で個人では購入できないため、大学で準備されることが望まれます。

携帯用点字端末については、現在活用している程度がきわめて高く、大学の予算で準備してほしい希望も2008年度より高くなっていました。大学での学習や生活において常に活用する機器であるため、大学側から個人で購入するように言われるケースが多いようですが、高額であるため購入が難しい状況もあります。今後は大学で準備してもらえることが望まれます。

墨字使用学生についてみると、パソコン、一般ワープロソフト、一般表計算ソフトは、現在よく活用されており、大学で準備されている程度や大学の予算で準備してほしい希望も高い値でした。

また、卓上型拡大読書器や画面読み上げソフト活用の程度が高くなってきており、大学で準備されている程度や大学の予算で準備してほしい希望も、2008年度よりも高くなっていました。卓上型拡大読書器は持ち運びが難しく、個人ですでに準備していてもそれを持って通学することは不可能で、大学での学習用として大学の予算で準備されることが望まれます。

単眼鏡やルーペは、2008年度と同様、現在活用している程度はかなり高いですが、大学で準備されている程度・大学の予算で準備してほしい希望ともに低い結果となりました。これは、基本的には個人で自分に合ったものを準備しているからだと考えられます。

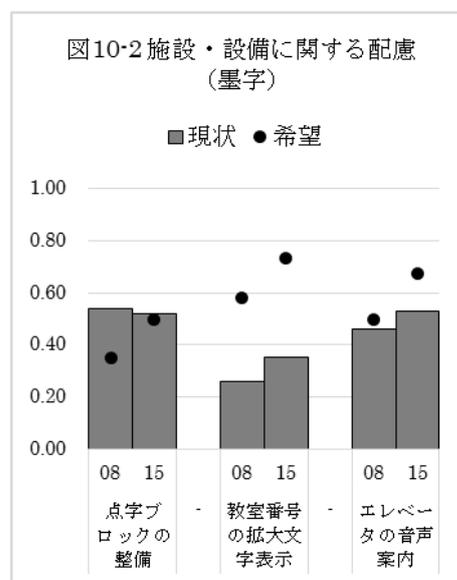
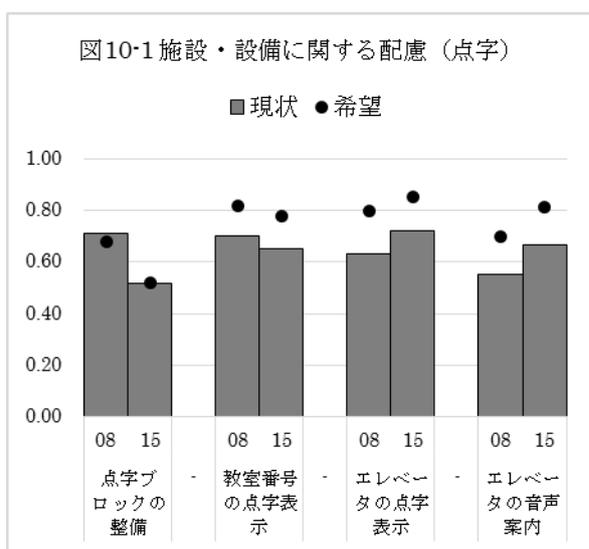
墨字使用学生の見え方はさまざまで、一般のソフトウェアで対応できる学生もいれば、視覚障害者用のソフトウェアを必要としている学生もいることがわかりました。それぞれ

の学生のニーズに合わせて支援機器や視覚補助具が準備されることを期待します。

10. 施設・設備

点字ブロックの整備、教室番号の表示、エレベータの点字表示や音声案内について、大学で整備されている程度、整備を希望する程度を質問しました。点字使用学生では、「点字ブロックの整備」、「教室番号の点字表示」、「エレベータの点字表示」、「エレベータの音声案内」の4項目について、墨字使用学生では、「点字ブロックの整備」、「教室番号の拡大文字表示」、「エレベータの音声案内」の3項目について、分析を行いました。

整備されている程度については、各項目で、「まったく整備されていない」を0点、「あまり整備されていない」を1点、「すこし整備されている」を2点、「かなり整備されている」を3点と得点化し、希望する程度については、「必要ない」を0点、「できれば整備してほしい」を1点、「必ず整備してほしい」を2点と得点化して、項目ごとの合計点を点字使用学生・墨字使用学生それぞれの対象人数×満点で割った値を求めました。その結果を図10-1（点字）、図10-2（墨字）に示します。



(1) 点字ブロックの整備、教室番号の点字表示・拡大文字表示

「点字ブロックの整備」についてみると、点字使用学生では、2008年度は現状0.71、希望0.68（「必要ない」は10.7%）で、2015年度は現状0.52、希望0.52（「必要ない」は14.8%）でした。墨字使用学生では、2008年度は現状0.54、希望0.35（「必要ない」は46.2%）で、2015年度は現状0.52、希望0.50（「必要ない」は33.3%）でした。点字使用学生も墨字使用学生も、希望の割合は半数程度にとどまっています。点字ブロック以外の手がかかりを見つけて移動できているのだと考えられますが、特に危険な場所などには整備されていないと

安心して歩けません。必要に応じて適切な場所に整備されることを期待します。

「教室番号の点字表示」に関する点字使用学生の回答をみると、2008年度は現状 0.70、希望 0.82（「必要ない」は 0.0%）で、2015年度は現状 0.65、希望 0.78（「必要ない」は 7.4%）でした。2008年度に比べ、現状も希望も大きな変化はありませんでした。現状よりも希望の割合が高く、さらに充実することを期待します。

「教室番号の拡大文字表示」に関する墨字使用学生の回答をみると、2008年度は現状 0.26、希望 0.58（「必要ない」は 15.4%）で、2015年度は現状 0.58、希望 0.74（「必要ない」は 16.7%）でした。2008年度に比べ、現状の割合も希望の割合も高くなっています。特に希望をみると、7割以上の学生が希望していることから、よりいっそう整備されることを期待します。

（2）エレベータの点字表示、音声案内

「エレベータの点字表示」に関する点字使用学生の回答をみると、2008年度は現状 0.63、希望 0.80（「必要ない」は 7.1%）で、2015年度は現状 0.72、希望 0.85（「必要ない」は 3.7%）でした。

また、「エレベータの音声案内」についてみると、点字使用学生では、2008年度は現状 0.55、希望 0.70（「必要ない」は 10.7%）で、2015年度は現状 0.67、希望 0.81（「必要ない」は 3.7%）でした。墨字使用学生では、2008年度は現状 0.46、希望 0.50（「必要ない」は 38.5%）で、2015年度は現状 0.53、希望 0.68（「必要ない」は 22.2%）でした。

「エレベータの点字表示や音声案内の整備」は、2008年度に比べ進んできているようですが、点字使用学生でも墨字使用学生でも、現状よりも希望の割合が高く、特に点字使用学生の希望の割合もかなり高いことがわかりました。これは、点字表示がないと降りたい階のボタンが押せなかったり、音声案内がないと止まった階が自分の降りたい階なのかかわからなかったりするためであり、一人ではエレベータを利用しないようにしているという学生もいました。よりいっそう整備されることが望まれます。

11. 視覚に障害のある友人との関わり

視覚に障害のある友人との関わりについて、現在関わりのある程度（現状）および必要と思う程度（必要度）について質問しました。また、視覚に障害のある友人との関わりが役立つ場面について、複数回答可で質問しました。さらに、役立つ場面について選択肢にはない項目を自由に記述してもらいました。

視覚に障害のある友人と関わりのある程度については、各項目で「まったくつきあいはない」を 0 点、「あまりつきあいはない」を 1 点、「すこしつきあいがある」を 2 点、「かなりつきあいがある」を 3 点、必要と思う程度については、「まったく必要ない」を 0 点、「あまり必要ない」を 1 点、「少し必要である」を 2 点、「かなり必要である」を 3 点と得点化

し、項目ごとの合計点を点字使用学生・墨字使用学生それぞれの対象人数×満点（3点）で割った値を求めました。

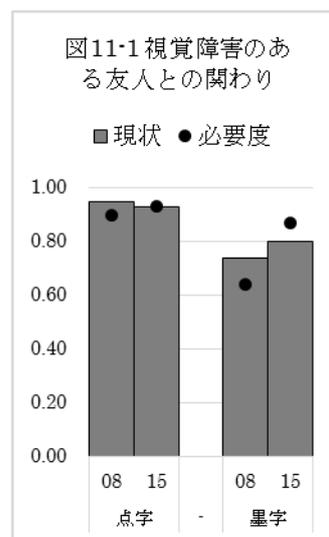
視覚に障害のある友人との関わりが役立つ場面については、「役立つ」場面として選択された場合を1点、選択されなかった場合を0点と得点化し、項目ごとの合計点を点字使用学生・墨字使用学生それぞれの対象人数で割った値を求めました。また、視覚に障害のある友人との関わりについて自由記述で意見を求めた結果をまとめました。

（1）現状と必要度

視覚に障害のある友人との関わりについて、現在関わりのある程度（現状）および必要と思う程度（必要度）を、図 11-1 に示します。

点字使用学生では、2008年度は現状0.95、必要度0.90で、2015年度は現状0.93、必要度0.93（「まったく必要ない」は0%）でした。墨字使用学生では、2008年度は現状0.74、必要度0.64で、2015年度は現状0.80、必要度0.87（「まったく必要ない」は0%）でした。点字使用学生では、現状も必要度も2008年度と同様に極めて高い値を示していました。墨字使用学生については、現状も必要度も2008年度に比べて高くなっていました。

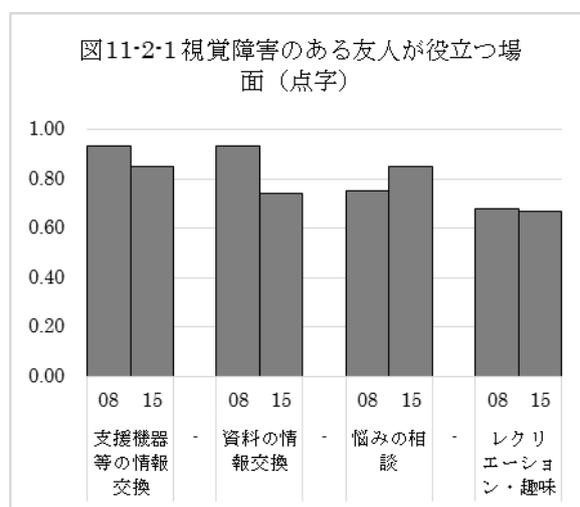
視覚障害学生は、一見、他の学生と同じ学生生活を送っていても学習手段は異なり、参加できる活動にも制限があります。したがって、視覚障害のない学生にはない悩みを抱えることも多いので、当事者の相談相手が必要です。しかし、視覚障害学生は各大学にごく少数しか在学していないことから、大学を超えた当事者同士のネットワークが重要と考えられます。



（2）役に立つ場面

視覚障害のある友人との関わりが役に立つ場面を、図 11-2-1（点字）と図 11-2-2（墨字）に示します。

点字使用学生では、「役立つ」と答えた人の割合の高い順にみると、2008年度は、「支援機器に関する情報交換ができる」0.93、「点字・拡大文字・録音等の資料の情報交換ができる」0.93、「悩みの相談がしやすい」0.75、「視覚障害者が参加しやすいスポーツ・レクリエーション・趣味等の活動ができる」0.68でした。2015年度は、「支援機器に関する情



報交換ができる」0.85、「悩みの相談がしやすい」0.85、「点字・拡大文字・録音等の資料の情報交換ができる」0.74、「視覚障害者が参加しやすいスポーツ・レクリエーション・趣味等の活動ができる」0.67でした。

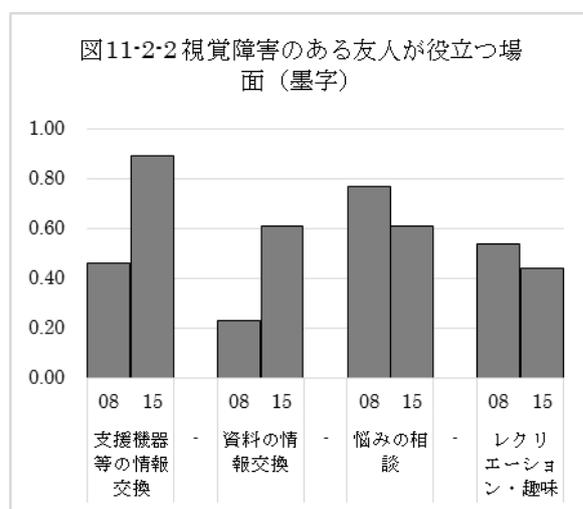
墨字使用学生では、割合の高い順に、2008年度は、「悩みの相談がしやすい」0.77、「視覚障害者が参加しやすいスポーツ・レクリエーション・趣味等の活動ができる」0.54、「支援機器に関する情報交換ができる」0.46、「点字・拡大文字・録音等の資料の情報交換ができる」0.23でした。2015年度は、「支援機器に関する情報交換ができる」0.89、「点字・拡大文字・録音等の資料の情報交換ができる」0.61、「悩みの相談がしやすい」0.61、「視覚障害者が参加しやすいスポーツ・レクリエーション・趣味等の活動ができる」0.44でした。

点字使用学生では、2008年度と同様に、「支援機器や資料に関する情報交換」や「悩みの相談」で高い割合を示しています。墨字使用学生では、2008年度は「悩みの相談」や「レクリエーション活動」の割合の方が、「支援機器や資料に関する情報交換」よりも高い最も高い割合を示していましたが、2015年度は「支援機器や資料に関する情報交換」の割合の方が高くなりました。点字使用学生も、墨字使用学生も、支援機器等を用いて学習することが増えてきており、学習に必要な資料や支援機器に関する情報交換が最も重要であることがわかりました。続いて、「悩みの相談」や「レクリエーション活動」等を通じて心理的安定を図ることを求めていると考えられます。

(3) 役に立つ場面に関する自由記述

視覚に障害のある友人との関わりが役に立つ場面についての自由記述には、「友人を通して他の大学の視覚障害のある人との人脈を広げられる」、「日常や大学生生活の情報交換ができる」、「共感してもらえる」、「大学に要望を伝える際に複数で訴えることができる」、「就職活動の方法や情報が得られる」、「障害を気にせず楽しく話することができる」等の回答がありました。

一般の大学に在籍していると、視覚障害学生が一人や少数であるということが多く、同じ障害をもつ友人との関わりが、心理的安定を図るためにも重要であるということがわかりました。



12. 大学生生活

大学生生活について、合理的配慮に関する説明および災害時の避難経路や手段に関する説明の現状について質問しました。また、学習や生活の支援に関する話し合いの頻度と相談できる組織や担当者の有無について質問しました。なお、これらは2008年度には調査項目に入っていませんでしたので、2015年度の結果のみを示します。

(1) 合理的配慮に関する説明

合理的配慮について、視覚障害学生本人および大学がどの程度意識しているかを、図12-1-1（点字）と図12-1-2（墨字）に示します。

図12-1-1 合理的配慮の意識(点字)

- よく知らない
- ▣ 言葉は知っているが大学から説明なし
- 説明を受けたが覚えていない
- ▨ 十分に説明を受けた

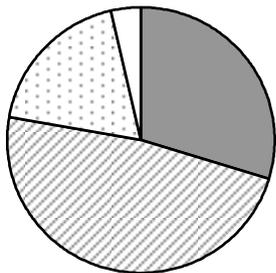
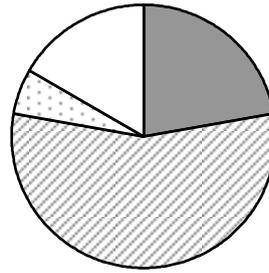


図12-1-2 合理的配慮の意識(墨字)

- よく知らない
- ▣ 言葉は知っているが大学から説明なし
- 説明を受けたが覚えていない
- ▨ 十分に説明を受けた



点字使用学生では、「合理的配慮という言葉をよく知らない」が29.6%、「合理的配慮という言葉は知っているが、大学からこれに関する説明を受けてはいない」が48.1%、「合理的配慮に関する説明を受けたが、あまり覚えていない」が18.5%、「合理的配慮に関する説明を十分に受けた」が3.7%でした。墨字使用学生では、「合理的配慮という言葉をよく知らない」が22.2%、「合理的配慮という言葉は知っているが、大学からこれに関する説明を受けてはいない」が55.6%、「合理的配慮に関する説明を受けたが、あまり覚えていない」が5.6%、「合理的配慮に関する説明を十分に受けた」が16.7%でした。

点字使用学生・墨字使用学生ともに、「合理的配慮という言葉をよく知らない」と回答した学生が2割以上いることがわかりました。また、半数程度の学生は、言葉を知っているだけで大学と合理的配慮に関する話し合いを行っていないことがわかりました。2016年度より障害者差別解消法が施行され、障害者から社会的障壁の除去を必要としている旨の意思表示があった場合には、必要かつ合理的な配慮を行わなければならないことが示されています。すなわち、障害のある学生が大学で学習する際には、学生本人が必要な配慮を意思表示し、大学が具体的にどのように対応するかを相談していくこととなります。しかし、

2015 年度の調査時には、視覚障害学生本人の意識があまり高くないことがわかりました。障害者差別解消法の趣旨を十分理解し、視覚障害学生本人が自分に必要な配慮をきちんと伝えられるようになること、大学側は障害学生が必要としている配慮内容にどのように対応できるかを相談する場を設けることが必要です。

(2) 災害時の避難経路や手段に関する説明

災害時の避難経路や手段に関する説明の程度を、図 12-2-1 (点字) と図 12-2-2 (墨字) に示します。

点字使用学生では、「まったくない」が 63.0%、「一度だけ」が 18.5%、「年に一度」が 18.5%、「年に数回」が 0.0%でした。墨字使用学生では、「まったくない」が 61.1%、「一度だけ」が 22.2%、「年に一度」が 11.1%、「年に数回」が 5.6%でした。

点字使用学生・墨字使用学生ともに、6割以上の学生が、災害時の避難経路や手段に関する説明を受けていないことがわかりました。年に一度以上説明を受けている学生は2割未満でした。近年、各地で震災が起こっていることもあり、いつどこで災害に遭遇するかわかりません。視覚障害学生の場合、災害によって変化した状況を把握することが難しく、周囲の人とともに避難できることが望ましいです。そのことを、視覚障害学生本人も、大学関係者も日頃から意識し、災害時には本人が周囲にサポートを依頼すること、周囲は視覚障害学生の安全を確認することが必要です。また、災害時に周囲に人がいないことも考えられます。基本的な避難経路を日頃から確認しておくことも重要です。

図12-2-1 災害時の説明(点字)

■まったくない □一度だけ □年に一度 □年に数回

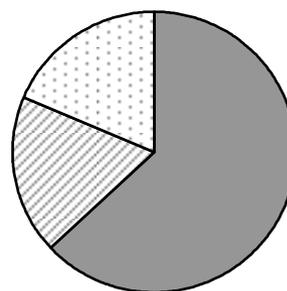
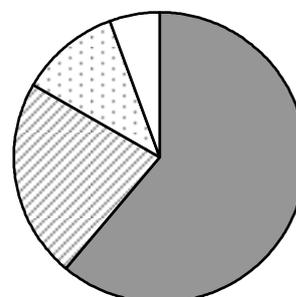


図12-2-2 災害時の説明(墨字)

■まったくない □一度だけ □年に一度 □年に数回



(3) 学習や生活の支援に関する話し合い

学習や生活の支援に関する話し合いの程度を、図 12-3-1 (点字) と図 12-3-2 (墨字) に示します。

図12-3-1 話し合いの頻度(点字)

■まったくない □入学時のみ □年に一度 □学期に一度以上

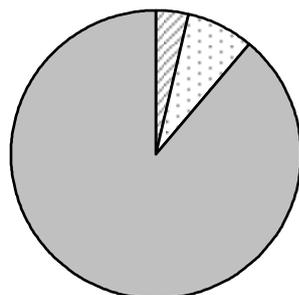
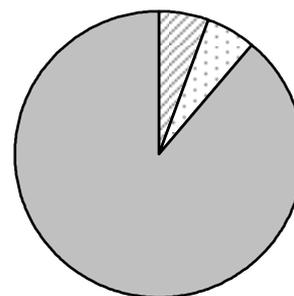


図12-3-2 話し合いの頻度(墨字)



点字使用学生では、「まったくない」は0.0%、「入学時のみ」が3.7%、「年に一度」が7.4%、「学期に一度以上」が88.9%でした。墨字使用学生では、「まったくない」は0.0%、「入学時のみ」が5.6%、「年に一度」が5.6%、「学期に一度以上」が88.9%でした。

点字使用学生・墨字使用学生ともに、8割以上が、学期に一度以上、学習や生活の支援に関する話し合いが行われていることがわかりました。また、点字使用学生1名と墨字使用学生1名を除き43名の学生は、継続的に相談できる組織や担当者があると回答しています。その中で、点字使用学生のうち15名と、墨字使用学生のうち12名は、障害学生支援室や障害学生担当の窓口で相談していました。多くの大学で、組織的に障害学生の支援が行われるようになってきていることがわかりました。他に相談している組織や担当者としては、教務課やソーシャルワーカー、カウンセラー、担任などが挙げられました。ほとんどの学生が困ったときにすぐに相談できる環境で学習していることがわかり、この状況が継続されることを望みます。

13. 高校時代に身につけておくべき力

大学生活を送る上で高校時代に身につけておくべき力について、自由に答えてもらいました。主な回答は以下の通りです。

- ・点字を正確に速く読み書きできる力
- ・漢字に関する知識
- ・教科書や参考図書を読んで、内容を理解できる力
- ・高校時代に学ぶ教科の基礎学力
- ・白杖を用いて単独歩行できる力
- ・交通機関を一人で利用できる力
- ・パソコンや点字ディスプレイ、携帯型点字端末を操作できる技術
- ・一般のワープロソフトや表計算ソフト、視覚障害者用のソフトウェアに関する知識
- ・わかりやすくノートを作成できる力
- ・レポートや論文について、レイアウトを含めた書き方に関する知識
- ・掃除、洗濯、料理、身だしなみなどADLの力
- ・自分の障害について説明し、配慮を依頼したい内容を適切に伝えられる力
- ・積極的に他の学生や教職員とコミュニケーションをとれる力
- ・単眼鏡などの視覚補助具に関する知識と、使いこなせる力
- ・視覚障害のある友人とのつながり
- ・自分が他の学生に対して手伝えることを見つけられる力

おわりに

大学に進学する視覚障害学生が増え、進学した大学で様々な支援を受けながら学習してきました。しかし、実際にどのような支援がどの程度行われているのか、視覚障害学生本人が希望している支援内容と合っているのかという分析は、2008年度に行われた「視覚障害学生実態調査」が初めてでした。2008年度の調査では多岐にわたる調査項目が作成され、講義や試験などの学習面、学内の施設・設備や支援機器などの環境面、友人との関わりなどの心理面という様々な面から、視覚障害学生が大学生活を送るために必要な支援について現状と本人の希望の分析が行われました。

2008年度の調査報告を通して、大学に進学した盲学校卒業生が、本人の希望通りの支援を受けられない中で、学習や生活をしている現状が明らかになりました。その結果を参考に、盲学校において指導する際にも、生徒が自分にとってわかりやすい手段を身に付けられること、大学で学習や生活をするというイメージを具体的にもたせること、できることやできないことを相手に伝えられることなどを意識するようになりました。

2015年度の調査では、視覚障害学生の生の声を聞き、本報告書をまとめるお手伝いをさせていただけるという大変貴重な機会をいただきました。このような機会をいただけたことで、視覚障害学生が実際に困っていることや工夫していることを、より具体的に知ることができました。例えば、支援機器の発達により、資料をデータでもらって独力で読めるようにはなっているが、それが決して最適ではないということ、視覚障害のない友人に自分の障害をどのように説明し、どこまで支援を求めてよいのか迷っているということ、周囲にサポートしてもらうことが多い中で、自分が周囲にできることは何かを考えていることなどです。そして、このような話を通して、大学進学を目指す生徒は、自分が学習しやすい環境や十分に実力を発揮できる状況を知っていること、その状況を整えるために大学に支援を依頼するときにはより具体的に伝えられようになっておくことが必要であると強く思うようになりました。

本報告書では、個々の学生の具体的なエピソードをすべて紹介することはできませんでしたが、視覚障害学生の生の声をまとめ、様々な場面において、点字使用学生・墨字使用学生それぞれの傾向を分析しました。大学で視覚障害学生の学習や生活の支援について検討される場合にはぜひ当事者の声に耳を傾けていただけることを願っています。その際には、本報告書も参考にしてもらえればと思います。特に、初めて視覚障害学生が入学する大学では、支援の体制が不十分であるのは当然です。最初からすべてを整えることは難しいですが、視覚障害学生のニーズの高い支援から少しずつ実現していただきたいと思えます。大学生活を通して視覚障害学生が成長するとともに、支援体制や支援そのものも一歩ずつ充実していくことを願っています。また、盲学校の教員としては、視覚障害に配慮した授業や行事を通し、生徒が、適切な支援があれば十分に学習や生活ができるということを実感できる体験を積み重ね、自分に必要な支援を自覚し周囲に伝える力を身につけられるよう、指導内容の充実につなげていきたいと考えています。(調査・編集担当 清和嘉子)

この資料についてのご質問や、さらに詳しい情報については、下記にご連絡下さい。

全国盲学校長会大学進学支援特別委員会事務局

(筑波大学附属視覚特別支援学校内 TEL 03-3943-5423, FAX 03-3943-5410)

シリーズ 視覚障害者の大学進学 別冊

「視覚障害学生実態調査報告書」(平成29年6月29日改訂)

発行者

全国高等学校長協会特別支援学校部会

全国高等学校長協会入試点訳事業部

全国盲学校長会大学進学支援特別委員会